

219

納本

334
62

中孝著

米國怖るに足らざる



始



特 230
837



池崎忠孝著

米國怖るに足らず

先進社



池崎忠孝著

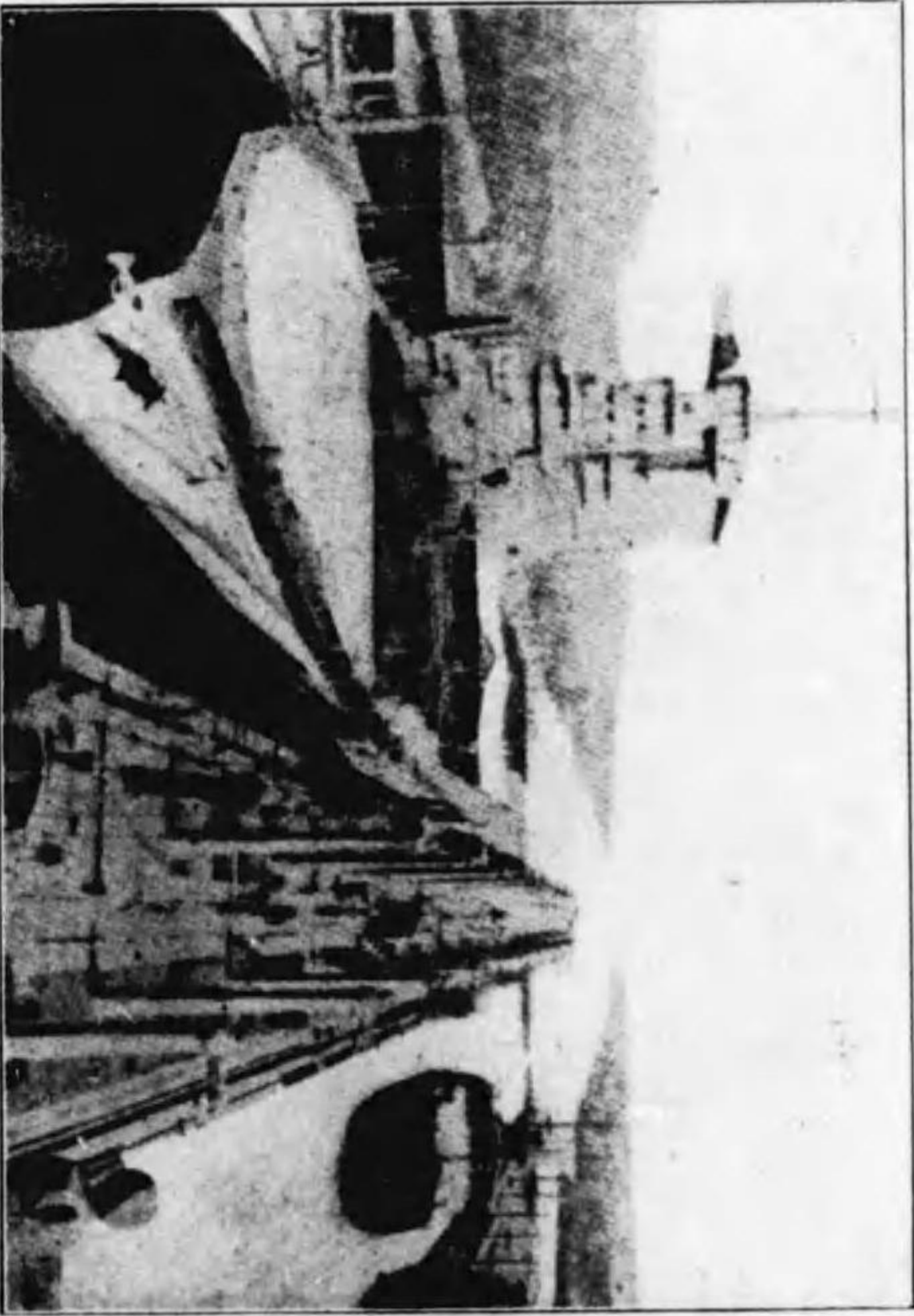
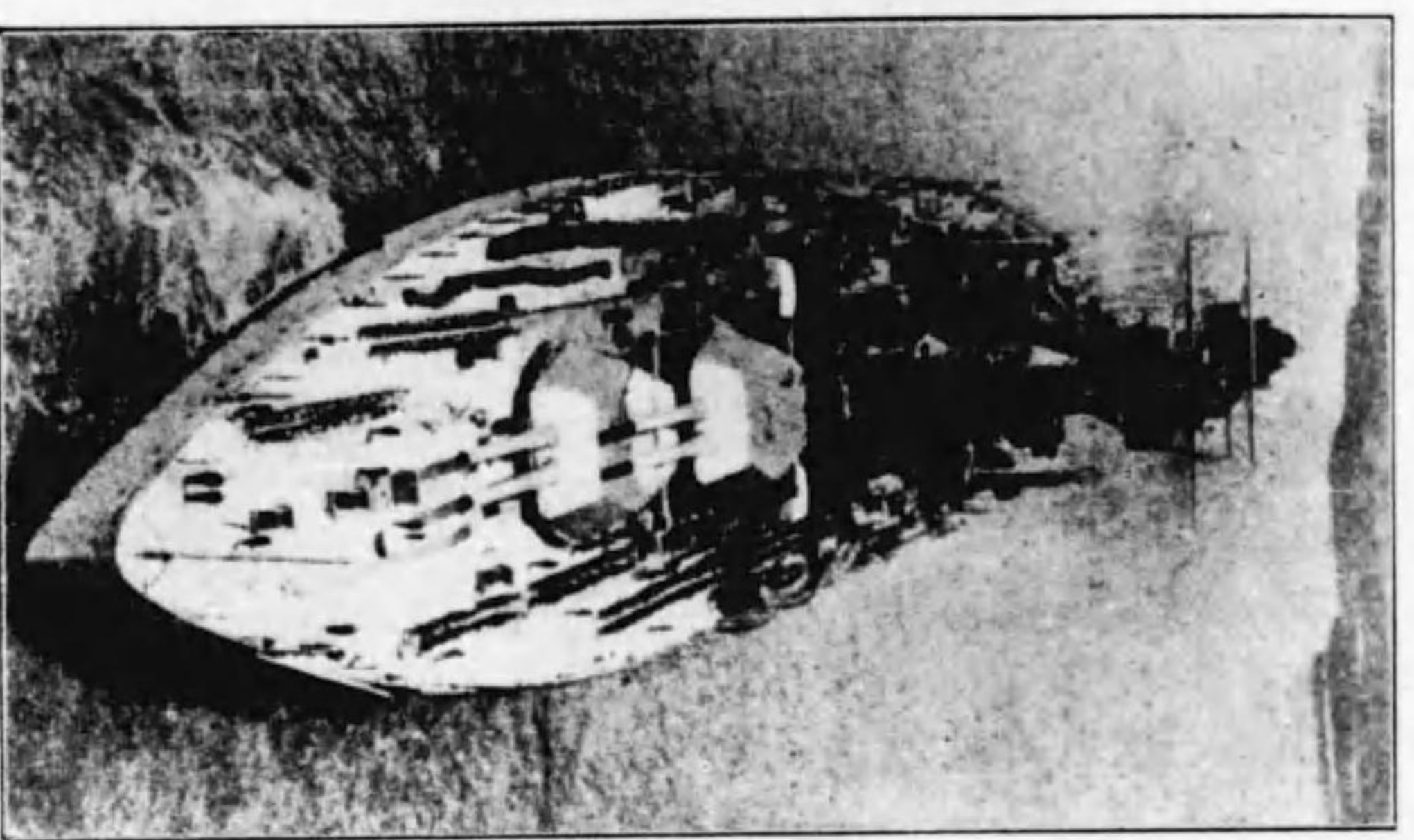
米國怖るに足らず

先進社

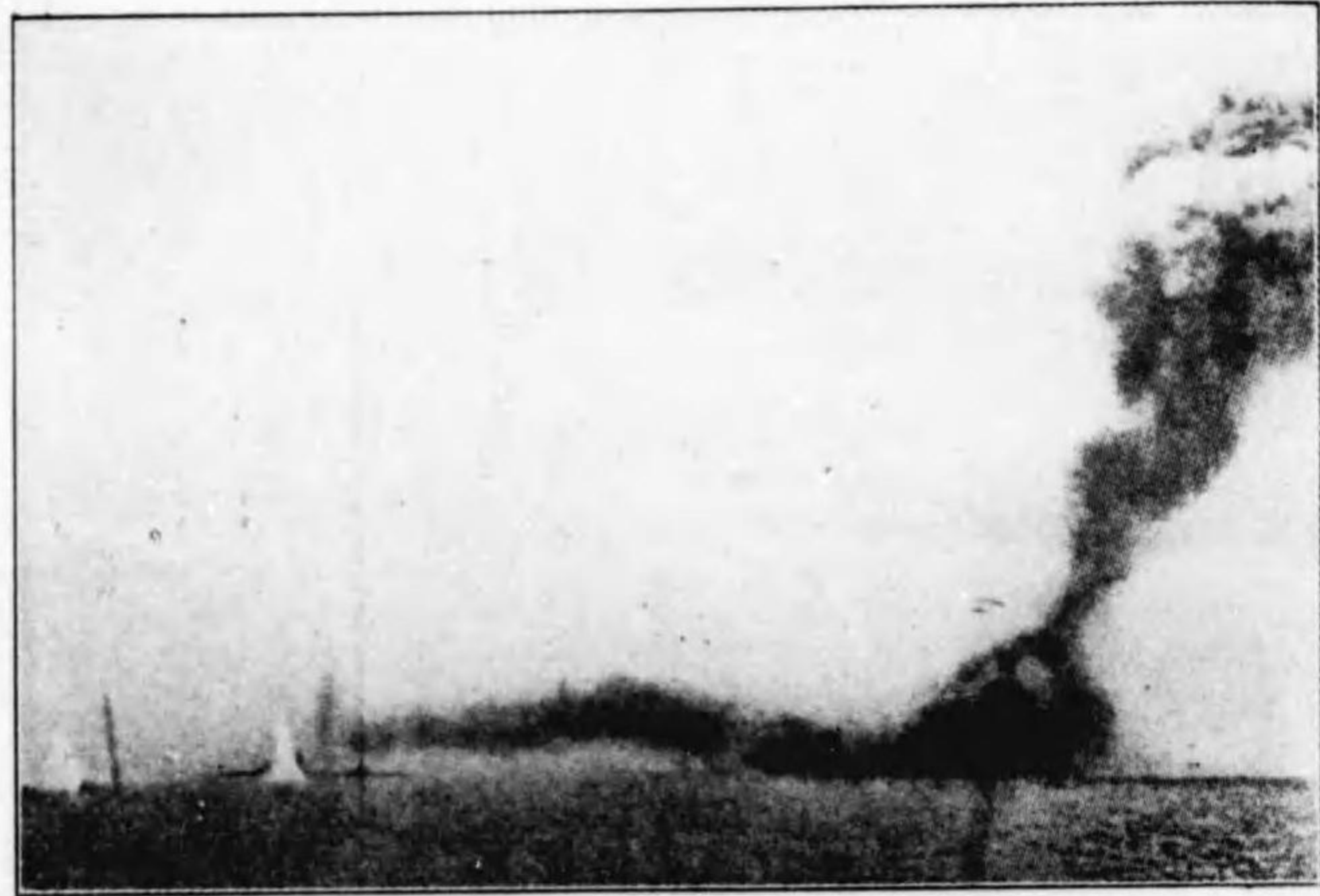
米國海軍の巨艦

新造の巨艦

米國戰艦ウエスト・ヴァージニア
 排水量三萬二千六百噸、十六吋砲八門、速力二十一節。一九二二年ニ
 ユーリポイントに於て進水したる最新最鋭の戦艦にして、わが陸奥、長門
 に對抗するものなり。

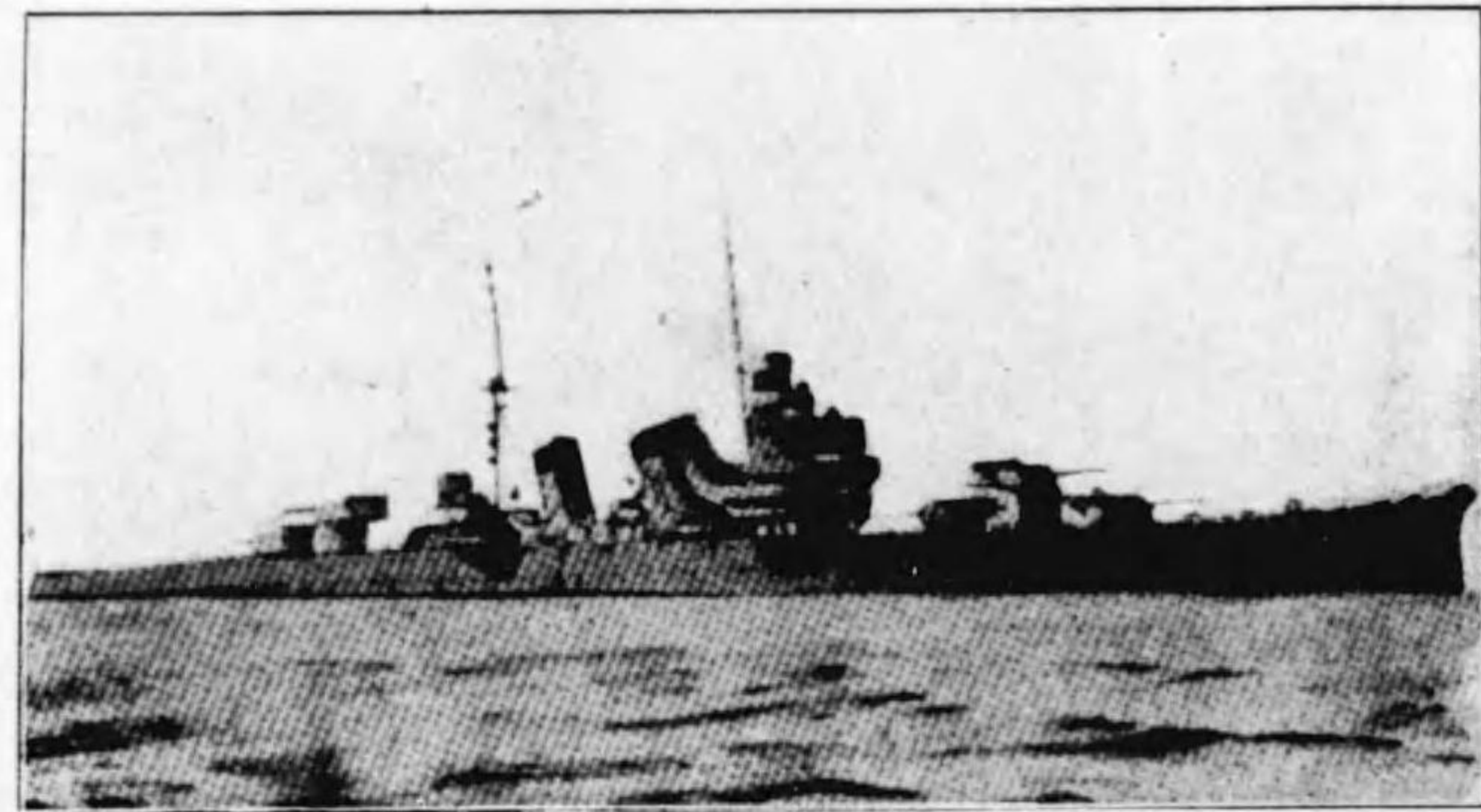


景光るす航通を河運馬奈巴ガトヲサ艦母空航國米
 ヌニ年五二九一。半筒三十三力速。門八砲吋八。噸千三萬三。排水排
 の (Catapult) 器出射機行飛。リナなのもるたし水進て於にクニ。一
 對に艦大の種此。るらへ傳としべ得し載搭を機二十七。し有を置裝
 。しべる見をるけつ近に度限早最員師の河運馬奈巴。はてし



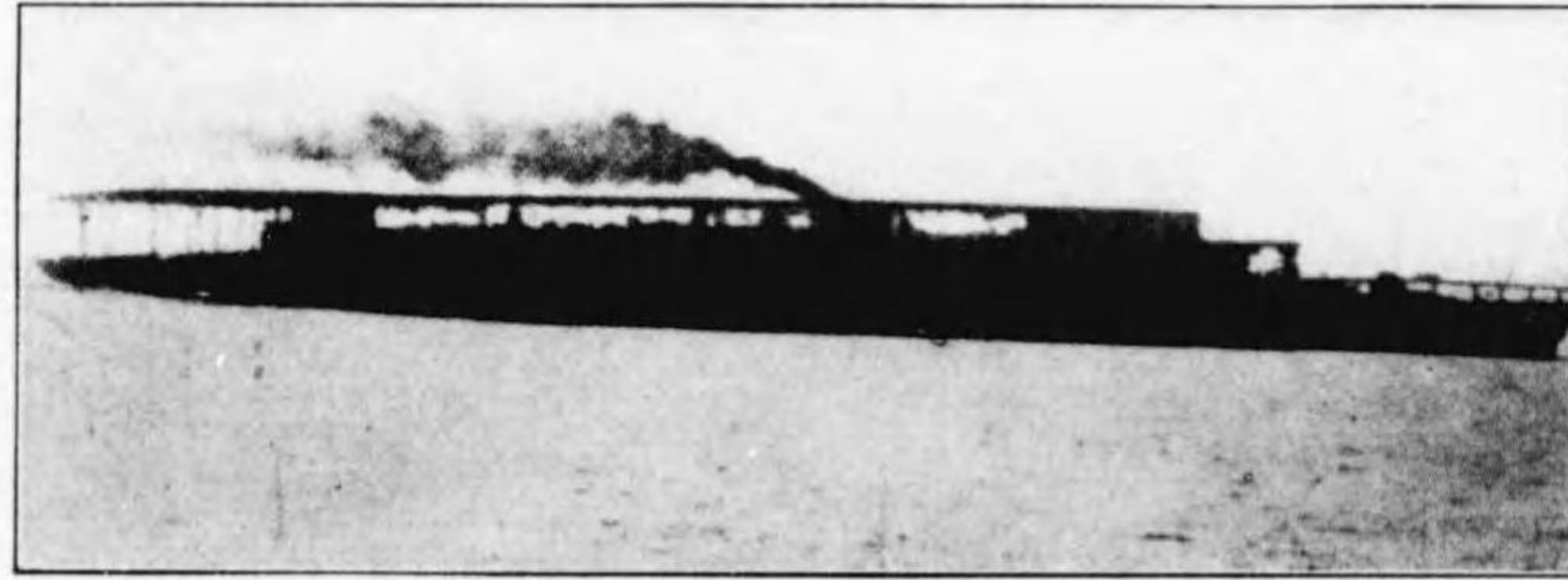
景光の没沈ーリメ・ンキク艦戦洋巡國英

イデリ艦逐驅の國英 .時の戦海ドンラトツユジ .は眞寫るな奇珍此
 ービはるゆ見に方左てつ向 .りなのもるたれき影撮てつよにドーア
 メ・ンキクはるゆ見に方右てつ向 .てしにンオイラ艦旗の督提ーチ
 ク .は底基の煙爆 .りな煙爆きべる恐るたじ生てつよに發爆のーリ
 。しべる知とのもす示を呎五七六さ長のーリメ・ンキ



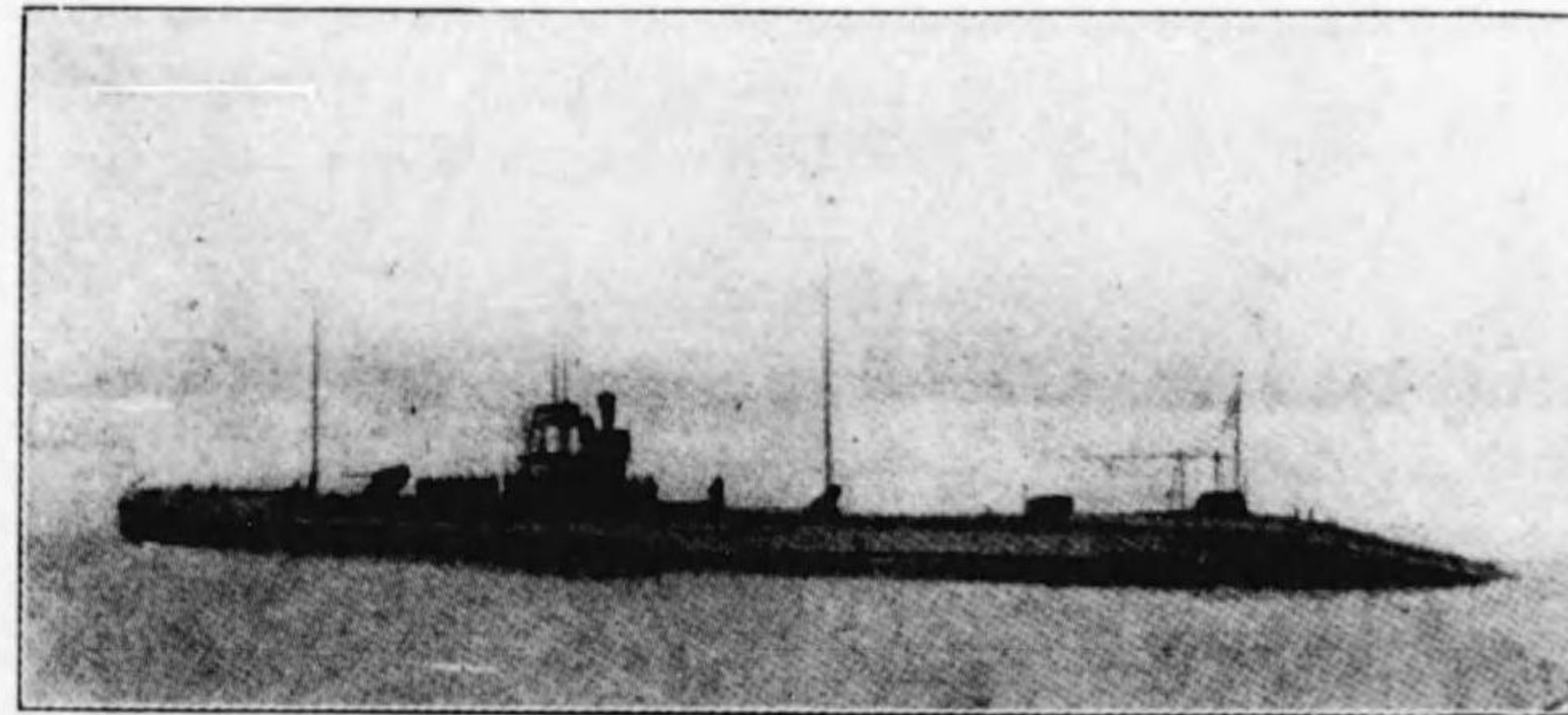
智那艦洋巡等一

に廠工吳月六年二和昭 .節三十三力速 .門十砲吋八 .噸萬一量水排
 ・トルソ .ラコサンベの國米 .てしに艦洋巡の式新最るたし水進て於
 就に題問縮々軍海 .下目 .りなのもるす抗對にどなーチシ・キーレ
 しべる見と型典一の艦洋巡級噸萬一謂所ゝるき傳喧に間國軍海大て



航 空 母 艦 赤 城

二銃關機 . 門二十砲角高 . 半節八十二力速 . 噸百九千六萬二數噸水排
 八八 . 果結の議會府華 . 工竣て於に廠工吳 . 月三年二和昭 . す有を門
 。リなのもるたしと艦母空航てし造改を艦戰洋巡の畫計隊艦



一 等 潜 水 艦 伊 號 第 二 十 一

戸神月一十年五十正大 . 明不裝兵及力速 . 噸十五百一千一量水排
 小も最中艦水潜洋航謂所 . リなのもるたし水進て於に所船造崎川
 。リなのもるす屬に型

自序に代へて

一九一九年、巴里に於て平和條約の締結さるるや、樂天家の多くは、好んで世界永遠の平和を口にしたりき。しかも戰雲容易に斂まらず、彼等の失望をして大ならしむるところありしが、ロカルノ條約の成るに迫り、彼等は再び戰爭の絶滅を信じ、これを以て平和の星の出現する新しきベツレヘムなりと言へり。されどもロカルノ條約の後、世界は果して黎明の讚歌に充つる平和の樂園となりしや。國際聯盟規約と言ひ、軍縮條約と言ひ、不戰條約と言ひ、戰爭を咒ひ、平和を熱禱する文書は積んで山をなすに拘らず、世界は依然として不安に、依然として危惧の裡にあり。

歐羅巴大陸を見よ。古き敵對觀念は未だ眠りつつあるに、新しき敵對觀念は已に出陣を豫報するドラム・ビートの音と化しつつあり。佛蘭西の憂慮と、獨逸の怨恨とは、たゞ僅かに輕減されたるのみ。東部及び中部の宏大なる歐羅巴平原は、新しきアスピレ

ーションに燃ゆる多くの新國民によつて反目逆視の巷となり、北方の勞農帝國露西亞は、今も尙ほ自ら求めて離群索居を樂しみ、徒らに大兵を擁して世界に挑戦せんとす。英國と佛蘭西とは如何。佛蘭西と伊太利とは如何。英、佛、伊の三國が強靱なる紐帶を以て結ばれ、歐羅巴の幸福を維持するために不斷の友誼を訂しつつありと信するものあらば、彼は未だ以て國際間の情偽に通ずるものとなすべからず。試みに一嚮の肉を得て、彼等の中に投ぜよ。一見禮儀と謙讓とに充てるがごとき彼等の態度は、卒然として本來の野性を曝露し、自己の飽くなき食欲を満足せしむるが爲には、進んで腕力をも辭せざる淺間しき光景の現出するを見ん。平和は唯だ言葉のみ、未だ事實にはあらざるなり。

豈獨り歐羅巴大陸とのみ言はんや。平和は曾て太平洋の理想なりき。しかも今に於て那邊にか平和ありや。東より來る英國は、新嘉坡を金城湯池として太平洋のジブラルタルたらしめんとし、西より來る米國は、布哇を難攻不落の險塞として太平洋の

ルタたらしめんとし、この二大勢力の挾撃に愕きたる日本は、戰々恟々として自ら衛るに寧日なきにあらずや。新たに眼醒めたる支那は、一世紀に於て喪ひたるところを一日にして恢復せんがために狂燥なる妄動を續け、奪はれたる印度と比律賓とは、自己の自由を拘束する鐵鎖を断たんがために、絶えず無益の努力を試みつつあり。果して何れの地に於てか、歡語と親和との美しき狀景を見るべき。永遠の平和は、單なる巧言令色によつて將來され得るものにあらず。百の條約を結び、千の協定を作るも、それが眞に世界に儼存する不正不義を匡正する何等の力なきに於ては、終に一片の空文にだにかかざるなり。一方には世界永遠の平和を希ひ、一方には眼を瞑つて世界に儼存する不正不義を視ざらんとするがときは、要するに得手勝手なる利己主義のみ。かかる利己主義にして絶滅せざる限り、世界は尙ほ多くの是正を必要とし、尙ほ多くの流血を必要とす。

世界の人類約十七億、その三分の二を占むる所謂有色人種の大部分が、所謂白色人

種の鐵鞭によつて驅役せられ、永遠の桎梏の下にあつて暗黒なる運命に呻吟する限り、その深怨、何れの日に於てか必ず爆發すべきは瞭らかなり。最高の文化と、最高の經濟組織とを有する民族は、世界の他の民族に對して屈從を強ふる絶對權を有せりとの謬想は、世界の平和を將來する上に、最大の障礙なることを知らざるべからず。世界を擧げて奈落の業火に投すべき人種戰爭の慘禍を避けんと欲すれば、白色人種は直ちに有色人種に對する冷酷なる統御と苛棘なる擯取とを中止し、彼等が獨占する國土の總てを開放して、全人類の共益のために提供する覺悟なかるべからず。何の特權あつてか、彼等は世界の大部分を獨占せる。猫額の地に唸鳴して耕すに土地なく、食ふに食物なきを悲しめるもののある時、彼等は豊富なる土地資源を占有し、その多くを尙ほ原始のまゝに放擲するに拘らず、進んでこれを開發せんとするものあらば、常に辭を構へて排斥をこととす。專恣に非ずして何ぞや。

殊に、甚しきものはアングロ・サクソン民族の跋扈なり。彼等は總人口僅か二億に

過ぎざるに、世界の總面積の約三分の一を占むるのみならず、その強大なる海軍力によつて海洋の殆んど全部を私し、大西洋は勿論、北海、地中海、印度洋のとき、今や一として彼等の領海化せられざるものなし。しかも食禁飽くを知らざる彼等は、世界の最大海洋たる太平洋をも自家の領海として、こゝに國する總てを囊中の鼠たらしめんとす。彼等は既に宏大なる資源を獨占し、宏大なる市場を獨占し、さらに進んで宏大なる海洋をも獨占せんとす。かくて資源なく、市場なく、海洋の自由なきものは、止むなく退いて餓死すべしとせば、世界は争でか桃源の夢に飽くを得んや。死を決するところ、自ら救ふの道あらん。平和の星の輝くベツレヘムは、飢民の骸を礎石として建設さるゝものにあらざるなり。

米國は、皮膚の色の彼等のそれと異なるの故を以て、吾人を排斥したる國なり。米國は、門戶開放の美名を假りて、吾人が多大の犠牲を拂ひて得たる極東の利權を掠奪せんとする國なり。米國は、自國の安全を名として、太平洋を自家の池沼たらしめんと

する國なり。米國は、彼等の國民一億一千万人の安寧と幸福のために、吾人の同胞七千万人は須らく自裁すべしと強要する國なり。國家の體面、民族の矜持は、今姑らくこれを措く。吾人は假令道途に餓死するの虞れありとも、尙ほ米國の暴戾を忍ぶべしとする何等かの理由有りや。個人に自衛權あらば、國家にも自衛權あり。個人に生存權あらば、國家にも生存權あり。自衛と生存とのために、止むなく立つて戦はんとする事あるも、果して何の不可かこれあらん。余が大聲叱呼して七千万同胞に慰へんとする所以なり。

昭和四年八月中泮、浪華の僑居に於て、

著 者

凡 例

一、本書を編むに當つて参考に供したる書物は、その數多きが故に一々掲記するの煩に堪へざれども、特に益を蒙るところ多かりし邦文の著三四を擧げて、予が感謝の意を致さんとす。

- 「日 米 一 戰 論」 川 島 清 治 郎 氏 著
- 「日本は負けな」 石 丸 藤 太 氏 著
- 「東 郷 元 帥 詳 傳」 小 笠 原 長 生 氏 著
- 「ジュットランド海戦の研究」 日 高 謹 爾 氏 著

前記の中、予が負ふところ最も多かりしものは川島氏の著「日米一戰論」なり。その他、外交時報、國際知識、國際時報などに掲載されたる諸家の論文中、予に對して益を與へたるもの甚だ多し。坂本俊篤氏の文のごとき、その一例なり。

二、本書に掲載されたる日米海軍の現勢は、主として左の二者が記載するところに従へり。

Brassey's Naval & Shipping Annual. 1929.
海軍及海事要覽 昭和四年版

米國海軍の現勢は多く前者の記載に據り、日本海軍の現勢は多く後者の記載に據れり。

三、本書中歐洲大戰に關する事項は、主として左記の數著に基き、二三の他書を參考に供せり。

Winston S. Churchill: World Crisis. 5 vols.

H. W. Wilson: Battle-Ships in Action. 2 vols.

Adm. R. N. Jellicoe: The Grand Fleet.

四、本書の敘述に對して必要なりし地理學上の數字及び記載は、多く左の書籍の載するところから従へり。

The Statesman's Year-Book. 1923.

Whitaker's Almanack. 1923

日本帝國統計年鑑 昭和三年度版

- 五、本書の末尾に附したる太平洋戰略地圖は、Hector C. Bywater: Sea-Power in the Pacific. に挿入したる地圖に基き、多少の省略を行へり。
- 六、本書の著者は一介の讀書子に過ぎざれば、もとより軍事上の知識に疎き局外漢なり。故に、本書の記述中には、勢ひ多くの誤謬、多くの誤解なきを保し難し。親切なる讀者諸君にして、それらの缺陷を發見せられたるの士は、予の蒙を啓くがため、特に教を垂るるの勞を吝むことなかれ。予は欣んで識者の是正を仰がんとするものなり。
- 七、本書の文體は特に平易を旨とし、一般の繙讀に資するところあらんと試みたり。行文精彩を缺くとの批難は、素より甘受するところなり。
- 八、本書の出版に當つては、詞兄森園豐吉氏の好意ある斡旋に負ふところ極めて多し。厚く感謝の意を表す。

英國は、太平洋に於て獨立の行動を爲し得る唯一の歐洲の強國である。明かに太平洋を支配する競争は、英國と合衆國との間に存在してゐる。その競争を論ずることは、太平洋の眞の問題を論ずることである。それは友誼を破る虞れなくして、坦白に出来ることゝ私は信じてゐる。大西洋の兩側に於て、當面の問題を快く協議することは、文明に對して至大の貢獻をすることになるであらう。何故なれば、兩強國は共に太平洋を獨占せんと用意し何れの強國も他の強國に反對してはそれが出来ず、さうして平和的な解決は、唯だ相互の隔意なき理解の上にのみ出来るやうに考へられるからである。

——サー・フランク・フォックス『太平洋の覇權』——

目次

第一章 ハリマンの夢……………(一)

帝國建設者ハリマン——日露戦争と米國——危險なる敵——桂・ハリマン
 覺書——小村外相の殊勳——日米外交の紛糾——移民問題——ビトキンの
 警告——サローの豫言——日本の人口問題——好戰國アメリカ——惡魔を
 警戒せよ——米國の暗黒面——正義人道の裏

第二章 日米必戰……………(一五)

羅馬とカルタゴ——青年國家——強大なる力の意識——排日論者——戰勝
 病——米國人の貪婪——國民の矜持——太平洋時代來る——エミール・ラ
 イヒの名言——米國はアキレスに非ず——天命に従へ

第三章 陸戦か海戦か……………(二六)

豫想の困難——日米戦争の假想圖——陸戦の不可能——戦争の決定的要素
 としての海戦——日米戦争の主役は海軍——ヘクトル・バイウォーターの

第四章 日米海軍の現勢……………(四)

華盛頓會議——佛國の憤慨——英國海上王たる地位を失す——日本海軍の主力艦——米國海軍の主力艦——日米主力艦隊の砲力——日本海軍の補助艦——米國海軍の補助艦——セネバ會議——日米海軍の編成

第五章 日米の海軍根據地……………(五)

スカバ・フロートクロマーチー——カヅイテ軍港——グアム——アラスカの根據地——布哇の眞珠港——ビニーゼット・サウンド——桑港——サン・ディーゴ——巴奈馬運河——日本の防備——東支那海の閉鎖——小笠原群島——日本海の安全——日本國防の最終線——海軍力と海軍根據地——新嘉坡根據地

第六章 開戦の時期……………(七)

歐洲大戰と獨逸の動員——戰爭原因——積極的に立つ機會を與へられる日

第七章 比律賓及びグアムの占領……………(八)

本——米國艦隊の合同——巴奈馬攻防演習の想定——寛仁なる日本外交——日本の開戦すべき三個の時期——眞珠港の策戰的位置——米國艦隊が比律賓に據りたる場合——獨逸の作戦——日本に對する比律賓及びグアムの重要性——ルーズヴェルトと比律賓——米國人の危機

第八章 貿易破壊戦……………(九)

持久戦——貿易破壊戦——獨逸の貿易破壊戦と聯合國——米國の破壊すべき日本の貿易路——歐洲航路——濠洲航路——安全なる日本の貿易航路——西米航路——日本の破壊すべき米國の貿易路——極東航路——濠洲航路——南洋航路——印度航路——日本の奇襲艦艇と兩米航路——貿易破壊

戦に於ける日本の有利なる立場——日本一文も消費せず

四

第九章

比律賓の奪還は可能なるか

(一三三)

ウキルソンの樂觀論——米人自己の力を過信す——戦争と輿論過重の弊害
——比律賓奪還軍の組織——三百隻の大艦隊——南洋委任統治諸島の任務
——渡洋作戦の困難——ルーズヴェルトの言——渡洋艦隊と夜襲——最も
危険なる場合——マヘン提督那翁の渡英作戦を評す——比島に於ける日本
陸軍の防戦——日本陸軍の眞價——小笠原占領の困難——北海道占領は不
可能なり——持久戦となりし時の日本の利益——米國艦隊の苦惱——日本
艦隊の所在不明——バイウオーターの假想艦隊——米國艦隊の唯一の策

第十章

日本の攻勢的防禦

(一三二)

攻勢的防禦の作戦——獨逸海軍の攻勢的防禦——獨逸海軍の失敗——日獨
兩國の立場の相違——日本の艦隊保全主義——日本潜水艦の威力——敵勢
削減の一方——獨逸潜水艦——ツツイラの遠征——アラスカ遠征——
「太平洋戦争」の謬妄——日本は現状維持に満足す——危険なる日本の國
民性——日本自重を要す——比律賓の眞價——日本艦隊は獨逸艦隊にあら

ナ

第十一章 日米海軍の實質

(一三六)

日米主力艦の比較——米國の老朽艦——巡洋戦艦なき米國海軍——米國主
力艦の速力——日米主力艦の射程——日米巡洋艦の比較——大艦巨砲主義
——製鐵術の進歩——一萬噸巡洋艦の威力——優勢なる米國驅逐艦——日
米の航空母艦——優勢なる日本潜水艦——弱國の武器——釣合ひよき艦隊
——脂肪性肥滿質の米國海軍

第十二章 砲後の人

(一三四)

實戦に堪へるとは何ぞ——砲術——低劣なる英國海軍の砲術——對馬海戦
に於ける日本艦隊の砲術——東郷元帥の名言——米國海軍の砲術如何——
日本海軍將校の自信——日本海軍の訓練——獨逸海軍の缺陷

第十三章 攻撃的精神

(一三五)

ジュットランドに於ける英國海軍——獨逸海軍の攻撃的精神——日本海軍
の戦士——海に縁遠き米國——米國海軍の乗員不足——海運國としての米

五

國——ブリュール・ジャケットの精神——人的素質悪き米國海軍——海の勇者たる日本海軍の戦士——日本海軍は敗れず——劣勢艦隊必ずしも負けず——ジュットランド海戦の教訓

第十四章 最善の開戦時期

(121)

米國艦隊の合同以前——米國艦隊の合同に要する日子——巴奈馬運河の破壊——ミツチエル大佐の桑港閉塞論——ケーブ・ホーン迂回の危険——日本潜水艦の威力——最善の開戦時期を逸びたる時の利益——「止め」の武器たる航空機——最善の開戦時期を逸する勿れ

第十五章 最悪の開戦時期

(122)

米國艦隊馬尼拉灣に據りたる場合——日本を屈服せしむる二つの方法——封鎖しがたき東支那海の航路——日本を封鎖するに要する海軍力——日本艦隊の對策——自國の海面に於て戦ふ大利益——日本海軍全能——日本國民は忍耐を要す——日本國民の氣性——米國艦隊の困難——最悪の開戦時期を避くべし

第十六章 難攻不落の日本

(123)

日本の戰略的地位——米國の専門家日本を知る——島國としての利益——日本と英國——日本の二重防禦——不可能なる上陸作戦——フレッチャー提督の名言——遠征の成功しがたき實例——金の魔障より覺めざる米國——難攻不落の日本——英米兩國海軍に對する場合——ピトキンの批評——日本は負けず——布哇の攻落——米國西海岸の攻撃——米國の絶望戦

第十七章 列國の向背

(124)

米國政治協會の決議——ミラード博士の戰策論——青年支那の態度——孫文米國を識る——露國の態度——日露協定と米國——露國と印度——ソヴイエット。ロシアの理想——スラブの沈鬱なる魂——ブランドスの名言——英國の向背——危殆なる英米關係——トロツキの擲論——日米戦争と濠洲及び加奈陀——參戰による英國の利益——英國の東洋貿易——印度の擾亂——世界戦争となる危険——英國優秀なる戰略的地位を失ふ——英國の執るべき態度——世界に於ける反米熱——ラテン・アメリカ——黒人間題——朝鮮人

第十八章 理由なき恐米論

八

(二五)

巨物崇拜——大ゴライアスを征服した小ダグイター——現代の大ゴライアス米國——復興の土耳其——恐米論者の常套語——歐洲戦争と軍費——日米兩國の富——日米兩國の軍費——遠距離作戦と軍費——米國海軍の振はざる理由——戦時に於ける日本の貿易——獨逸と日本との相違——經濟力——金解禁問題——スベングララーの批評

第十九章 日本窘窮せず

(二七〇)

原料問題——棉花——米と羊毛——食糧品の管制——ノルマン・エンゼルの言——石油の供給——英國の参戦と石油——軍艦製造——兵員の養成不可能なり——フィスク提督の自慢——假想巡洋艦の價値——日本優秀船に乏し——八方踏みとなる勿れ——日露戦争を決行した勇氣を學べ

第二十章 米國怖るゝに足らず

(二八五)

本論の要約——日本は斷じて負けず——戦争は永續せず——「亞細亞人の亞細亞」——一戦を辭せざる覺悟を有て——ブランド日本を知る——自衛

權の發動——國家と民族との間の階級戦——米國の奇怪なる帝國主義——日本の運命を信ず——老帝國日本——新興帝國日本——日本は決して小ならず——日本の使命——アングロ・サクソンの専制——「明日の戦争」に對する準備——國民全體の戦ひ——思想的颯風を怖れず——米國人の愛國心——白色八種結束して來れ——明治大帝の御精神

第一章 ハリマンの夢

ポーツマウスに於ける小村全權の功過に就ては、今も尙ほ批評を免れにくい状態でありませが、米國の鐵道王イー・エッチ・ハリマンによつて企てられました滿鐵乗取計畫が、未だ大事に至らずして叩き潰されましたのは、全く彼の努力によるものであることを疑ふ人はありません。

今日から考へますと、幾萬の生靈と幾十億の國帑とを犠牲にして漸く獲ちえました南滿洲の利權は、實に風前の燈火にも等しい危険な状態にあつたのであります。日本最負の老記者ジョージ・ケンナンは、ハリマンを評して一個の帝國建設者(Empire-Builders)であると申して居りますが、彼の途徹もない夢想が實現して、一九〇五年十月十二日桂首相とハリマンとの間に交換された覺書が物と言ふことになりますと、今日の滿洲は已に遠き以前に於て米國

のものになつて居りますか、それとも日本は日露戦役の瘡痕が未だ癒えないのに、またく自國の安全のために奮起して、米國との間に高價な戦ひを繰返さねばならないやうな苦しい端目に陥つてゐたでありませう。

日露の兩國が極東の戦場に死闘してゐる時、米國の上下を擧げて我國に寄せた同情と後援とは、たしかに同盟國たる英國の遠く及ばなかつたところでありました。その當時の狀態を知るものから申しますれば、太平洋の波は永遠に靜かで、この大洋を隔てた日米兩國の間柄は永遠に渝らない友情を以て結ばれてゐるかのやうに見えました。けれども個々の人間を支配する心理は、國家や國民の間にも共通するものと見えまして、日本の上に惠まれた過度の成功は、遂に米國及び米國人の嫉妬心を挑發することになりました。對馬海戦の赫赫たる捷報が米國に達した時のことでもあります。紐育ジョーナル紙は、その紙面に於て對馬海戦の結果を論じ、「歴史は尙作られつゝあり。……小なる日本が海に陸に如何に露國を破りたるかを見よ。……本海戦は一新時代を劃するものなり。……試みに今日紐育の街頭に出でよ。」

各人皆日本人の成功を聞きて微笑しつゝあるを見ん。」と褒め揚げた後で、「或人は語りて曰はん。危険なる敵太平洋に現はれつゝあり」と結んでゐるのであります。この一節を讀みますと、日露戦役の末期に於ける米人の複雑微妙な心理狀態が、まさしくと眼前に描き出されるやうな心地が致すのであります。

日露の兩全權がポーツマウスに會合して、いよいよ多難な媾和協定に入らんとする頃になりますと、日本に對する米人の友情は頗る冷却して、遂には露國の利益を擁護するためにウキツテ伯を聲援するものさへ續出するやうになりました。それと同時に米人有力者の間には、戦役中に於ける日本應援の代償として、いはゆる獅子の分前に預らうといふ狡い考へを起すものもありました。駐日米國大使グリスカムの招きによつて鐵道王ハリマンが日本訪問の途に上りました時、彼の頭の中に描かれてゐました計畫は、媾和條約の結果として當然日本が獲得すべき南滿鐵道を共同經營の名によつて自分の手に收め、東清鐵道を賣收し、シベリア鐵道の運輸權をえ、かくて自分の經營する太平洋郵船會社の航路と聯絡して、米國資本主

義の主權下に世界を一週する大交通路を開き、弗の威力を普ねく北半球に伸張させようといふ途方もない妄想でありました。日本に於けるハリマンの大計畫は易々として進行し、一人の大浦兼武子を除くほか、當時の元老大官連の中で誰れ一人彼の大計畫が齎らす戦慄すべき結果に就て豫測しえたものではありませんでした。一九〇五年十月十二日、いはゆる「桂・ハリマン覚書」をポケットにして日本を去りました彼は、心翫かにわが事就れりと微笑したに相違ありません。

このハリマンの妄想的帝國が、彼の出發から三日遅れて日本に歸着した小村外相の手によつて一撃の下に粉碎されたことは、我國にとつて此上もない仕合せでありました。ハリマンの乗船サイベリア號が桑港の埠頭に着いた時には、すでに「日本政府は、該覚書に就て再考を要する」旨の電報が彼の歸着を待ち受けて居り、翌一九〇六年一月十五日には、正式に該覚書の發効を否定する添田壽一氏の電報が、紐育の事務所に於ける彼に最後の宣告を與へたのでありました。小村外相の一撃によつて獅子の分前を逸したハリマンの憤懣は、素より

想像するに難くありません。彼は一縷の希望を同年の春日本訪問の途に上つたヤコブ・シツフの努力に繋いでゐたと想像すべき理由があります。シツフの主宰するクーン・ロエブ商會は、日露開戦の初めに當つて國債募集のために渡米した高橋是清氏に對し、最初から最も好意ある援助を與へた金融業者の一人でありました。けれども小村外相の意志は大局に當つて國家百年の大計を誤るほど脆弱ではありませんでした。彼は斷乎としてシツフの提言を斥け、「桂・ハリマン覚書」は永久に一片の紙ぎれとして葬り去られることになつたのであります。

ハリマン事件は、單に日露戰役當時の外交秘史の幾頁かを占める隠れた事實に過ぎないやうであります。けれども事件の真相に就て正しい理解を有つてゐるものゝ眼から見ますと、この事件は、慥かに日米外交史の上に重大な轉機を劃したものであることを認めるに相違ありません。徳富蘇峯氏のごときも、一九〇七年大統領ルーズヴェルトが日本威嚇の目的を以て送つた米國艦隊の日本訪問は、その眞の動機が全くハリマン事件にあつたかのやうに説い

てゐるのであります。

彼自身に關する限りに於ては、一九〇九年に於ける彼の死とともに當然消滅すべきはずでありましたハリマン的妄想は、厄介至極にも彼の後繼者によつて引續き承繼され、いはゆる米國の極東政策なるものに姿を變へて、爾後二十年間の日米外交史を紛糾の裡に陥れたのであります。こゝにはその個々の經過に就て詳説する餘裕はありませんが、一九〇九年十一月の滿洲鐵道中立の提議、一九一〇年四月の錦愛鐵道協定、一九一四年二月の三都澳軍港問題、また一九二四年以來の懸案たるフェデラル無線電信問題、それらのものは要するに皆ハリマン以來の妄想が事々に變つた形を有つて現れて來たにすぎないのであります。

これに加ふるに、一方では一九〇〇年に始めて桑港に萌芽した日本移民の排斥運動が、年とともに猖獗の度を高め、一九〇六年には日本學童の排斥となり、一九〇七年にはルート國務卿と高平大使との間に結ばれた紳士協約となり、一九一三年には土地所有禁止法となり、一九二四年には最後の移民排斥法となつて、ます／＼日米間の國交を危殆に陥らし

め、事を好む批評家をして、「二筋の細き毛髪を以て、日米の頭上にダモクレスの劍が吊られてゐる。」とまで極言させるやうになつたのであります。けれども暴慢な米國が如何に我國の移民を排斥したからと申しまして、たゞそれだけの理由では、わが辛抱強い日本人が國運を賭してまで米國に對して劍を抜かうとは思はれません。日本人は一見狂燥な國民であるかのやうに誤解されてゐますが、事實と外見とは大違ひでありまして、日本人の特徴は、大事に當つて非常な冷靜さを失はないところにあるやうです。時には冷靜に過ぎるため、反つて打算を誤るやうな場合がないとも言へません。

一九二四年の移民排斥法によつて、光榮ある國家としては逆も忍びがたいほどの屈辱を與へられました時も、日本は終に憤怒の情を制して耐え忍び、一九二五年に於ける米國海軍の傍若無人な挑戰的大演習に對しても、終に一片の抗議さへ提出することなくして、終始悲痛な沈黙を守つたのであります。

現在に於ける日米間の事態をありのままに申しますと、一九二〇年に米人ウォルター・ピ

「ピトキンの喝破致しました言葉が、今に尙ほそのまゝ當嵌るやうに考へられます。『我々は日本と戦はざるべからざるか』(Walter B. Pilskin: Must We fight Japan?) に於て、彼は『日本との戦ひは、今日にあつてはまだ可能性の問題であつて、確實性の問題ではない。』と申してゐます。だが、それと同時に、彼が申しました如く、『今日の日米間には、僅か十年前に米獨を戦はしめたものよりも、遙かに強力な原因が存在してゐる』ことも事實であります。戦前の英獨が險惡な關係の下にあつたことは人の知るところであります。現在の日米は、或はそれ以上に險惡な關係の下にあると申していかも知れません。世界の識者の眼は期せずして太平洋に注がれ、そこに起りつゝある低氣壓の恐るべき結果に就て豫想するものごとくであります。

昨年の十月十九日巴里發の電報通信は、フランスの内務長官サローが、『將來太平洋上には人類の至大なドラマが演出されることがあるだらう。』と豫言したことを傳へ、さらに『その恐るべき程度は到底歐洲戦争の比ではあるまい。』と言つたことを傳へましたが、さうし

た危惧の念を抱いてゐるものは、ひとりフランスの内務長官サローばかりではありません。日米間の戦争は、悪くすると人種戦争を挑發し、世界の全人類を擧げて災厄の淵に投ぜしめるやうなことになるかも知れないからであります。人道の名に對して、この災厄を避けるのは日米兩國の義務であると申したいのでありますが、正直に申しますと、それは日米兩國の義務であるといふよりも、寧ろ單に米國民の義務であると申した方が至當であるかと思ひます。

日本が年々増殖する莫大な人口を擁して當惑してゐることは、世界周知の事實であります。日本は全體この莫大な人口の捌け口を何處に求むべきでありませうか。自國の周圍には加奈陀や、米國や、濠洲や、新西蘭のごとく、廣大な領域と、豊富の資源と、稀薄な人口とを惠まれた多幸な國々がありながら、それらの國々は皆『日本人はもう澤山!』(No Japan wanted) の制札を高く掲げて、われ／＼の同胞が一步たりとも立入ることを許しません。残るところは唯だ對岸の亞細亞大陸があるばかりであります。しかもそれは日本が二大戦役に

於て高價な犠牲を拂つて来た唯一の活動舞臺であります。この活動舞臺でさへ、他の貪慾な國民によつて横取りをされるといふことになりますと、如何に寛容な日本人でも、終には自家の生存権を維持するために、劍を按じて立たなければならぬやうな端目に陥る道理であります。露骨に申しますと、一九〇五年以來、手を變へ品を變へて極東問題に容喙する米國の態度は、一として日本の生存権を脅かさないものはありません。いはゞハリマン一流の妄想は、米國にとつては餘計な遊戯であります。日本にとつては自國の死活を左右する危険至極な悪戯であります。だから、この危険至極な悪戯が度累つて参りますと、結局日本も疇癘玉を破裂させ、自衛上米國を敵として立つより外に途がないことになるのであります。

この意味に於て、マゼランが初めて航行した時と同じく、太平洋が永久に太平な海洋でありうるかどうかは、一に懸つて米國がハリマン一流の妄想を放棄するかどうかといふことにあるのであります。けれども仔細に現在の米國を觀察致しますと、彼は容易にハリマン以來の妄想を放棄しさにありません。弗の威力によつて世界を號令せんとする彼の増長慢はま

すく昂する一方で、現在に於ける彼の意圖は、明かに太平洋を以て自國の領海とし、極東を以て自國の獨占市場たらしめんとすることにありやうであります。多くの樂觀論者と異つて、私はビトキンの提供した問題が、日に日に可能性の範圍を脱して確實性の範圍に近づきつゝことを認めざるをえない一人であると同時に、米國が人道の名に對して敬意を表するため危険な妄想を棄て去るほど高貴な倫理的觀念に燃えてゐる國家だとは信ずることの出來ない一人であります。

廣い世間にはまだ新英蘭時代の美しい殖民史を追想して、米國人の血管の中には、今も尙ほクエーカー教徒の清淨な血が流れてゐるやうに考へてゐる好人物もありますが、最近世史の中で米國ほど好戰的な國家はありません。彼は一七七五年の獨立戰爭以來、實に百十四回といふ驚くべき數の戰爭を経験して居ります。スコット・ニアリング教授が『亞米利加帝國』(Scott Nearing: The American Empire.)に於て喝破してゐることく、それも大抵は弱きものいじめの侵略戰爭でありまして、わが國のごとく自家の生存を維持するために止むなく

強大な外敵に當つたやうな公明正大なものではありません。彼が布哇や比律賓を奪略したのは、明かに外交上の詭計や欺瞞の結果であります。セント・ドミンゴやハイチがどんな手續によつて保護國となつたか、巴奈馬が如何にして獨立共和國となつたか、その邊の事情に就て多少でも承知してゐるものの中から見ますれば、米國を以て近世に於ける最大の侵略國家であると斷言しましたところで、毫も不當だとは言へますまい。

悪魔は好んで美しい衣裳を着けます。彼等は今尙ほ華盛頓やジェツフアソン時代の身振や口吻を眞似て、ことごとくに正義とか、自由とか、人道とかいつたやうな美名を假りて自家の醜行を粉飾しようと致しますが、美しい衣裳の裾から醜い尻尾の覗いてゐることに氣が付きません。正義の國家に偽瞞の外交が存在したり、自由の國家に狂暴な秘密結社が存在したり、人道の國家に残忍な私刑が存在することは、果して華盛頓やジェツフアソン時代の高貴な理想と一致するではありませんか。米國及び米國人の名譽のために、私は黒人焚殺の慘ましい光景を心知よげに眺めてゐる、紳士淑女の寫眞が廣く世界に流布してゐることを氣の

毒に思ひます。それに較べますと、極東茶食の民は餘りにも氣が弱く、餘りにも涙脆いことはないではありませんか。彼等は口を開くと、直ちに日本人を攻撃して、『日本人は野蠻である。日本人は狡猾である。日本人は剽悍である。』と罵り、日本人を以て宛もアングマンの蠻人でもあるかのやうに惡躰をつくのを常と致しますが、いつか米國を訪れた日露戦役の勇將は、彼等が得々として案内せんとしたシカゴの大屠殺場さへも、さる残忍な風景は見るに忍びないと言つて足を向けなかつたほどであります。封建時代の大名の中にどれほど虐政を行つた事實があつたとしましても、それは逆も米國に於ける黒人虐待の史實には及びもつかないに相違ありません。我國の文學史が『アングル・トマス・ケビン』(Harriet B. Stowe: Uncle Tom's Cabin.)のやうな傑作を有たないことは、わが國の名譽であると申してよろしい。

だが、私の目的は米國及び米國人の暗黒面を剔抉して、彼等に筆誅を加へんとすることにあるではありません。私は、私の愛する同胞に、米國及び米國人の看板には偽りのあることを告げ、彼等の甘い口裏に信頼するよりも、彼等の恐るべき大砲を警戒する方が、より安

全な道であることを警告すれば足りるのであります。彼等は今も尙ほ正義や、自由や、人道を口にしてゐます。彼等が自家の愛誦する句を放吟するのは自由でありますが、その歌に伴れて踊るか踊らないかは我々の自由であります。我々は断えず悪魔の足許に氣をつけてゐる必要があります。若し悪魔の足許が亂れて美しい裾の下から醜い尻尾が出るやうなことがありますすと、我々はどんな瞬間でも直ちに悪魔の襲撃から身を躲しうるだけの用意が出来てゐなければなりません。さもないと我々は突嗟の間に悪魔の襲撃を受けて、その鋭い牙先で咽喉笛を掻き切られるやうな惨めな端目に陥るでありませう。好むと好まないに拘らず、米國の挑戦に對して準備するのは、日本が自國の存立上止むをえないこととあります。諸君は例の米國海軍機密漏洩事件なるものを御記憶でありませう。一九二一年と申しますれば、米國が世界永遠の平和のために軍縮會議を召集した年であります、そんなことをして平和の女神に色目を使つてゐる一方では、こつそりと悪魔の牙を磨いて日本の咽喉笛を覗つてゐたではありませんか。當時の海軍卿エドウィン・デンビーが石油業者ドヘニーを召致して如何

なる對日策を漏らしたかは、今日已に世界周知の事實となつてゐます。「注意せよ！悪魔の足許に。」であります。

第二章 日米必戰

政治上や經濟上の關係から離れて、純粹に客觀的な立場から觀察して見ましても、日米兩國國民は、結局永遠の友誼を訂することは不可能であるかのやうに思はれます。地中海を隔てて二百年以上も對峙した羅馬とカルダゴとの歴史は、私に對して屢々將來の日米關係を暗示するのであります。

兩國の間柄を危殆ならしめ易い第一の理由は、日米兩國が共に青年國家であるといふこととあります。メーフラウアー號に搭じて新大陸に渡つた巡禮移民者の一團が、始めてプリマウスの一角に殖民地の基礎を築いてからでも漸く三百年、フィラデルフィアの獨立閣に自由

の鐘が鳴り響いてからは僅かに百五十年にすぎないのが米國の生ひ立ちであります。それに較べますれば、日本は實に二千年以上の高齡を惠まれた世界有數の老帝國であります。本當の意味に於ける新日本が生れてからは、これまた僅かに半世紀にすぎません。彼等は共に青春の元氣に充ちた國民であります。何事にも屈托しない、何事にもひるまない、潑刺たる意氣を有つた國民であります。青年が兎角喧嘩迅いのは獨り個人の場合にのみ限られたことではありません。青年特有の自尊心が、他の一方の自尊心を傷けない程度に於て發揮される間は無難であります。それが萬一他の一方の自尊心を傷けたとなりますれば、兩者の間には必ず猛烈な衝突が起ります。日米兩國の關係は恰度さうした事情の下に置かれて居りますので、何かにつけて相互に反撥し合ふのは、極めて自然なことであると申さなければなりません。素より利害問題もありましたが、古代の二大強國たる羅馬とカルタゴとが衝突しましたのも、さういふ對抗心理に基くところが少くなかつたやうに考へられます。

日米兩國の間柄を危殆ならしめ易い第二の理由は、二つの國家が共に強大な力の意識を有

つてゐるといふことであります。大戰前までは英獨の二大強國が世界の勢力的均衡を保つてゐた感じがありましたが、大戰の結果として獨逸が倒れ、老大國たる英國も疲勞困憊して昔日の威力を發揮する元氣がなくなりましたので、勢ひ日米兩國は最も伸張力を有する國家であるといふことになりました。力の意識は必然的に力を試みんとする衝動を伴ふものであります。武術を修業するものなどが、多少腕に覺えが出来て参りますと、必ず自分の腕前を實際に用ひて見たいといふ烈しい誘惑を感じて來るものであります。それと同様な心理状態が、假令意識的ではなくても、必ず潜在的になりと日米兩國の國民的心理を支配してゐるに相違ありません。一九〇九年にホーマー・ロー將軍が『無智の勇氣』(Homer Lee: Valor of Ignorance)といふ書物を書いて露骨に日米戰爭の觀念を鼓吹致しましてから、今日に至るまで殆んど二十年になりますが、その間に著名な米國人が幾度日米戰爭を煽動したか判りません。われ／＼はジョンソンとか、フェーランとか、ボラーとか、ロツジとか、ブリテンとか、ハーストとかいふ名前を永久に忘れることはありません。學者として眞理探求の聖業に従

事するミラー博士のやうな人物がヒステリックな日本懲罰論を唱へるかと思ひますと、海軍卿の重職にあつて一言半句をも慎むべき立場にあるウキルバーのやうな人物が態々太平洋岸まで出張つて『太平洋の兩岸には兩立しがたい國民が存在する。若し日本國民が冷静に歸らなければ、寧ろ彼等に鋼鐵の冷かさを示すに如かず。』とまで喚き立てるといふ始末であります。さうした狂的昂奮を持ち來す主要な原因は、結局彼等が自家の強大な力を意識してゐる點に存在するのであります。彼等にして到底日本を屈服させることは出來ないと考へてゐましたならば、彼等も決してさうした暴言は吐きましますまい。彼等は常に力の意識に燃えてゐるのであります。力の意識に燃えて、その力を試むべき對象を求めてゐるのであります。米國人に較べますれば、日本人は寧ろ過度に自國の力を見縱つてゐるかのやうであります。米國には到底敵はない、仕方がないから米國の言ふことは、何でも御無理御尤もと畏まつてゐなければならぬなど考へてゐますのは、七千萬の日本人中極く少數の臆病者だけに限られてゐるでありませう。『愈々となればヤンキーぐらゐに負けてたまるものか。』といふ元氣

は、國民大多數の肚の何處かに隠れてゐるはずであります。いはゞ米國人が積極的の力を意識してゐるのに反し、日本人は消極的の力を意識してゐるまで、兩者ともに力を意識してゐる點では何の差違もありません。私から申しますれば、そこに兩者の關係を最後の決闘にまで導く重大な危険が存在してゐるのであります。若し一方の喧嘩を賣つて出ることが度重つて参りますと、他の一方も必ず喧嘩を買つて出る時が来るに相違ないからであります。兩者の間に強さの權衡がとれてゐない場合でありますれば、わざ／＼殿合ひをやつて見るまでもなく、一方が他の一方に屈服して鬼は付きますが、双方とも『俺が強い。』と信じて居ります限りは、結局殿合ひまで行つて見ないと喧嘩の收りは付きませぬ。

日米兩國の間柄を危殆ならしめ易い第三の理由は、日米兩國ともに外戦によつて苦い經驗を嘗めたことがない、従つて一種の戦勝病 (Maladie de la Victoire) に罹つてゐるといふことであります。建國以來、米國は、英國を始めとして、西班牙、メキシコ、獨逸などを對手に數回の戦争をやつて居りますが、一度びたりとも負けたことがありません。英國との戦争

では獨立をえ、西班牙との戦争では比律賓や東印度の領土をえ、メキシコとの戦争では、テキサスや、カリフォルニアをえ、最後に獨逸との戦争では英國に代つて世界の經濟的霸權を握るといふ風に、どの戦争でも皆事がトン／＼拍子に運んで居ります。日本も同様で、今更めいた説明をするまでもなく、近世に於ける日本の異常な發展は皆外戦を段階として大飛躍をしたことに基いてゐます。従つて、日米兩國ともに本當に戦争の苦痛を體驗しようはずはありません。戦争に負けた時の苦痛は勿論、戦争に捷つてさへ非常な苦しみに喘がなければならんことのあるものですが、現在のフランスが味つてゐるやうな經驗は、幸か不幸か、日米兩國の共に知らないところであります。破竹の勢ひを以て埃太利と佛蘭西とを撃破した獨逸人は、久しい間戦争は一種の國家的投機だぐらいに考へてゐました。國家を飛躍せしめるためには、致々たる半世紀の勞作も、赫々たる一回の外戦に及ばないといふのがモルトケ一流の確信でありまして、その確信が強國獨逸をして再び立ちえないほどの手傷を負はさせた眞の原因であると申しても過言ではありますまい。幸ひにして日本人は生得反省の強い國民で

あります。前車の覆轍を見て後者の戒めとする點では、世界に日本人ほど素直な心掛けを有つてゐる國民はありません。日本人は日清、日露の兩戰役に捷つたのも、半ばは神助によるものだと思へてゐるほどでありますから、今までの戦争がいくら好都合に參つてゐるからと申しまして、それで増長するやうなことはありませんが、米國人は違ひます。彼等は今まで敵手が皆弱蟲ばかりであつたことは忘れ去つて、世界のどこに全體俺に敵對する奴があるんだと言はないばかりの高慢ちきな考へをもつてゐます。さうした甘い自負心が、惹いては彼等を大膽にし、暴慢にし、終には仕末に負へないやうな氣儘者にするのであります。だから米國の對手に選ばれたものが弱小國家で、自國の名譽も威嚴も頭から棄てゝかゝれるやうな腑甲斐ない國であればいいですが、若し日本のやうな自尊心の強い、自國の名譽と威嚴とを重んじる國家でありますれば、そこには必ず兩者の間に衝突が起つて參ります。日本人全體が如何に戦争の慘禍を痛感致して居りまして、戦争の慘禍を避けるために、全然自國の名譽と威嚴を棄て去ることは、日本人の性分、日本人の傳統的精神が許しません。殊に況ん

や戦争の眞の慘禍を知らないことに於て、日本人と米國人とは多く選ぶところがないに於てをやであります。

かゝる性質を有つた二つの國家が、太平洋を中に挟んで相對峙してゐるのであります。その間に恒久不變の友誼が成り立つたと致しましたならば、寧ろ不可思議だと申していいでありません。兩國の間には、到底相容れない利害問題と、數十年に亘る長い間の不快な行きがかりとが横はつてゐるのであります。人道といふ高貴な理想のために日米兩國が協力して平和の維持に努力しましたところで、自然の勢ひは人間の努力を蹂躪して顧みない場合が多いのであります。儲かに日本自身はさうした努力をつゞけて來てゐるやうであります。今日までも已に幾度となく劍を抜くべき機會はありましたが、日本人は辛抱強く我慢して來ました。この上の我慢は唯々米國の改過遷善によつてのみ出來ることではありません。彼が心機一轉して、ふつとりとハリマン以來の妄想を棄て、日本の唯一の生き場である極東に餘計なお節介をすることを思ひ止まるか、それともまた極東では矢張餘計なお節介がしたいといふこと

であれば、せめて一九二四年以來閉鎖した自國の門戸を開放して、ドシ／＼日本移民を收容さへ致しますれば、それで日米の險惡な關係は多少とも緩和されるのであります。米國が矢張前の態度を持續して、ハリマン以來の妄想を捨てず、自國の門戸から「日本人はもう澤山」の立札を撤去することも肯じないといふことになりますと、そこには到底戦争を避けることの出來ない事態が生じて參るでありませう。世界の識者は擧つて眼を太平洋の穩かな波濤の上に注ぎ、それが恐瀾怒濤のごとく逆捲く時を想像して戦慄を禁じえないのであります。彼等はよく記憶して置かなければなりません。若し寛容な、忍耐強い日本人が劍を按じて蹴起するやうなことが起りますれば、それはキリスト教の怠惰な牧師どもが、當然の職分ををろそかにして神の罪人である米國人に正しい神の福音を傳へることを怠つたからであります。彼等が飄然として正しい神の道に就きさへ致しますと、それで太平洋を蔽ふ妖雲は一掃せられ、最早如何なる嵐も起りうる危険はなくなるのであります。

私は、斷じて好戦の風を鼓吹するものではありません。戦争の慘害、戦争の罪惡であるこ

とは萬々承知して居りますが、如何なる方法を講じても避けられない運命だといふことになりませう。最早われ／＼は姑息な平和ばかりを夢みてゐるわけに参りません。何れの場合に於て、日米兩國間の戦争は必ず實現するものと假定して置いて、萬一の場合に處すべき準備さへ出来上つてゐますれば、それでわれ／＼の覺悟は十分なのであります。けれども廣い世間には譯もなく米國を畏れ憚つて、一も二もなく米國との戦争は避くべきものと考へてゐる極端な平和論者がゐます。さうした連中は、正義を主張するために勇らしく戦つて倒れるよりも、正義の主張を抛棄して野垂死をした方が日本人にふさはしい最後だと考へてゐるのでありませうか。日本人のごとく光榮ある歴史と強大な實力とを有つてゐない國民でも、それぞれ身分相應な國民的矜持を有つてゐるものであります。ベルジウムは何の必要があつて大戦に参加したかを考へて見る必要がありません。巴爾幹半島やバルチック海に濱した小國民が、その國民的矜持を維持するために、斷えず兵火の危険に曝されてゐる事實は、われわれに對して何を教へるでありませうか。人口百五十萬にも足りない蕞爾たる小國パラグワイ

が、伯、亞、ウ三國の同盟軍を對手にして五個年の間悪戦苦闘した壯烈な物語も、最早極東尙武の民をして奮起させるに足りないでありませうか。現代の羅馬たる米國のカトーは、現代のカルタゴたる日本を指して、今も尙ほ「カルタゴは滅されねばならぬ」(Delenda est Carthago)と叫んでゐます。現代のカルタゴたる日本は、甘じて古代のカルタゴが辿つた滅亡の道を辿るべきでありませうか。

今は太平洋の時代であります。地中海の時代もすぎ、大西洋の時代も過ぎて、太平洋の時代であります。英國一流の海軍通アーチバルド・ハードは『北海から太平洋へ』(Archibald Hurd: From North Sea to Pacific)といふ論文の中で、將來は太平洋が世界を支配する中心の海洋たるべきことを説いて、英國は須らく太平洋に常備すべき大艦隊を建設しなければならんと主張し、同じく海軍通たるサー・ハーバート・ラツセルも、將來の假想戦場は太平洋であると云つて居りますが、若しアングロ・サクソンのために太平洋の支配權を握られるやうなことになるやうなと、太平洋の女王たる日本は、座ながらにして餓死するより外はありますま

い。日本は自國の生存のためにも、是非太平洋の一半を支配しなければなりません。不合理且つ不必要な恐米病が蔓延して、日本人の大多数を犯すやうなことになりますれば、日本帝國の名譽や威嚴は兎に角としましても、日本人は最早手も足も出ないことになるのであります。現に支那ぐらいのものに見縊られて手を焼いておますのは、日本が、その背後に蠢めてゐる覆面の威力を畏れるからであります。斷じて行へば、鬼神もこれを避くと申します。日本は、日本の信ずるところに向つて直往邁進するがよろしい。日本の態度にして動搖することなく、その進路を阻むものに對して斷乎たる處置を執る覺悟さへ出來て居りますれば、支那は勿論、支那の背後にある威力も、敢て何事もかなしえませう。現在に於ける日本及び日本人の惱みは、すべて本當に腰の据つてゐない點から來るやうに思はれます。海運國としての日本、商工國としての日本、貿易國としての日本の將來を致へますと、日本の運命は懸つて太平洋にあると申しても過言ではありません。匈牙利の史家エミール・ライヒが曾て國家の興敗を論じた文章の中で、恢復力を喪うたものは戦敗した國家ではなく、平和に戀々として

止むをえない戦争をも避けた國家であるといふ意味のことを述べ、その適例として戦前の俄太利を擧げて居りますが、この言葉は、平和萬能論者を以て充されてゐる現在の日本にとつては、頗る味ふべき意味を含んでゐないかと思ひます。私は再び繰返して申します。不合理且つ不必要な恐米病は一掃されなければなりません。さもないと、日本及び日本人の將來は、唯だ暗黒な運命が待つてゐるばかりであります。

私は兼てから我國に行はれてゐる恐米論なるものを見て、その根據の如何にも薄弱なことに呆れ返つてゐる一人であります。彼等は毫も戦争といふものゝ實際を知らないと同時に、我國の實力に就ても何等知るところがありません。彼等はたゞ譯もなくモンスタ一のやうな米國の巨大な影を見て恐れ戦いてゐるのであります。巨豪アキレスにさへ乗すべき踵はあります。況んや米國はアキレスではありません。乗すべき無数の踵を有つてゐるばかりでなく、その對手を勤める日本には、アキレスをさへ斃すべき鋭利な武器の多くが備はつてゐるのであります。われ／＼は好んで喧嘩を賣つて出る必要はありませんが、先方が強いて賣つて出

る喧嘩であれば、敢て避ける必要はないのであります。われ／＼は男らしく一戦を交へて、極東尙武の民が今尙ほ健在であることを彼等に示してやつた方が、寧ろ宇宙を攝理する神の思召に協ふことであると覺悟すべきであります。此意味に於て、私は飽くまで現在の恐米論を有害無益であると主張するものであります。

私は以下の諸章に於て米國の毫も恐るゝに足りない所以を説き、兼て現在の恐米論が不合理且つ不必要である理由を説明致しませう。古代支那の戦術家は「戦ひのために戦ひを説く勿れ。」と教へてゐます。私の試みが若し「戦ひを避けるために戦ひを説く」ことにもなりますれば、それは全く望外の欧びと申すべきであります。

第三章 陸戦か海戦か

米國の恐るゝに足りない所以を説明しようと思ひますと、勢ひ日米戦争の假の圖面を描い

て見なければなりません。けれども戦争の形體ほど想像し悪いものはないのであります。大戦前にも英獨の専門家が色々將來の英獨戦を想像して見ましたが、一つとして事實上の英獨戦を描き當てたものはありませんでした。私が中學生時代に翻譯書で讀んだ英獨戦争未來記は多分獨人の手になつたものだと思ひますが、それには獨逸の大捷が豫想されてゐまして、勇猛な獨軍がドーヴァー海峡を渡つてケントの平野に殺到し、終に倫敦市を掌中に入れるといふやうな盛んなことが書かれてゐました。併し、事實と想像とは大違ひで、大戦の際獨逸は一兵をも英本國に入れることは出来ず、飛行船をもつて時々上空から倫敦市を脅かしたり、艦隊を以てローウエストフトやヤールマウスのやうな海岸都市を砲撃して、赤子殺し(Baby-killer)といふ有りがたくない名を頂戴するぐらいのことが精々でありました。それほど戦争の豫想圖を作り上げることは難しい仕事であります。如何に戦争の場合であるからと申しまして、理外の理屈ばかりが飛び出すわけではありません。精細な軍事科學の智識を以て判斷致しますと、その瑣末な細部は鬼も角として、大體の輪廓だけは略々正確に

近い程度まで描き出すことが出来るはずであります。殊に、日米兩國の間には戦争の假想圖を作り上げるのに極めて都合のいい特種な事情が存在して居りますので、その大體の經過だけを想像することは、さしたる難事でありません。

日米戦争の假想圖を作り上げる時眞先きによつつかる問題は、日米戦争は陸戦を主とするか、海戦を主とするか、それともまた海陸兩方面の戦争が並行して行はれるかといふ問題であります。それを判断するためには、是非とも日米兩國の地理的關係を考察しなければなりません。御存知のごとく日米兩國は太平洋を挟んで對立し、兩者の距離は殆んど五千海里に近いのでありますから、相互に陸軍を送らうにも送る手段がありません。戦争の初期に於て日本は少數の陸軍をグアムと比律賓とに送り、そこに於て多少の陸戦が行はれる場合はありませうが、それは戦争全體の規模から見ても、殆んど問題にするほどのものではありません。米本國の陸軍に至つては、日本以上に役に立ちません。彼に如何なる神算鬼算がありませうと、五千海里の太平洋を徒渉する術はないはずであります。中には天來的の奇想を逞しうし

て、何事にも大懸りな米國のことであるから、彼は多分太平洋を縦斷し、サイベリア鐵道の助けをかりて大陸軍を北滿の野に送るであらうといふやうな、奇抜な説を吐くものもありますが、そんな莫測げたことが出来るものかどうか、すこし古來の戦史でも研究して見るがよろしい。日清、日露の兩戦役に於けるごとく海陸並行して戦争が行はれるためには、米國の味方として支那又は露西亞が立たなければなりません。「太平洋戦争」(Hector Bywater: Great Pacific War) を書いたヘクター・バイウォーターは、支那の反日黨に項羽もどきの大將軍が現れて、精銳無比の日本陸軍を惱ますといふやうなことが書かれてゐますが、そんな夢を見たのは現代の支那人中で吳佩孚ぐらいのものでありませう。何れに致しましても、支那の起否などは物の數でもありません。露西亞が起つと少しは五月蠅いでありませうが、露西亞が起つといふのも可笑しな話であります。御存じのごとく、現在の露西亞と米國とは國交斷絶の關係にある國であります。主義の上から申しまして、米國は露西亞が最も嫌惡する資本主義國の巨魁であります。それにも抱らず、國交を結んでゐる日本をいちめるために、

主義に反対な、絶交關係にある國の側に立つて、最も危険な戦争を分擔するなどといふことは、逆も健全な常識が許さない想像であります。この意味に於て、私は將來の日米戦争が陸戦を主とするものでないことは勿論、海陸並行して行はれるものでないことをも斷言して俾らないのであります。

由來、海を以て遠く隔つてゐる國と國との間には、陸戦が戦争の決定的要素をなす場合は極めて稀れにしか起らないものであります。第一から第三に至るポエニ戦争を見ても、カルタゴの運命を決したものは、紀元前二四一年にエガテ島の海面で行はれた海戦でありまして、ザマに於けるハンニバルの敗戦でも、カルタゴ市に於ける不首尾な籠城戦でもありません。制海權を喪ふと同時に、それを喪うた國は負けるので、さうした實例は史上に掃き棄てたいほど多數に記載されてゐます。試みに三四の例を挙げますと、十六世紀の大強國であつた西班牙が見る影もなく落魄したのはインヴァインシブル・アーメーダが滅茶々々に叩き潰された爲であり、オランダが衰へたのはロイテルの海軍を輕蔑して海上權を英國に讓渡したため

あり、稀世の英雄兒那翁をして没落の浮目を見せたのは、ネルソンの率ひる艦隊が佛將ビルヌーブの率ひる艦隊をトラファルガル岬の海面に撃滅したためであります。我國に於ける實例から申しまして、二回の征韓役が極めて不首尾に終つた最大の原因は、朝鮮側の提督李舜臣の率ひる海軍のために、わが本國と遠征軍との聯絡が巧く行かなかつた點にあるのであります。日清、日露の兩戦役に於ても、敵の海軍が揃ひも揃うて庸劣であつたお蔭で、戦役は極めて好運に進行しましたが、不幸にして我國が制海權を喪うてゐましたならば、その結果は、曾てあつたものよりも、よほど變つたものになつてゐたであらうませう。

かやうに考へて参りますと、日米戦争の主役を勤めるものが海軍であることは自明の事實であると思ひます。従つて、海上の決戦に捷つたものは戦局の結果を支配するものとなり、海上の決戦に負けたものは、戦局の結果に支配されるものとなるであらうませう。今日までに多くの専門家が日米戦争について語つて居りますが、誰れ一人として日米戦争の主役を勤めるものが陸軍であるなど、申したものはありません。現にバイウオーターの『太平洋戦争』

でも、その大部分は海戦の場面でありまして、戦局の結果も日本海軍のヤツブ島沖に於ける惨敗によつて定まるやうに書いてあります。パイオターは、英國の海軍記者であります。が、名著の評ある『太平洋の海権』(Sea-Power in the Pacific)を初め、海軍問題に關係する三四の著述がありまして、所謂海軍通の中では、押しも押されもしない地位を有つた人物であります。彼の『太平洋戦争』が一篇の傳奇小説であるといふ理由を以て、時々世上に散見する低級な大衆向の日米戦争譚などと、同視することは出来ません。

さうすると、海戦の結果が何故戦局を支配するかといふ問題が起つて参ります。それを説明するために、私は日米兩國の場合を個々に別つて考へて見ることに致しませう。

先づ最初に日本海軍が全滅した場合のことを想像して見ますと、そこには何といふ目も當てられない状態が描き出されることとありませう。その時の我國は必ずや米國海軍によつて完全に封鎖されてゐるに相違ありません。強大な米國海軍によつて封鎖されてゐる以上、日本と歐羅巴との海上交通は勿論、日本と支那大陸との交通も大體遮断されてゐるはずであり

ます。海上交通が止まれば、當然すべての貿易が杜絶します。さうすると必要な軍需品は勿論、工業原料も、食糧品も、絶対に我國には這入つて來ないこととなります。極端な場合を想像致しますと、我國のとき數個の島嶼から成立つてゐる國は、國內に於ける聯絡をも遮断されることが絶無だとは申されません。臺灣のときは勿論封鎖の劈頭に於て本國と切り離されて終ふでありませうし、朝鮮との聯絡も覺束なくなつて参ります。悪くすると、本島と北海道との間も切り離されて、日本帝國といふ一つに結び付けられた國家が、チリ／＼パラ／＼に分解されて終ふやうな悲惨な状態に陥らないにも限りません。勿論、實戦の場合には要塞もあれば敷設水雷もあつて、假令海軍が全滅しましても、左様な悲境に陥るやうなことはありません。少くとも海外交通の大半が杜絶することだけは間違ひのない事實であります。海外交通が止まつて食糧品や軍需品が缺乏するのは何とかして辛抱するにしまして、最も困ることは敵手に落ちた附近の島嶼や、航空母艦から間断なく放つ航空機の襲撃であります。思ふに、我國が封鎖されて一ヶ月も立たない間に、主として木造建築から出來てゐ

る我國の首要都市は、殆んど灰塵に歸して終ふであります。さうなると勇猛果敢な三百萬の大陸軍が、一兵をも喪はずに地上を護つておきましたところで何の役にも立ちません。彼等はたゞ切齒扼腕して空しく天を仰ぐばかりで、施すに策なく逃ぐるに道なき窮境に陥る外はありますまい。だから日本海軍が致命的な打撃を受けた時は、先づ日本の運命が定まる時と考へていゝのであります。

これに反して若し米國海軍が致命的な打撃を受けたとなりますれば、その結果はどうなるであります。米國は自給自足の國で、國土も廣く、天産も豊富で、しかも二つの大海洋に面して居る大國でありますから、日本のごとく封鎖されることもなければ、假令封鎖されても、日本ほどに苦しむこともありません。併し、米國海軍が致命的な打撃を受けたとなりますれば、米國は絶対に東方に向つて進撃する力を喪ふわけでありませうから、戦勝の機會は全然日本側に握られて終ひ、積極的に日本を苦しめるために何等の策動をもなすことが出来ないのは勿論、惹いては太平洋面に散在する總ての領土を喪ひ、太平洋に於ける總ての海外交

通を遮断されて終ふであります。否、そればかりではなく、太平洋に面するワシントン、オレゴン、カリフォルニアの三州は、わが航空機の活動舞臺となつて、そこに榮えてゐるロス・アンゼルスや、サン・フランシスコや、シアトルの美しい市街は、わが航空機の投ずる爆弾によつて、昔時のボンベイや、ヘラクリニウムと同じやうな悲惨な運命に陥ることが明かであります。殊に、敵艦隊が全滅して海上が全く安全だといふことになりませうと、勇猛果敢な日本海軍は、必ずや何等かの方法によつて長驅太平洋面にも現れ、恰も無人の野を行くのごとく、そこを往來する米國の商船を撃沈し、そこに面する米國の大都市を片ツ端から襲撃するやうな場合も起り得るであります。かくして太平洋側の米國人までも枕を高うして眠ることが出来ないことになりませうと、如何に剛情我慢な米國人でも、結局和を乞ふの外ないことになつて參るであります。

一九二五年九月、セナンドア航空船の爆發事件に際し、米國陸軍省航空局長の職にあつたミツチエル大佐は、極端な航空機萬能論を唱へて世界を驚かし、將來の戦争は主として空

中よりする航空機の攻撃によつて勝敗を決し、大戦艦のごときは無用の長物となるであらうといふ論據の下に、口を極めて米國空軍の缺陷を罵倒致しましたが、わが長岡將軍のごときも、暗にミツチエル大佐の意見を支持するものゝやうであります。けれども日米兩國のごとき五千里も離れてゐましては如何に萬能力を有つた航空機でも、施すに策を有たない状態となるのであります。中にはアラスカよりする航空機の日本攻撃を可能であると主張するものもありますが、私は信じません。斯道の専門家が説くところに據りますと、現在に於ける最大戦闘機の航続力は大體千二三百海里を限度とするもので、それが多額の燃料と爆弾とを搭載することになりますと、この戦闘機の行動半径は更に半減されて五六百海里となり、それが假に爆撃の目的を達して根據地に歸來することになりますと、根據地と攻撃地點との距離は高々二三百海里の近距離でなくてはならんことなるのであります。然るにアリユシアン群島の西端にあるアクタン島からでも、わが北海道の東北端までは少くとも二千海里はありますから、現に科學者だちの考へてゐるやうな無線補充による電力飛行機でも

出来ない限りは、到底そんな離れ業の出来ようはすがありません。すると、航空機の襲撃によつて日本の息の根を止めるためには、是非とも日本近海の島嶼を占領するか、それともまた航空母艦をもつて日本の近海に近づかしなければならんわけでありますが、さうするためには、是非とも日本海軍の主力を撃破しなければなりません。この點から申しましても、ミツチエル大佐の意見は、將來に於ては兎に角、現在のところでは唯だ豫言的な價値を有つてゐるに止まるものでありまして、事實の真相を道破したものだとは申されません。大正十五年の帝國議會に於て、財部海軍大臣が補助艦計畫を説明した言葉の中に、暗に長岡中將などの空軍萬能論を啓蒙する意味で、日本に對する空中侵略は、航空母艦が沿海百海里以内に接近した時に於てのみ可能であるといふ意味のことを申しましたのは、この間の消息を極めて明白に物語つたものであります。沿海百海里と申しますれば、東京市を起點として量つて見ますと、恰度神津島と三宅島との間ぐらゐに當ります。敵の航空母艦がそんな近海までノコノコ出かけて参りますやうでは勿論戦争は負けでありますが、わが海軍力さへ強大であり

ますと、敵もそんな呑気な真似が出来るわけはありません。従つて日米戦争の場合に於ても、戦局の結果を支配するものは依然として海戦であり、斷じて陸戦でも空戦でもないといふことは多辯を用ひずして明かな事實であります。

これで日米戦争の假想圖を作り上げるために最初に必要な一つの問題は解決致しました。果して日米戦争の主要な部分が兩國海軍によつて演じられると致しますれば、次に起つて参りまする問題は、五千海里も離れた地點に存在する兩國海軍が、果して如何なる方法によつて相互の撃滅を企てるであらうかといふ問題であります。それを説明するためには、勢ひ兩國が火蓋を切る時機から考へてかゝらなければなりません。開戦の時機如何によつて、兩國海軍の執るべき方策も變つて来るでありませうし、開戦の時機如何によつて、戦局の結果にも非常な變化が起つて来るでありませう。日露戦争の時でも、日本の火蓋を切る時機が今少し遅れましたならば、日本海軍はあゝいふ鮮かな手際を以て旅順艦隊の機先を制し、確實に日本近海の制海權を握つて、安全に陸軍を大陸に進めることは、出来なかつたに相違ありません。

ん。殊に、日米兩國は普通の場合と餘程異つた特殊な事情の下に置かれて居りますので、開戦の時機如何といふことが、一層戦局の進展に重大な影響を及ぼすやうな具合になつて居るのであります。それらの點に就いては後續の諸章に於て何れ悉しい説明を致すつもりであります。

いよく戦争の本舞臺を假想するに當りまして、當然の順序上私は日米兩國海軍の現勢に關する概略のお話を致して置ませう。兩國海軍の實體について何の知識をも有つてゐないでは、兩國海軍の演出する交戦の結果についても到底正しい理解を有つことは出来ないはずであります。寛容な讀者は、姑らくの間私が羅列する無味乾燥な固有名詞と數字との上に眼を注いで頂きたいと思ひます。

第四章 日米海軍の現勢

一九二一年十一月十二日、ワシントン市コンチネンタル・メモリアル・ホールに於て開會された五大強國の軍備制限會議の結果は、日英米三國の保有する主力艦の勢力を三、五、五の比率に據るといふことに取極めましたので、爾後日本の保有する主力艦の總噸數は三十一萬五千噸、米國の保有する主力艦の總噸數は五十二萬五千噸といふことになりました。米國の肚は進んで補助艦の制限にまで及ばうといふ考へでありましたが、それは自國に割宛てられた主力艦の比率一、七五に對して滿腔の不平を抱いてゐた佛國の反對によつて不成立となり、たゞ巡洋艦の最大限度を一萬噸八吋砲といふことに取極めて一應の終結を告げました。元來華盛頓會議なるものは、米國海軍の膨脹を危惧する英國の利益と、日英同盟の存續を氣に憚む米國の利益とを調停せんがために仕組まれた外交上の大芝居でありまして、日佛伊の三國は、體よく彼等の狙上にのせられ、彼等の欲するまゝに料理された觀がありました。爾後日英同盟は絞殺され、佛伊兩國は第三流の海軍國に蹴落されて、世界は終にアングロ・サクソン・ソリダリチーの前に頭の上らないことになりました。この結果を見て最も癢に障へたのは自

尊心の強い佛國でありまして、同國上院の海軍委員長ケルゲゼツクのごときは、華府會議を以て一種の欺瞞であるとさへ痛罵しました。だが、國家の威嚴を害したのは單に佛國ばかりでなく、自ら好んでしたことは云へ、華府協定の結果によつて、英國のごときも綺麗に世界一の海軍國たる誇りを失つて終つたのであります。羅馬帝國の衰亡史を書いたギボンに倣うて、後世の史家が若し大英帝國の衰亡史を執筆致しますならば、彼は必ず華府會議なるものを最も重大な事實として取扱ふであります。要するに、華府會議によつて最も利するところの多かつたのは米國でありまして、それは米國歴代の大統領中最も庸器の一人であつたハーディングの治世に、一つの光輝を添えただけでも深い意味があつたと申して過言ではありますまい。

私は先づ日本の主力艦に就て説明致しませう。左に略表を掲げます。

日本海軍主力艦表

艦種	艦名	竣工年度	排水噸數	速力	備砲
戰艦	陸奥	一九二二	三、八〇〇	三三〇	一六吋八門
	長門	一九二〇			
	日向	一九一八	三、二六〇		一四吋三門
	伊勢	一九一七			
	山城		三〇、六〇〇	三三、五	
	扶桑	一九一五			
巡洋戰艦	霧島		二七、五〇〇	二七、五	一四吋八門
	榛名		三〇、五〇〇	二六、〇	
	比叡	一九一四	二七、五〇〇	二七、五	
	金剛	一九一三			

右の表によつても判りますごとく、日本海軍の主力は所謂六四艦隊でありまして、戰艦六隻、巡洋戰艦四隻を以て編成されてゐるのであります。艦齡から申しますと、拾個年未滿のものが二隻、拾貳個年未滿のものが三隻、拾五個年未滿のものが四隻、十六個年未滿のものが一隻でありまして、その平均艦齡は十二個年半になります。主砲を推算致しますと、十六吋砲十六門、十四吋砲八十門、合計九十六門となり、全艦の平均速力は二十四節七分といふことになりました。これに對する米國の主力艦はどうであるかと申しますと、大體左表のことくなつております。

米國海軍主力艦表

艦種	艦名	竣工年度	排水噸數	速力	備砲
戰艦	ウエストヴァージニア	一九一三	三、二〇〇	三三〇	一六吋八門
	コロラド				
	メリーランド	一九二二		三三、一	

カリフォルニア	一九〇〇	三、三〇〇	三、五	二四吋三門
テネシー	一九〇〇	三、〇〇〇	三、〇	二四吋三門
アイダホ	一九〇九	三、〇〇〇	三、三	二四吋三門
ニューメキシコ	一九〇九	三、〇〇〇	三、〇	二四吋三門
ミシシッピ	一九一七	三、〇〇〇	三、一	二四吋三門
アリゾナ	一九一六	三、四〇〇	三、〇	二四吋三門
ペンシルバニア	一九一六	三、四〇〇	三、〇	二四吋三門
オクラホマ	一九一六	三、五〇〇	三、〇	二四吋三門
ネブラスカ	一九一四	三、五〇〇	三、〇	二四吋三門
ニューヨーク	一九一四	三、六〇〇	三、五	二四吋三門
テキサス	一九一三	三、五〇〇	三、〇	二四吋三門
ワイオミング	一九一三	三、五〇〇	三、二	二四吋三門
アルカンサス	一九一三	三、〇〇〇	三、〇	二四吋三門

ユタ	一九二二	三、八五〇	三、〇	三吋一〇門
コロリダ	一九二二	三、八五〇	三、〇	三吋一〇門

右の通り米國の主力艦隊は十八隻の戦艦のみによつて編成され、日本のごとく巡洋戦艦と稱する艦型は一隻も存在致しません。艦齡は拾個年未滿のものが六隻、拾五個年未滿のものが八隻、十八個年未滿のものが四隻でありまして、その平均艦齡は十二個年四個月になります。主砲は十六吋砲廿四門、十四吋砲百廿四門、十二吋砲四十四門、合計百九十二門となり、全艦の平均速度は二十一節弱といふことになります。この二つの略表を瞥見して何人にも直ぐ氣が着きますことは、日米主力艦の数の上の比率は、三對五といふことになつて居りますが、その攻撃力を代表する主砲の數に至つては一對二、即ち日本は恰度米國の半分にしかなつてゐないといふことであります。華盛頓會議の當時、日本人全體の輿論が今少し力強く加藤全權の七割説を擁護しましたならば、日本の條理する主張は結局英米兩國の容れるところとなりまして、主力艦の數は勿論、從つて、その砲力に於ても、かやうに惨めな結果とはな

ならなかつたらうと思はれます。今日から考へますと、甚だ遺憾千萬なことでもあります。けれども海軍の戦争は、單に主力艦ばかりで出来るものではありません。主力艦は讀んで字の如く海軍力の主力をなすものではありませんが、その主力艦の活動を補佐して十二分の能力を發揮せしめるためには、必ず各種の補助艦なるものが必要であります。一國の全海軍力を測定するためには、主力艦以外に是非補助船の勢力をも考量の中に入れなければなりません。主力艦の例に倣つて、私は先づ日本の補助艦に就て説明致しませう。

日本海軍補助艦表

艦種	艦名	進水年度	排水噸數	速力	備砲
巡洋艦	妙高	一九一七	一〇,〇〇〇	三三.〇	八吋一〇門
	那智				
	足柄	一九一六			
	羽黒				

艦種	艦名	進水年度	排水噸數	速力	備砲
輕巡洋艦	高愛	起工済	一〇,〇〇〇	三三.〇	八吋一〇門
	鳥海				
	摩耶	未起工			
	加古	一九一五	七,五〇〇	三〇.〇	八吋六門
	古鷹				
	衣笠	一九一六			
	青葉				
	天龍	一九一九	三,五〇〇	三〇.〇	五吋五門
	龍田				
	球磨	一九一〇	五,五〇〇	三三.〇	五吋五門
	多摩	一九一三			

北	大	木	長	五	名	由	鬼	阿	那	川	神	夕
上	井	會	良	鈴	取	良	怒	隈	琦	内	通	張
〃	〃	〃	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九五	一九三	〃	〃
〃	〃	〃	五、五七〇	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	三、一〇〇
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	五、五六〇

五〇

航空母艦	鳳	翔	一九三	七、四〇〇	二五、〇	四時七八門
〃	加	賀	一九五	二六、九〇〇	二二、〇	八時一〇門
〃	赤	城	一九七	二六、九〇〇	二六、〇	〃

潜水母艦	迅	鯨	一九三	五、一六八	一六、〇	五時四門
〃	長	鯨	一九四	〃	〃	〃

以上は大體第一線に使用しえられる最新最鋭の補助艦のみを列記したものであります。此外にも補助艦として非常に重要な位置を占める驅逐艦及び潜水艦と稱する二種の艦型があります。それらは何れも数が多くて一々列挙するに堪へませんから、極く大體のことを申し上げますと、我國には凡そ百二十隻ばかりの驅逐艦があり、最大のもの吹雪型の千八百五十噸から、最小のものは白鷺型の三百八十噸に至るまでありますが、中には舊式のボロ船も交つて居ますので、眞に現代の戦争に使用しえられるものは百隻あまりしかありません。その百

隻あまりの中でも、所謂航洋驅逐艦として遠隔の地點にまで出張つて作戦行動しえられますものは、未成艦を算入して約七十隻ぐらゐりませうか。潜水艦は既製未製を合して約八十隻あります。その中で伊號潜水艦と稱する二十隻ばかりは、皆一千噸以上二千噸に近い最新式の航洋潜水艦でありまして、主力艦隊と行動を共にして作戦することの出来る有力なものであり、二等潜水艦ともいふべき呂號の中でも、第五十一號から第六十八號に至る十八隻の潜水艦は、艦齡も比較的若く、大きさも殆んど一千噸近くあります。

わが海軍には、その外にも尙ほ日露戦争當時に英名を諷はれた淺間外七隻の裝甲巡洋艦を初め、利根外三隻の三四千噸級巡洋艦、砲艦、水雷敷設艦、掃海艇、測量艦、特務艦、舊式潜航艇まで加算致しますと、少くとも百二三十隻の艦艇はありませうが、それは別に我海軍力を算出する上に顧慮せねばならぬほど有力なものではありません。對馬海戦の時、初瀬、八島兩主力艦の缺を補ふために、戦艦三笠を旗艦とする主力艦隊の列にまで加はつた當時の新強艦日進、春日の姉妹艦が、その老齡にもよるとは言へ、今では物の數にも這入らない劣

等艦の中に伍してゐるのを見ますれば、最近に於ける製艦技術の發達ほど臆目すべきものはありません。實際、今日の新式巡洋艦である七千一百噸級の加古、古鷹、一萬噸級の新式巡洋艦、妙高、那智などは、先ドレッドノートの主力戦艦であつた鹿島、香取などよりも遙かに強力であるとさへ言はれてゐるのであります。殊に、昭和二年度の議會に於て、例の補助艦建造計畫が通過し、老朽艦の代艦補充として、昭和十二年までに新らしく巡洋艦四隻、驅逐艦十五隻、潜水艦四隻、その他五隻の補助艦が出来ることになつて居りますから、昭和十二年に於て日本艦隊が保有する第一戦列部隊の補助艦勢力は、巡洋艦と驅逐艦とを合して百廿六隻、それに潜水艦の七十一隻が加はつて、總計百九十七隻の多數に上り、かなり優勢なものになるといふことであります。

これに對抗する米國の補助艦はどうであるかと申しますと、大體左表のごとくになつて居ります。

米國海軍補助艦表

艦種	艦名	進水年度	排水噸數	速力	備砲
巡洋艦	ソルトレーキシチー	建造中	10,000	三五	八吋一門
	ペンサコラ				
	未命名			三五	八吋一門
	チェスター				
	未命名				
	シカゴ				
	アウグストン				
	ホーuston				
	オハマ	一九三	七,五〇〇	三五	六吋三門
	リッチモンド				
	デトロイト				

	ミルウォーク				
	コンコルド				
	シンシナチー				
	ラレー	一九四			
	トレントン				
	マーブルヘッド				
	メンフェイス				

航空母艦	艦名	進水年度	排水噸數	速力	備砲
	サラトガ	一九五	三三,〇〇〇	三五	八吋一門
	レキシントン	一九五			
	ラングレー		三三,七〇〇	三五	五吋四門

その外に、現在の米國は艦齡十二個年未満の驅逐艦約百三十隻と潜水艦約百三十隻とを有つてゐる筈であります。元來米國の驅逐艦は約三百隻の多數に上り世界無比の名を擅まゝに

してゐるものでありますが、現在では艦齡が段々果んで参りましたので、眞に第一線に立ちうる優秀なものは、略々前掲の數ぐらゐしかないのであります。また最初に掲出しました一萬噸級巡洋艦は、一九二三年度に議會を通過しまして、目下計畫中に係るものであります。その中の一二隻は已に進水したはずであります。その外にも、米國には比較的優秀な驅逐艦百五六十隻を初め、舊式に屬する巡洋艦や諸種の補助艦艇まで加算致しますと、少くとも三百隻を下らない多數の艦艇がありますが、我國の場合と同様で、これまた主要な海軍勢力を形作るものではありません。

以上は極く大雑把な説明であります。それによつて日米海軍力の現勢は大體判ることと思ひます。單に數字の上からのみ日米海軍の勢力を比較致しますと、主力艦に於ては勿論米國の方が遙かに優勢を示して居り、驅逐艦及び潜水艦に於いても、日本は到底米國の敵でありません。唯だ偶然にも日本が米國に對して優位を占めてゐるのは巡洋艦のみであります。我儘ものゝ米國は、この巡洋艦の劣勢が氣に食はず、一九二七年八月、ゼネバの國際聯盟本

部に於て日英米の三國會議を開き、補助艦をも自國に都合よく制限しようと思つたが、それは英國との間に意見の間隔があつて、米國の期待通りに成立するといふわけに参りませんでした。それに刺戟されたわけでありませうか。一九二八年三月、米國下院は巡洋艦十五隻航空母艦一隻の建造案を通過させました。豫定に據りますと、それは一九三一年七月以前に建造に着手されるといふことであります。

最後に日米兩國海軍の編成を略述して、この章を終ることに致しませう。

日本海軍は第一艦隊と第二艦隊とから成り、第一艦隊は、長門、陸奥、日向、扶桑の四艦から成る第一艦隊と、目下缺隊中である第二艦隊と、神通、那珂、阿武隈の三巡洋艦から成る第三艦隊とから組織され、外に天龍を旗艦とする第一水雷戰隊と、迅鯨を旗艦とする第一潜水戰隊とが附屬してゐます。第二艦隊は金剛、比叡の二巡洋戰艦から成る第四戰隊と、加古、古鷹、青葉、衣笠の四巡洋艦から成る第五戰隊とから組織され、外に名取を旗艦とする第二水雷戰隊と、長鯨を旗艦とする第二潜水戰隊とが附屬してゐます。その他にも尙特務隊、

航空戦隊、第一第二の遣外艦隊などありますが、それらは別に取立てゝいふほどのものではありません。

米國海軍は合衆國艦隊 (United States Navy) の名の下に統一され、主力戦艦十二隻から成る戦團艦隊は常時太平洋岸に駐在し、その下に驅逐戦隊、潜水部隊、航空戦隊、根拠地部隊、機雷戦隊、特務部隊などが直屬し、主力戦艦六隻から成る偵察艦隊は常時大西洋岸に駐在し、その下に輕巡洋戦隊、驅逐戦隊、航空戦隊、特務部隊、遊撃部隊、機雷戦隊、潜水部隊などが直屬してゐます。外に巴奈馬運河の保護に任じる拉米艦隊や、比律賓に駐在する亞細亞艦隊や、歐洲方面に派遣された遣歐部隊と申すものなどありますが、その中では亞細亞艦隊が多少の勢力を持つてゐるだけでありまして、その他は皆數隻の補助艦から成る微力な艦隊であります。

第五章 日米の海軍根拠地

日米兩國海軍の基本的勢力を決定する艦艇の現状に就ては、簡單ながらも一通りの説明を致しましたから、次には日米兩國海軍の戰略的地位を確保する海軍根拠地の現状に就て説明することに致しませう。

如何に強大な海軍が存在してゐましても、適宜な作戦根拠地がなくては、到底有効な軍事行動はとれません。世界大戰の時、英國のグランド・フリートは、獨逸の海軍根拠地たるヘリゴランド島から北西に當つて四百七十五哩離れたオークニー群島中の一灣スカバ・フロート、モーレー河口の小港クローマーチーとを作戦根拠地として選びましたが、日米相戦ふ時、米國海軍は果して何れの場所を選ぶでありますか。この興味ある問題を判斷するためには、當然現在の太平洋に於ける米國海軍根拠地に就て知つて置かなければなりません。

日本に最も近い米國の領土と申しますれば、勿論比律賓群島であります。そこには馬尼刺灣内に西班牙時代からのカヴィテ軍港があります。一八九八年四月三十日老提督デウウィーの率ひる米國の亞細亞艦隊が、提督モンジョーの率ひる西班牙艦隊を撃破したところでありまして、今尙ほ馬尼刺と相並んで比律賓に於ける最も重要な軍港であり、現に米國亞細亞艦隊の根據地となつて居ります。馬尼刺灣から北西に當つて程遠からぬところにスピック灣があります。その灣内にはオロンガポの要港があつて、側面から馬尼刺灣を掩護するやうになつて居ります。一九〇五年以來、米國は此二港のために三千万弗に近い經費を投じて種々の施設を致しましたが、華盛頓會議の結果防備制限區域となりましたので、最近では大した施設もされて居ないはずであります。

比律賓に續いて最も日本に近い米國領土は面積二百二十八平方哩の小島グアムであります。そこにはアブラ軍港がありまして、簡易な要塞や、大無線電信所や、貯炭所などの設けがあります。ヘクトル・バイウオターをして太平洋のヘリゴランド又はマルタであると言は

しめた戦略上の重要地點でありまして、華府會議の結果、比律賓群島と同様に防備制限區域に編入されてゐます。グアム島の東北約一千三百海里のところに蕞爾たる小島ウエーキがあり、その東北約一千二百海里のところにミッドウエー島がありまして、何れも米領となつて居りますが、前者は炭油の供給所として絶好の地點に位し、後者は目下海底電線の中繼地點となつて居ります。一旦緩急ある時は相當に軍事上の價値があると申されて居りますが、今では何の施設もされてゐません。

次に日本に近い米國領土はアラスカのアリユーション群島であります。そこには西端に近いところにキスカ、東端に近いところにウラナスカ(ダッチ・ハーバー)の二要港がありまして、何れも米國補助艦隊の根據地となつて居りますが、専門家の間には、米國海軍が日本東北海岸を攻撃する時には、必ず策源地として選ぶであらうと信じられてゐるところであります。またアラスカの南端にはシトカと稱する要港がありまして、同じく補助艦隊の根據地となつて居りますが、日本からの距離が甚だ遠いので、前二者が防備制限區域となつて

居るに抱らず、シトカだけは何等の制限をも受けて居りません。その點に於ては、南太平洋に於ける米國唯一の領土たるサモア島のツツイラ軍港も同様でありまして、そこには無線電信所や、貯炭所や、軍需品の倉庫などがありますが、日米開戦の時には、屹度日本の濠洲貿易を妨害する策源地になるだらうと考へられてゐます。

今までに列記したところでは、まだ米國海軍の大根據地と見做すべきところはありませんでした。今までの列記したところでは、最も日本に近いものは布哇の眞珠港であります。オハフ島の南岸、ホノルル市を距ること約十二哩のところにある、水上面積十方哩、水深六十呎の大軍港であります。そこには一九一九年八月以來大艦巨船を容るゝに足る大船渠があり、東端ダイアモンド岬角から灣を繞つて十二吋、十四吋、十六吋の巨砲を裝備した大要塞帯があり、重油燃料六七十萬噸を藏するに足る大貯藏所がありまして、太平洋に於ける米國海軍の一等前進根據地として耻づかしからぬ總ての設備を具備してゐます。殊に、一九二二年以來、ロドマン委員會の答申を採用して、米國は布哇に約四千三百萬弗の巨費を投じ、米國主力艦隊

の全部を收容するに足る完全無缺の設備をなしつゝありますので、現在の眞珠港は、米國人自身の好んで口にする太平洋のジブラルタルと申しても、何等差支へのない金城湯池となつてゐるのであります。マハン提督の意見に據りますと、布哇の獲得は元來太平洋を越えて西方に前進するための飛石としてよりも、寧ろ外敵の進攻に備へる第一線の防壁として鼓吹されたものだと思つて申すことではありますが、今では全く意味が異つて参りました。布哇の法定常備軍の數は十一萬八千人といふことになつて居りますが、現在に於ける實際の駐屯兵數は一萬二三千人ぐらゐのものでありませう。一九二五年の米國海軍大演習が終りますと、陸海聯合の審判委員會は、眞珠港の淺濶や、既定計畫たるワイラー・フィールド飛行場の擴張や、オアフ要塞の大擴張を進言しました中に、布哇の法定常備軍の數を十五萬人に増加すべしといふ一條があります。彼等の想定に據りますと、假想敵國の布哇上陸軍は僅かに四萬であると申しますのに、何の必要があつて十五萬人の大兵を擁する必要があるかと考へて見ますれば、米國の肚は、結局西太平洋に於ける作戰に必要な場合、それらの兵員を使用しようと思

へてゐるのだと申さなければなりません。

次に米國の西部海岸に於ける海軍根據地を擧げますと、最も北にあるのがビューゼット・サウンド灣にあるプレマートン軍港であります。三個の大要塞、二個の大船渠、補助艦建造所、その他軍港に必要な一切の設備を具備した米國海軍有数の根據地でありまして、附近のポート・アンゼルスには潜水艦、驅逐艦、航空機などの根據地があり、サンドポイントには航空機の根據地があります。プレマートンを南に距ること約七十海里の地點には風景の美を以て知られるコロンビア河がありますが、その河口の小港アストリアには堅牢な要塞が築かれ、潜水艦の根據地が設けられてゐます。一九〇五年以來、米國海軍は此兩地に約四千四百萬弗の經費を投じて、その設備の完成を計つてゐるのであります。

太平洋岸に於ける米國海軍の最大根據地は、桑港灣の北方副灣たるサン・パブロ灣内のメーアイランド軍港であります。同名の小島にありまして、桑港からは二十海里足らずの距離にありますが、水深が浅いために、一等軍港としては兎角の批難があります。よつて米國

海軍は桑港の對岸アラメダの半島地を相して新らしく海軍根據地を設け、そこに大艦隊の修理補給に任ずる十二分の設備を致しました。従つて、海岸線の全長三百哩、水面の廣袤千六百平方哩と稱せられる桑港灣内には二個所の海軍根據地が並存し、外洋に通じる長さ三哩半の金門海峡は、無双の天嶮と稱せられる兩岸の斷崖絶壁を固むるに難攻不落の砲壘を以てしてゐるのであります。

ロス・アンゼルス市の一部サン・ピードロ要港には要塞がありまして、潜水艦や飛行機の根據地が設けられ、ロス・アンゼルス市を距ること百廿六哩、カリフォルニア最南の港市として名高いサン・デイゴ市には、軍港として殆んど完全に近い設備が出来てゐます。此地は天然の地形が風波を避けるに適し、灣の長さ十三哩、幅員半哩乃至二哩、水面の廣袤約二十四平方哩、水深凡そ三十六呎を算するといふことありますから、メーアイランドの水深二十二三呎に較べますと、近代の大艦隊を收容する上には、遙かに卓れた點を有つてゐるのであります。米國の軍事専門家は、この軍港を以て巴拿馬運河に對する作戰上の重要な根據

地であると認め、近年に至つて益々施設の完備を期し、燃料貯蔵所、軍需品倉庫、無線電信所、航空隊根據地を始め、要塞兵以外に海兵一個旅團をも駐屯せしめて居りますが、現在のところでは、主として各種補助艦艇の根據地といふことになつてゐます。

以上を以て米國西海岸に於ける海軍根據地は大體説明を終りました。今一つ是非申して置かなければならないのは巴奈馬運河の防備であります。更めて申すまでもなく、米國の東西兩海岸を結びつけるものは巴奈馬運河でありますから、米國の軍事當局者が、巴奈馬の防備に就て敏感なことは、殆んど失笑に値するほどであります。太平洋岸のことは姑らく置いて、太平洋岸に就て申しますと、運河の入口には多くの小島が散在して居りますが、その中でフラメンコ、ペリコ、ナオスの諸島には強力な要塞を築造し、バルボア港からナオス島に至る三哩の堤防には海岸要塞を設けて、十六吋砲、十四吋砲、六吋施條砲、十二吋白砲などを装備し、陸上には野戦築城を起して、歩騎砲數個聯隊を常置してゐます。しかもバルボア港には大艦隊に對する施設として、船渠、燃料貯蔵所、軍需品倉庫、艦艇修理工場などが備はり、

前進根據地としての資格に於ては、何等缺くるところがありません。臆病な米國人は、これを以てしても尙ほ不安に堪へないものと見えまして、パナマの灣口を扼するパラス島を始め、タボグイラ、タボガの諸島にまで嚴めしい武装を加へ、潜水艦を常備し、航空根據地をも設けつゝありますから、今日の巴奈馬は、宛然たる一個の大鐵塊であると考へるのが至當であります。

試みに太平洋の地圖を披いて、そこに描き出された米國海軍の根據地を一々指點して御覽なさい。マニラ、グアム、ツツイラ、眞珠港、サン・デイゴ、アラメダ、ブレマートン、シツカ、ウラナスカ、キスカを聯絡する參差錯落たる一線は、延長約一萬五千海里に亙る不平等邊多角形を描いて、太平洋の西北隅に偏在する日本列島を、南東北の三方から遠巻きにしてゐるのであります。しかも太平洋の西の入口たる新嘉坡が英國の手によつて握られてゐると同じく、太平洋の東の入口たる巴奈馬は米國の手によつて握られ、一見すると、日本は恰度袋の中に追ひ込められた鼠と同様の觀があるのであります。かやうに考へて參りますと、日

本のために残された唯一の通路は、日本海及び東支那海を経て亞細亞大陸に通ずる西方の一路のみであります。それさへも曾ては浦鹽、旅順、威海衛、青島を結ぶ一線によつて遮ぎられて居りましたのを、日露、日獨の兩戰役によつて、漸く取除くことが出来たのであります。

これに對する日本の防備は如何様になつてゐるかと思しませば、最も比律賓に近いところに、高雄州屏東街の飛行八聯隊があります。これが作戰上どんな意義を有つてゐるかといふことは、讀者諸君の御判斷に一任致します。臺灣には外に基隆要塞があります。以前から支那の要塞があつたところで、日清役の時には有地司令長官の率ひる艦隊によつて占領されました。臺灣海峡には馬公の要港がありまして、澎湖島要塞司令部の所在地となつてゐます。東支那海の南の入口を扼して、一步も敵を内に入れないやうにしてゐます。東支那海の東を劃る一聯の群島中には、奄美大島の要塞があります。馬公と、基隆と、大島との三要塞によつて完全に東支那海が閉鎖された形になつて居ることは、簡単な地圖を瞥見することによつ

ても、直ちに理解されるでありませう。

瀬戸内海に這入る西の入口には佐賀關の豊豫要塞がありまして、東の入口である紀淡海峡の由良要塞と相對し、瀬戸内海を完全に太平洋の敵襲から防衛してゐます。その安全な隠れ家の中に吳軍港のあることは、私が更めて申すまでもありますまい。吳と相並んで太平洋に面する軍港は横須賀であります。それは東京灣要塞司令部の所在地でありまして、嚴に帝都の保護に任じてゐます。東京灣を距ること五百三十海里のところに小笠原群島があります。南方から東京灣を衝かうとする敵にとつては、恰も東京灣の外堡をなすものであります。その主島父島の二見港には父島要塞があります。ヘクトル・バイウオーターの書いた想像戰の中に米國海軍が此島を占領しようとして大失敗をしたことが書かれてゐます。太平洋の策戰から申しますと、小笠原島が極めて重要な地點であることは、専門家の等しく認めるところであります。更に北に進みますと、本島と北海道とを分つ津輕海峡に、大湊要港と津輕要塞とがありまして、共に北門の鎖鑰に任じてゐます。

前に申しました馬公と、基隆と、奄美大島との要塞帯の中に佐世保軍港があります。佐世保要塞と長崎要塞とは、共に西九州を敵襲から安全にするものだとしていゝでせう。下關要塞が瀬戸内海の今一つの口を防衛するものであることは、事々しく絮説するを要しません。日本海の南の入口には、對馬要塞と、豊岐要塞と、鎮海灣要塞とがあります。この三個の要塞があるために、日本海は安全に日本帝國の池沼となつてゐるのであります。日本海の中には舞鶴要塞があつて、舞鶴要塞司令部の所在地となつて居り、北朝鮮の元山津には永興灣要塞があります。太平洋の作戦から申しますと、何れも大した價値はありません。

これを概観いたしますと、馬公、基隆、奄美大島、佐賀關、由良、東京灣、小笠原、大湊に至る線は、外敵に對して我領土を保護し、且つ外敵が東支那海に入るの道を遮断する役目を有つてゐまして、正に、わが國防の最終線を勤めるものゝやうであります。そこには日本海軍の根據地たる大軍港佐世保、吳、横須賀の三鎮守府がありますが、前二者が何れも堅固な外壁の中に安全な位置を占めてゐるのに反し、獨り横須賀のみは外洋に向つて曝露した形

になつてゐます。この意味から申しまして、東京灣の外壁たる小笠原群島の存在は、極めて重大な軍事上の價値を有つてゐると申さなければなりません。

華盛頓及びゼネヴアの兩軍縮會議に於ても屢々問題になつたこととありますが、海軍の戰鬥力を考慮按配するに當りましては、是非とも當該海軍國の有つてゐる海軍根據地の數をも打算の中に入れなければなりません。地中海の沿岸諸國にとつては、英國海軍が超ドレツドノートを多數に有つてゐるといふことよりも、寧ろクレタ島に強大な海軍根據地を有つてゐるといふことの方が、遙かに多くの壓迫を感じてありませう。所謂新嘉坡の築城なるものが屢々日本を脅威するや否やに就て論議されましたが、それとて海軍根據地なるものが如何に重視されてゐるかを證據立てるものでありまして、日本の立場から申しますと、決して輕々しく看過すべき問題ではありません。若し、英國海軍が往年のバルチック艦隊を學んで、懸軍萬里日本の近海に進攻すると致しましても、その大艦隊を安全な場所に收容して燃料彈薬を供給し、艦艇の修理を初め、如何なる要求にも應じ得られるだけの設備を整へた根據地が

なくては、到底何等の策動をも試みることは出来ずまい。勿論香港はありますが、今日の香港では未だ充分だとは申せないで、新嘉坡に堅固な要塞や大船渠を構築して有力な海軍根據地を造るといふことは、萬一の場合、日本に對して非常な脅威を與へることになるのであります。本年三月十三日發の倫敦特電は、補助艦制限に就ての米國の腹案を報道し、その一條件として海軍戰鬪力の測定には、必ず海軍根據地の數をも參酌したいと申して居りますが、極めて條理ある主張だと言はなければなりません。

第六章 開戦の時期

愈々本題に入りまして、日米戦争の假想圖を描き出すに當り、今一つ考へて置かなければならないのは、日米間の軍事行動が、如何なる時機に於て開かれるかといふことであります。

開戦の時期如何が、全體の戦局の上に及ぼす甚大な影響に就ては、こゝに冗々しく述べるまでもありますまい。一九一四年の歐洲大戰當時、獨逸の陸軍は、八月二日ライン河に架した復線鐵道十八個を利用して二十時間内に動員及び集中輸送を終り、八月五日の朝には既にしてエージの要塞を攻撃しつゝありましたが、この敏活な行動によつて、獨逸は久しい間有利な地歩に立つことが出来ました。日清、日露の兩戰役に於て、わが軍は赫々たる勝利をえましたが、それも一つには、わが國が開戦時期を誤ることなく、適當な時機に、適當な行動を執りえたことに基づく點も多かつたであります。

普通の場合でありますと、愈々開戦に至るまでには、必ず外交上の折衝があります。日露戦争の時のときは、事態が險惡の度を加へましてからでも、殆んど一年に近い間、問題は外交官の手に委ねられてゐました。これに反して、歐洲大戰の時には、殆んど外交上の過程といふものを見ないほどの迅速さで、英、露、獨、佛、澳の諸大國が、バタ／＼と立つて終ひました。日米間に戦争が起り得る場合を考へて見ますと、それは矢張普通の経過を辿つ

て、軍事行動の前には、必ず相當の期間外交上の折衝があるものと思はなければなりません。問題の核心は、勿論支那問題でありませう。支那問題以外に、將來日米を相戦はしめるほどの重大な問題は起りえないはずであります。

戦略的地位から申しますと、積極的に立つ機会を恵まれて居りますのは日本で、米國は止むなく受けて立たなければならぬ立場に居ります。それと申しますのは、米國の附近には攻撃すべき何等の目標もないのに、日本の附近には攻撃すべき多くの目標があるからであります。御存じのごとく、日本は米本國の附近に猫額の領土も有たなければ、若干の艦隊も有ちません。これに反して米國は日本と眼と鼻とのところに比律賓やグアムのごとき領土を有ち、若干の亞細亞艦隊をも有つてゐます。好んで戦ふことになれば、日本はいつ何時でも米國の頭上に一撃を加へることが出来ますが、米國の方はさう巧い調子に参りません。日本の外交は弱腰外交として有名な辭に、いざ鎌倉となれば、日本人は頗る出足が速い、これは已に過去の歴史が證明して居るばかりでなく、外國人も認めて居るのであります。「過去の事

實に徴すると、談判破裂と見るや、日本人が迅速と全力とを以て行動するであらうと推定することは、理由あることだ。(It is reasonable to infer from their conduct on previous occasions that the Japanese would act with swiftness and energy once a rupture had become in evidence.)とバイウオーターも申してゐるのであります。

日米間に重大な外交問題が起つたと致します。兩者の主張には大きな間隔があつて、到底一致しがたいといふ見込が付く。日米間の空氣は刻一刻と險惡の度を加へてゆく。電報は入り亂れる。世界の耳目は悉く緊張する。日米ともに各種の宣傳が行はれる。號外の鈴が街頭をかき亂す。主戦、非戦、雑多な輿論が交錯する。戰の神は已に闕の間際まで來てゐる。――しかも、この間の戰機を支配するものが日本であると致しますれば、日本は果して如何なる時期を選んで立つてありませう。日本の立つ時期如何によつて、戰爭の経過の上に非常な相違が起つて來るのであります。

第四章に於て申しましたやうに、合衆國艦隊は二つの部分に分れ、全隊の約四分の三が太

太平洋側に常置され、約四分の一が大西洋側に常備されてゐます。太平洋側の艦隊だけでも日本と戦へないことはありませんが、それでは折角與へられた優勢を抛棄したことになる上に、日本艦隊と五分五分に戦ふことは容易でないであります。だから、日米間の戦雲が色濃くなると同時に、米國は意を決して大西洋側の艦隊を移動し、太平洋側の艦隊に合同させなければなりません。日本の立場から申しますと、この事實は極めて重大な意義を有つて居りますから、日本は躊躇なく兩艦隊の合同に先立つて立つてあらうといふのが、多くの軍事専門家によつて唱へられる意見であります。米國の軍事當局者も、強く此見解を把持してゐるものと見えて、米國に於て行はれる海軍演習は、概ね此想定の上に立つてゐるやうであります。現に、一九二三年二月、米國海軍は巴奈馬の攻防演習なるものを行ひましたが、この時想定敵たる日本艦隊は、大西洋の米國艦隊が巴奈馬運河を通過するかしないかの時、已に巴奈馬の面前に現れてゐるといふことに假想されてゐました。若し、この時期に於て日本が立つたと致すすれば、それは日本にとつて最善の時期を選んだものと申すことが出来るであらう。

私から申しますと、日本の出足か如何に早いからと申しまして、兩艦隊の合同以前に日本が軍事行動に出ようとは思はれません。従來の遺口から見ましても、日本の外交は寛仁大度を以て旨とし、最後の瀬戸際までチツと辛抱するのが習慣となつて居りますから、大西洋艦隊は已に西航の途に就いた、もう巴奈馬運河を通過した、愈々太平洋艦隊に合同したと言つた風に、飛報頻々たるものがあつても、高々強硬な抗議を提出するぐらゐのことで、尙樽俎の間に應酬してゐると見るのが至當でありませう。さすれば日本が立つのは果して如何なる時期かと申しますと、私は合同を終つた米國艦隊が歩武堂々布哇の眞珠港に向つて出發した時か、さもなければ、眞珠港に向つた米國艦隊が首尾よく布哇に到着して、愈々積極的な作戦に移らんとする時かであると思ひます。前の場合では、まだ直接に日本を脅威することは出来ませんが、後の場合になると、日本は非常な脅威を感じます。それでも尙ほ日本は外交談判に最後の望みを繋いで、布哇に集中した米國艦隊の動靜を時々偵察するぐらゐのことに

留めてゐるとしまして、布哇に集中した米國艦隊が愈々眞珠港を出て西に向つたと言ふことになりませう、もう一刻もぐすついてはゐられません。最後の肚を据ゑて、電光石火のごとき軍事行動に出るでありませう。それは、日本にとつては『ありうべきこと』であるといふよりも、寧ろ『あらねばならぬこと』であります。この點に就ては、『日米一戰論』に於て、川島清治郎氏が明快に論斷を下されてゐます。若し、この時期に於て日本が立つたと致しますれば、それは日本にとつて必要な時期を選んだものと言ふことが出来るでありませう。

最後に今一つ假想されうる開戦時期があります。それは米國の大艦隊がグアム又は比律賓の根據地に到着した後であります。若し、この時期に於て日本が漸く立つたと致しますれば、それは日本にとつて最悪な時期を選んだものと申すことが出来るでありませう。假令軟弱な外交の結果にしても、怯懦な國論の結果にしても、將たまた拙劣な策戰の結果にしても、一度びさうした事態が生じたといふことになりませう、日本は態々不利な事情の下に戦ふこ

とを歓迎したのだと申す他はありません。日本は先天的に開戦時期を選ぶ自由な機會を恵まれて居ります。好んでその特典を放棄したといふことになりませう、日本は米國と五分五分の機會の下に戦はねばならなくなる上に、日本の戰略的地位は、極めて危険なものになつて参ります。

私は、日本人を以て、さほどの馬鹿者だとは考へません。如何なる樂天家でも、米國の大艦隊がグアムまたは比律賓に向つて出發した時は、最早彼の敵意を疑ふ餘地はないものと認め、彼のグアムまたは比律賓に據るのを待たずして最後の肚を括るでありませう。この點から申しましても、日本の軍事行動に出る時期が、米國艦隊の布哇出發より後でないことは、大抵想像するに難くありません。

そこで、私は今假に、この『あらねばならぬ』時期まで日本が辛抱すると致しまして、米國艦隊が眞珠港を出た時に、愈々日米間の戦時状態が開始され、日本が火蓋を切るものと假定いたします。すると、日本は果して如何なる作戦行動に出るでせう。この興味ある問題に

就て述べる前に、私は豫め諸君の御理解をえて置かねばならない問題を有つて居るのであります。

布哇の眞珠港が、米國海軍の前進根據地として太平洋のジブラルターまたはマルタの名に耻ぢないことは更めて繰返すまでもありませんが、たゞ一つの缺點とも申すべきことは、その位置が稍や東方に偏してゐますので、敵國日本を距ること餘り遠きに過ぎるといふことであります。試みに太平洋の地圖を開いて見ますと、布哇の眞珠港から日本の樺須賀軍港に至る距離は三千三百七十海里あります。然るに近代科學の精粹を鍾めたと言はれる海軍も、色の理由がありまして、主力艦隊が作戦行動しうる範圍は、その根據地から精々三千海里に過ぎないのであります、實を申しますと、この三千海里といふのも無理なので、事實有効に作戦行動しうる範圍は、一千五百海里乃至二千海里に過ぎないであらうと申されてゐます。さすれば、布哇に如何に強大な米國艦隊が據つてゐましたところで、それでは到底日本の心臓部を衝くことは出来ません。ミッドウエーやウエーキになりますと、多少日本に近づい

ては参りますが、それらの蕞爾たる小島が大艦隊の根據地として何等の資格も有つてゐないことは、すでに申述べた通りであります。

然るに同じ米國の領土である比律賓やグアムになりますと、事情がよほど變つて参ります。假に、強大な米國艦隊が比律賓の馬尼刺かグアムのアブラに據つたと致しますれば、そこから日本の東海岸または南海岸に至る距離は、千三百海里乃至千七百海里の範圍を超えないのでありますから、彼は便に日本の心臓部を衝くことが出来ます。従つて、米國艦隊當然の目的は、グアムまたは比律賓に到達することであり、日本海軍最初の目的は、グアム及び比律賓を略取することではなければなりません。開戦の劈頭に於て、米國海軍が若しグアム及び比律賓を喪うたといふことになり、彼は最早日本に對して積極的な作戦をする如何なる根據地をも有たないことになり、折角眞珠港を出て西に向つたと致しましても、結局落付き場所がなくて、悄々元の巢に引返さねばならんことになります。だから「亞細亞に於ける政

策の衝突』(Thomas F. Millard: Conflict of Policies in Asia.)に於て、有名な排日論者トー

マス・エフ・ミラードは、比律賓の防備は米本國の防備を意味するものと申して居ります。日本にとつての問題は、グアムや比律賓が果してさうたやすく日本の手に這入るかどうかいふことでありますが、米國にとつては甚だ御氣毒な次第ながら、それがまた譯もなく日本の手に這入るやうに出来てゐるのであります。

これと同じやうな事態が、歐洲大戰の初期に於ても起りました。御存知のごとく、獨逸は初め英國の蹶起を打算の中に入れて居りませんでした。豫期に反して、英國が愈々蹶起した時に、獨逸が先づ最初に計畫したことは、ドーヴァー海峡に面する伯佛海岸の有力な港灣、例へばオステンドや、チープルージヤ、ブローニュヤ、カレーヤ、ダンキールなどを一手に占領して、完全に英佛の海峡通路を壅塞することでありました。その計畫を見てとつた英國は非常に心配して居りましたが、果敢な獨逸軍は八月二十一日にオステンドを奪ひ、十月十六日にチープルージヤを手に入れて、この海峡に於ける優秀な地點を自分の有に致しました。その結果が如何に英國を苦しめましたかは、想像に餘りあるほどでした。戦後、英國の軍事專

門家は、皆チープルージヤを重視しなかつた佛國參謀部の短見を批難してゐます。

だが、日米相戦の場合、日本にとつて比律賓やグアムの必要なことは、英國にとつてチープルージヤやオステンドの必要な程度などは較べものになりません。オステンドやチープルージヤの喪失は必ずしも英國の死命を制するものではありませんが、比律賓やグアムが敵手に残ることは、ある程度まで日本の死命を制することになります。また、オステンドやチープルージヤが聯合軍の手に維持されることは、獨逸軍に對して大した苦痛を與へることにはなりません。グアムや比律賓が日本海軍の手に渡ることは、米國海軍に對して非常な苦痛を與へることになります。極端にグアムや比律賓を重視する論者は、日米間の戦ひは、日本軍のグアム及び比律賓占領を以て、終りを告げるだらうと言ふものさへあります。私は必ずしも此種の樂觀論に同意するものではありませんが、グアムや比律賓の軍事的價値を重視する點では、敢て人後に落ちないことを告白して置きます。新嘉坡を喪うた場合の印度や、ニューギニアを喪うた時の濠洲を考へて御覽なさい。トリンコマリーやシドニー

が如何に防備されようと、この二つを喪うた印度や濠洲の海岸は、最早進攻軍の砲熧の前に素裸のまゝで立つたも同様であります。グアム及び比律賓を奪取して米國海軍の手に返さないう限り、蜿蜒長蛇のごとき日本の海岸線は、終に一發の爆弾をも見舞はれることなく、極めて無難のまゝで戦争の終結を待ち得るやうな場合がないにも限りません。この一事は日本の運命の上に與へられた一つの天変であります。この天変を拒んで、態々苦しい戦ひを戦ふか、それともまたこの天変を受容れて、運命の神の命するまゝに戦ふかは、もとより軍事當局者の方寸にあることであります。

日本の存在するがために、米國にとつて比律賓が斷間ない頭痛の種になりましてからは、もうよほど長いことであります。一九〇五年の八月には、大統領ルーズヴェルトの使者が桂首相を訪れ、朝鮮に對する日本の自由行動を承認する代償として、日本は比律賓に對する米國の主權を尊重せよといふやうな提議を致しました。この提議が、桂首相によつて快よく容れられたことは言ふまでもありません。けれども、日本の野心なるものに對して極度に神經

質な米國は、ともすると日本が比律賓に誘惑されてゐるかのやうに考へ、いやしくも極東を論ずるものは、必ず比律賓の危殆な地位に就て一言を辯ずるといふ風であります。氣の早い論者の中には、比律賓の存在は、平素に於て日本の野心を挑發し、戦時に於て日本の餌食となるに過ぎないから、米國は寧ろこれを放棄して比律賓人の手に返してやつた方がいゝとさへ極言するものもあります。最も臆測を逞しうするものの中には、比律賓の國民的英雄ホセ・リサールは、その母によつて日本人の血を裏けてゐるから、日本は此好題目を捉えて比律賓の叛亂を煽動し、そのドサクサ紛れに乗じて比律賓を搔ツ拂ふに相違ないと申すものもあります。どんな想像をせうと先方の御勝手ではありますが、小心ものゝ日本が、わざわざ平地に波瀾を起してまで、他人のものを略奪するほど、思ひ切つた眞似の出来ようはすはありませぬ。日本人が大膽不敵な態度に出るのは、必ず自己に迫つた危険を避けんとする場合に限ります。彼等は、一種の正當防衛、一種の緊急行爲として、自己に與へられた總ての手段を勇猛且つ果斷に實行します。米國海軍の超ドレッドノートの砲熧が、筒先を揃へて日本に差

八六
し向けられたといふ時には、日本人が果してどんなことをするか、それは日本人のみが知る
ことであります。

私の話は、大分横路に外れたやうであります。私は話の本筋に歸つて、グアム及び比律賓
の攻略が、さほど容易に行はれ得る見込があるかどうか、それに就ての戸憚なき考へを述べ
ることに致しませう。

第七章 比律賓及びグアムの占領

正確な地理の智識は、この問題に就て最も明快な解決を與へます。私は先づ比律賓及びグ
アムの太平洋に於ける位置を説明する必要があります。

比律賓は九州の南西約千二百海里のところにあります。その軍港馬尼刺と佐世保とが概
距ることは、僅に千三百十八海里であります。馬尼刺と横須賀との距離は、呂宋島の南端す

ン・ベルナルデイノ海峡を迂回するために多少遠くはなつて参りますが、それでも尙ほ千七
百四十海里に過ぎません。然るに馬尼刺と眞珠港とが相距ることは殆んど五千海里に近く、
馬尼刺と佐世保との距離の約四倍弱、馬尼刺と横須賀との距離の約三倍弱に當ります。この
結果がどういふことになるかと申しますれば、米國艦隊が眞珠港を解纜すると同時に、日本
艦隊が佐世保または横須賀を出發すると致しますれば、米國艦隊が比律賓に到達する時日の
約三分の一を以て、日本艦隊は優に比律賓に到達するといふことになるのであります。戦時
に於ける日米艦隊の速力を十五節といふことに假定しますと、佐世保を出發した日本艦隊が
比律賓に到達するには四日弱を要しますが、眞珠港を解纜した米國艦隊が比律賓に到達する
には十三日強を要します。さすれば兩者の所要日数には約十日の相違を生じて参りますが、
その十日間の餘裕を利用して、もし日本軍が比律賓を攻略することが出来さへしますれば、
それで萬事日本に都合よく進展することになるのであります。問題の中心は、要するに十日
間ほどの短時日を以て、日本軍がよく比律賓を攻略し得るや否やといふ點にあります。

比律賓のカビテ軍港には、目下米國の亞細亞艦隊が駐在してゐます。一萬三千六百噸の舊式装甲巡洋艦ヒューロン號を旗艦とする極めて微弱な艦隊でありまして、輕巡洋艦三隻、砲艦三隻、驅逐艦二十隻、潜水母艦二隻、航空母艦一隻、潜水艦十二隻の外に、掃海艇や、特務艦や、水雷敷設艦などを加算しますと、總數は四五十隻にも上るでありませうが、艦隊の實力から申しますと、殆んど取るに足りないものであります。けれどもこの艦隊が駐在してゐるカヴィテ軍港は、馬尼刺灣口を距ること二十海里ばかりのところでありまして、その灣口を扼するコレヒドル、カペルロ、カラバオ、フライルの四個の島群には嚴重な防備が施され、中にも難攻不落の稱あるコレヒドル島には、十二吋砲六門、十二吋臼砲十三門、十吋砲一門、六吋砲四門、三吋砲四門を据付け、その他の諸島にもそれ／＼強力な防備が施されて居ります。更に、馬尼刺市の背面にも二線の砲臺がありまして、馬尼刺灣全體を固く武装して居りますから、如何に強大な攻撃軍と雖も、到底正面から馬尼刺に近づくわけには参りませぬ。殊にスピック灣の堅固な要塞に取り巻かれたオロンガボアの軍港は、恰度北方から馬

尼刺灣の側面を掩護して居りますので、それらを無視して攻撃を敢てすることになりますれば、攻撃軍の頭上に如何なる災厄が見舞うて來るかも判りませぬ。

けれども、比律賓を占領するためには、たゞ馬尼刺灣を正面から攻撃する方法ばかりでなく、或はリンガエン灣に上陸する方法もあれば、或はまたラモン灣に上陸する方法もあります。前者は馬尼刺の北方約百四十哩ほどのところにある大灣でありまして、灣口は外に向つて開いて居り、且つ灣内は廣大にしてとりとめがつかないためでもありませんか、今尚ほ無防備のままに放置されてゐます。灣内の都邑ダグバンから馬尼刺に至るまでは鐵路が敷設されて居りますので、大軍の行進には頗る都合のいゝところでありまして。後者は、前者の反對側である呂宋島の東海岸にあります。灣の前方稍北方に偏したところに貝を以て名高いポリロの大島がありまして、北方から來る敵の進攻を遮ぎつた形になつて居ります。米國のフィスク提督は茲に防備せよと主張してゐますが、今は幸ひにして何等の防備も施されて居りません。ラモン灣内の一地點から馬刺尼に至る道はラグーナ・ツ・ペーの北を通じて約五十哩も

ありませうか。芭蕉とババヤとの天國だと言はれてゐる此田園の間を通過して、その大軍を馬尼刺に進めることも、決して困難ではありません。若し、わが強力な艦隊に掩護された數個師團の陸兵が、そのあるものはリンガエン灣に上陸し、そのあるものはラモン灣に上陸するといふ風に、同時に數箇所から上陸を開始することになりますと、比律賓守護の任に膺つた米國軍は、果して如何なる方策を執るでありませうか。比律賓には、現に本國兵一萬五千と土人軍二萬、合計三萬五千の陸兵がゐるといふことになつて居りますが、その實數は高々二萬内外であらうといふことであります。何れに致しましても、土人軍のときは、大した役には立ちますまい。本當の役に立つのは一萬乃至一萬五千の本國兵であります。そんな寡兵を以て、潮のごとく寄せ来る侵入軍を防ぎきれものかどうか、私が事々しく辯ずるまでもないことであります。

この間の機微に通じてゐる英米の軍事専門家は、皆口を揃へて、日本軍の馬刺尼占領は僅に數日を以て終るであらうと申してゐるのであります。三色文明の都馬尼刺にして陥りました

たならば、ミンダナオを始めとして、比律賓全土の占領は、最早早なる時日の問題となつて参ります。

日本に對して特に敏感な米國人が、この危殆な形勢を知つて居て黙つてゐるわけはありません。比律賓の防備に就て、彼等は斷へず甲是乙非の議論を闘はして居りますが、結局華盛頓條約の防備制限事項に制せられて、何等施す策を有たないのであります。「比律賓の防備に就つ」(B. A. Flake: The Defence of the Philippines)と題する論文に於て、米國のフィスク提督は、航空機を以て比律賓を防備すべしと説き、呂宋島の各地點を選んで、適當に鐵裝された百機ほどの空軍を配置さへして置くと、よし如何なる方面から敵が侵入して來ても、直ちに撃滅することが出来るだらうと主張して居ります。例のミツチエル大佐は、フィスク提督と同じ論據に立つて、日本こそ航空機の力によつて開戦後二週間以内にはグアムと比律賓とを占領して終ふだらうと心配して居ります。随分簡單明白な意見であります。果して巧くゆくでありませうか。この意見を丸呑みにしたらしい海軍少佐川田功氏は、會て日米戰

争を主題とした一篇の物語を書き、その一節に於て、比律賓遠征の日本軍が敵の飛行機に邀撃されて全滅する惨状を描いて居りますが、今日の飛行機が如何に發達してゐるからと申しまして、眞逆飛行機だけで上陸が阻止されるわけのものでもありませんまいし、飛行機だけで比律賓が占領されるわけのものでもありませんまい。向うに飛行機があれば、こちらにも飛行機があります。掩護艦隊と行を共にした若干の航空母艦からは、必ずや幾多の飛行機が飛び出して、敵の飛行機を牽制するに相違ありません。殊に、臺灣の南端と比律賓の北端との間の距離は僅に二百海里ばかりでありまして、鵝鑾鼻の燈臺の光はよく比律賓の山を照らすと申すほどでありますから、臺灣からはドシ／＼飛行機が飛來してわが上陸軍の行動を掩護するであります。高雄州屏東街の飛行八聯隊が、抑も何のために存在してゐるかを考へますと、その邊のことは自ら了解されるはずであります。數日を以て馬尼刺の占領が終り、また數日を以て一應の防禦工事さへ出來上りますと、米國艦隊がいつ到着しませうと、もう何等懸念することはありません。壘を固め、堀を深くし、砲を磨いて、冷然と敵のなすところに

應酬すればいゝのであります。

比律賓の占領に較べますと、グアムの占領はものゝ數でもありません。なるほどグアムは比律賓を東に距ること一千五百海里でありますから、それだけ眞珠港に近いわけではあります。それが、それでも尙三千三百海里強あります。一時間十五節の速力と假定しますと、眞珠港を出た米國艦隊は、約九日の後でないかとグアムに到着致しませんが、グアムを距ること僅に一千三百六十海里の横須賀から日本艦隊が出發すると致しますれば、それがグアムに到着するのは、米國艦隊の到着に先立つこと約五日であります。この五日間にグアムの支配權が完全に日本軍の手に移りさへ致しますと、その結果は比律賓の場合に於けると同様になるのであります。

グアムは米國大統領が任命した海軍出身の知事によつて支配された小島でありまして、特殊な場合でない限り、外國商船は一切寄港することを許されません。島は長さ三十二哩、廣さ四乃至十哩、周圍約百哩、全體の總面積二百二十八平方哩ありまして、首府はアガナと言

ひ、アガナを距ること八哩の地點に軍港アブラがあります。有名な無線電信局は標高六百呎のマチャナオの丘上に立つて居り、オローテ半島の岬角には六吋砲を装備した砲臺が設けられ、首都アガナの兵營には約二千の陸戦隊が駐屯してゐます。米國海軍のために主として石炭積込港として利用せられ、島を防備する上にも、艦隊を收容する上にも、今日では唯今お話しした以上に何等の設備も施されて居りません。——これだけのことを申上げますと、グアム島の占領が果して五日間に完了するかどうかといふことは、最早困難な性質を帯びた問題たる資格を失つて參るでありませう。實際、日本の強大な艦隊と、日本の勇武な陸兵とに比べては、グアム島の占領ごとき、素より朝飯前の仕事であります。「太平洋の海權」の著者が、「日本艦隊黎明グアムに達すれば、日没には最早日章旗が島上に翻へるだらう。」と申しましたのは、決して誇張に過ぎた言葉ではありません。

私は尙ほかゝる場合のあり得ることを信じてゐます。御存知のやうに、グアムはわが委任統治の南洋諸島に包圍されてゐます。日米間の國交がだん／＼險惡になつてゆくを見て、

萬一の場合を豫期した日本の有力な艦隊が、豫めそれらの島の一つに匿れてゐたりでも致しませんが、僅々半日か一日かの中にグアムを襲ふことも出来るわけであります。サイパン島はグアムと指呼の間にありますし、ヤップ島と雖も僅に四百五十海里の近距離にあります。現にグアムを距ること五百海里ほどのところにあるウルシー群島の或る大環礁のごときは、會てわが第二艦隊の全部を容れて尙ほ餘りがあつたと申すほどでありますから、わがグアム遠征艦隊を收容するぐらゐのところは、その邊のどこかに必ず存在してゐるはずであります。理論上から申しますと、比律賓の場合に於ても同様で、臺灣に於ける多數の港灣、殊に馬尼刺を北に距ること僅かに三百海里のところにある馬公要港のごときは、わが比律賓遠征艦隊にとつて此上もない隠れ家でありませうが、比律賓攻撃の場合には、唯だ多數の陸兵を同行する必要がありまますので、さうした苦肉策を講じる餘地がすくないかも知れません。何れに致しましても、日本の立場は餘裕釋々たるものがありますが、米國の立場は寸分の餘裕もない極めて切詰めたものになつて居ります。彼が如何に藻掻き苦しませうと、眞珠港とグア

ム及び比律賓との間の距離は、毫も短縮されることがありません。彼は正直に數千海里の航程を積んで、正直に目的地に到達する外はないのであります。

日本が電光石火の勢ひでグアム及び比律賓を占領したとなりますれば、そこには實に變挺古な軍事上の形勢が現れて参ります。パイウォーターは申してゐます。「グアムと比律賓とを敵手に委したならば、米國は殆んど解決しえない難題に當面するだらう。」(With Guam and the Philippines in enemy's hands, the problem confronting the United States would become well-nigh insolvable.) それと申しますのは、グアムと比律賓とを喪ひますれば、米國は最早

西太平洋には何等の根據地をも有たないからであります。根據地がないからと申しまして、眞珠港からでは如何様にしても日本の心臓部を衝くことは出来ません。徒らに大きな艦隊を有つてゐるだけで、何の役にも立たない。いはゞ寶の持ち腐れも同然であります。それに反して日本はグアムと比律賓とを占領して大いに意氣するとともに、時には果敢な潜水艦が長驅米國の西海岸に出沒して米國の商船を襲撃したり、米本國と眞珠港との間の補給航路を脅

かしたり致しましたならば、自負心の強い、敗けることの嫌ひな米國人は、立つても座つてもゐられないほどの焦慮を感じるでありませう。

華盛頓會議に於ける加藤全權の功過に就ては未だ定論を見ない有様であります。所謂七割比率の問題で失敗したのは、決して加藤全權の罪ではありません。強ひて申しますと、加藤全權の過ちは陸奥復活の問題でありませうが、それとても果して失敗であるかどうかは、唯だ一部の高級専門家のみが知ることでありまして、われ／＼のごとき素人輩の到底伺ひ知ることが出来ない問題であります。唯だ一つ、私が斷じて加藤全權の大功として推賞したいのは彼が所謂防備制限問題を提唱し、その主張を貫徹したことでありませう。私から申しますと、所謂防備制限なるものが存在しないで、グアム及び比律賓が金城鐵壁のごとく武装されますことは、日本にとつて二隻や三隻のドレッドノートには較べられないほどの脅威であります。日本が如何に地の利を惠まれてゐたからと申しましても、グアムや比律賓が金城鐵壁のごとく武装されますと、それは最早日本の手には這入らないやうになります。すると、そ

の結果がどうなるかといふことは、既に諸君の理解されるところでありませう。

華府會議の後、米國海軍大佐ノックスは、『米國海軍力の衰頹』(D. W. Knox: The Eclipse of American Sea-Power) といふ書物を著して、華府會議に於て米國が西太平洋に於ける防備の現状維持を約束したことは取り返しつかない大失敗であると憤慨し、その結果、西太平洋に於ける日米海軍力の比は二對一になつたとさへ歎いてゐます。彼は申します。「假にグアム及び比律賓が攻撃不可能な程度にまで防備されたとしても、日本は此協定によつて西太平洋に於ては米國の五に對する六の防禦力を與へられてゐるのであるから、満足して米國の五に對する三の比率を甘受するであらうと思つたのに、計らずも彼は西太平洋に於ける海軍根據地の防備を現状のままに留めて貰いたいといふ交換條件を提出した。」と。——私はノックスの漏らす不平が果して正當であるかどうかは知りませんが、兎に角、西太平洋に於ける海軍根據地の防備制限によつて、作戰上日本が大いに利するところのあつたことだけは事實であります。

本題に戻つて、私は尙ほ日米戦争の假想圖を描きつつけることに致します。日本は、米國艦隊がグアム及び比律賓に入る前に、都合よく兩者を奪取したとします。比律賓全土には、直ちに日本の軍政が布かれ、グアム島には、直ちに若干の日本艦隊が移動されることは申すまでもありません。強大な米國艦隊は、依然として眞珠港に居ります。併し、たゞそれだけのことでは戦争は終結を告げますまい。戦争が終結を告げるためには、日本が進んで米國に和平を希望するほどの痛撃を與へるか、米國が進んで日本に和平を希望するほどの痛撃を與へるかが必要であります。さて、その時、米國は果してどうするでありませう。日本は果してどうするでありませう。問題の性質はよほどむづかしくなつて參るのであります。

第八章 貿易破壊戰

開戦の劈頭、日本が逸早くグアム及び比律賓兩島を奪取し、米國の大艦隊が止むなく眞珠

港に立往生の醜態を演じることになりますと、戦局は一種の持久戦模様になりました。兩國ともに花々しい第二次戦に移ることはむづかしくなつて参ります。多くの論者は、この時に於て、日米兩國ともに熾烈な外交戦に移るだらうと申します。蓋し、當らずとも遠からざる推測だと思ひますが、外交的方面を論ずるのは後のことと致しまして、私はたゞ軍事方面の活動に就てのみ考へて見ることに致します。さすれば、この進退兩難の時機に於て、日米兩國が互ひにその敵手を苦しめるために案出する策戦は何でありませうか。曰く、貿易破壊戦 (Attack on Commerce) であります。

歐洲大戦が起る前までは、敵國商船の拿捕や撃沈は、單に復雜多端な戦闘行爲の一方面を現はすだけでありまして、戦争全體に於ける重大な部分を形成したものではありません。然るに、歐洲大戦に際して、海軍力の劣勢な獨逸が苦しき程に敢行した貿易破壊戦は、その將來した結果が意外に重大でありましたから、今日では極めて有力な戦争方法の一つとして認められてゐるのであります。開戦の初めに於て、カールスルーエ、キルヘルム大帝、ケー

ニヒスベルヒなどの諸艦が、どれだけ英國の貿易路を脅かしましたかは、今に尙ほ諸君の御記憶に残つてゐることでありませう。ミュラー大佐の指揮する三千六百噸の巡洋艦エムデンは、青島脱出後、南洋から印度洋の間をあげれ廻つて聯合國の交通路を脅かし、わずかの間に、英國船だけで七萬一千噸を撃沈し、一萬八千噸を拿捕又は釋放しました。かやうなわけで、歐洲大戦の初期に於て喪つた英國の商船及び貨物の價格だけでも、約六百七十萬磅の巨額に上ると稱せられてゐます。殊に、破れかぶれになつた獨逸が、所謂Uボートを駆使して、縱横無盡に無制限潛航艇戦を開始してからは、聯合國側の喪失する船舶は、少くとも毎月五十萬噸以上にのぼり、その結果として、食料品の大部分を外國からの供給に仰ぐ英國は、僅かに二週間を支へるだけの食糧を抱いて、いつ來るかも知れない餓死の不安に戰つてゐた時もあるといふことであります。——何れに致しましても、日米兩國が相戦ふ時、そこに激烈な貿易破壊戦の起るのは、到底避けがたいことであります。

私は先づ米國が破壊せんとする日本の貿易路に就て考へて見ませう。最初に私の頭に映る

のは、太平洋を航行する日本の商船を追ひ廻すことであります。開戦當時、米國の近海を航行する日本の船舶が最初の血祭にあげられるのは、極東の近海を航行する米國の船舶が最初の血祭にあげられるのと同様で、必ずしも不平を言ふには當りません。だが開戦後に於ても、倫敦または漢堡に向つて航行する日本の船舶は、太平洋の東部に於て、屢々米國の潜水艦又は假裝巡洋艦によつて襲撃される虞れがあります。太平洋側の根據地、例へばポストンまたはフィラデルフィヤから、西歐羅巴の海岸に至る距離は約三千海里であります。そこは米國のために残された自由の天地でありまして、日本がどれだけ努力をして見ましても、彼の行動を拘束し得る何等の手段もありません。

次に米國が力を用ゐるところは濠洲航路であります。策源地は多分サモアのツツイラ要港であらうと想像されますが、それでは少し遠すぎる感じがありません。普通日本の商船は、比律賓の西海岸を航行してセレス海に出で、マカツサル海峡、バンド海、アラフラ海を経てトールレス海峡にかゝるのでありますから、ツツイラ要港を根據地とする米國艦

艇が、メルボーンまたはシドニーに赴く日本の商船を襲撃するためには、先づ濠洲の東海岸附近を探ふより外に手段はありません。さうすると、勢ひ襲撃の機會が減つて来るわけでもありますし、また、ツツイラから濠洲の東海岸までは二千海里以上の航程がありますから、さう思ふ存分な行動もとれないはすであります。

日本の近海航路、支那航路、印度航路、南洋航路、東アフリカ航路、地中海航路に至つては、先づ原則として襲撃不可能であると申していいで、米國艦隊がどれほど勇猛果敢でありませうと、眞珠港から航程五千海里の上に出る南支那海や、新嘉坡附近などを脅かすことは出来ません。だからと申しまして、戦時には、えて理外の理が實現するやうなためしもあります。比律賓にゐた艦隊の一部が逃げ出して、かのエムデンのやうに南洋諸島の一隅に潜んでゐたりでも致しますと、意外なところで、意外なことの起る場合もあります。殊に、強國同士の戦争には、弱小中立國の義務違反を強制して策を施すやうなこともないではありませんから、如何なる航路であらうと、絶対に安全だなどと保證することは出来ません。

まい。貿易破壊戦のために米國が航洋潜水艦でも使用することになりますれば、わが商船の蒙る災厄は愈々大になつて参りませうが、それは止むをえないことと諦める外はありません。更めて申すまでもなく、戦争は、國家と國家との間に起つた命の遺取りであります。少々の怪我や損失を恐れてゐるやうなら、始めから平身低頭して降参して置く方がよろしい。

日米開戦とともに、直ぐ停止の止むなきに至るものは、當然の結果である北米航路の外に、太平洋を通路とする南米航路であります。桑港と、布哇と、サモアとを結ぶ四千四百海里の一線は、斜に太平洋を二分して、日本から南米の西海岸に至る航路を完全に遮断して居りますから、日本の船舶は、西徑百七十度の線を一步たりとも東方に向つて踏み出すことは出来ずまい。印度洋を通過し、希望峰を迂回して南米の東海岸に至る航路は、前者に較べますと、遙かに安全率が高いやうに思はれますが、それでも尙ほ米國海軍の勢力圏内であることは覺悟して置く必要があります。況んや、サントスマたはモンテヴィデオを訪問した日本船舶が、長驅マゼラン海峡を迂回して、バルパライソまたはイキケに赴かうとするのは危険

至極でありまして、先づ撃沈か拿捕かの運命は免れないものと思はねばなりません。

さうすると、日本は、米國の何れの貿易路に向つて脅威を與へるでありませう。最も明白なことは、日本の海軍力によつて亞細亞の海岸が全部封鎖された形になる結果、米國の極東航路が全部停止されることあります。米國から日本への航路は勿論、米國から支那への航路も、米國から比律賓への航路も、米國から佛領印度への航路も、一つとして繼續の可能性あるものはありません。それと同時に、米國の西海岸と新嘉坡以西との間の交通が停止され、米國から印度に赴くには、是非とも地中海を通過して、蘇士を経由する必要が起つて参ります。今假に桑港を發してカルカッタに赴かんとする米國船があるといたします。普通の場合でありますと、その船は一直線に太平洋を横断して新嘉坡に出で、そこからベンガル灣に這入るのでありますが、日米戦争の場合は、さういふ便利な道はとれません。彼は先づ北米の沿岸を南下して、巴奈馬に達し、そこから大西洋、地中海、蘇士、紅海といふ順序を経て印度洋に出で、愈々最後にコモリン岬角を迂回してベンガル灣に這入るのであります。前者の

航程は約一萬海里でありますが、後者の航程は實に一萬五千海里にもなりまして、前者の約一倍半にも相當する大迂回路をとることになるのであります。これは米國にとつて随分苦痛なことでありませう。

次に米國と濠洲との貿易路はどうなるかと申しますと、日本が受ける以上の危険を、米國が受けることになるのであります。私は前にツイラから濠洲の東海岸までの距離は二千海里強あると申しましたが、南洋統治領の或る一島、例へばカロリン群島中のボナベ島から濠洲の東海岸に至る距離は一千八百海里強でありまして、そこに根城を置く日本艦隊は、ツイラに根城を置く米國艦隊よりも、より多くの活動圏を惠まれてゐるのであります。殊に、米國にとつて不利でありますことは、日本の濠洲航路が危険に曝されてゐる範圍はホンの濠洲の東海岸だけであります。米國の濠洲航路が危険に曝されてゐる範圍は、單に濠洲の東海岸ばかりではありません。布哇からシドニーまたはメルボーンを結ぶ線は、マーシャル群島中の一島、例へばヤルト島から僅かに一千三百海里の距離にありますし、桑港から直接に

シドニーまたはメルボーンを結ぶ線は、ヤルト島から高々一千五六海里しかありませんから、ヤルトに根城を構へた日本艦隊の活動範圍は、優に布哇——濠洲線及び桑港——濠洲線とクロスすることになります。だから若し全體の危険率から申しますと、日本の一に對する米國の五または六にも當るかも知れません。極端に申しますと、日本の濠洲貿易は先づ可能であります。米國の濠洲貿易は先づ不可能と見ていゝであります。

次ぎには米國の南洋貿易であります。これは殆んど問題となりません。日本の艦隊にして假にミンダナオ島のダヴァオまたはヤツブ島に隠れて居ると致しましたならば、米國の船舶のごときは、たとへ一隻たりともアラフラ海やベンダ海を徘徊することは出來ないはずであります。ヤツブ島を基點として南に一千五百海里を半徑とした圓周を描きますと、その半圓は、東はソロモン群島の太半から、ニュー・ブリテン、ニュー・ギニア、ジロロ、セレベス、チモル、フロレス、ロンボック、バリを経て、西は瓜哇の東半、ボルネオの大部分まで包含することになります。假裝巡洋艦か、それとも實戰に役立たない舊式の小艦隊が二三隻

もありませんと、珊瑚海から西には、最早星條旗を掲げた船舶の片影だに見ることはありませんまい。概括して申しますと、グアム及び比律賓の占領によつて日本は東經百六十度の線で、完全に米國の太平洋交通路を遮断するのであります。敢てこれを侵さうとする米國船舶に對しては、たゞ日本軍艦の發する砲彈が適宜の處置をするだけのことであります。

太平洋による極東との交通、太平洋による印度との交通、太平洋による南洋との交通、太平洋による濠洲との交通、——それらの一切が全然遮断されるか、それとも大いに阻害されるか致しますと、米國に残された太平洋交通路は、たゞ僅かに北方加奈陀との交通路及び南方南米との交通路だけであります。これとても全然安全だとは申されないで、マーンシャル群島中の或る一島から出發した航続力一萬海里と言はれる日本潜水艦は、よく桑港またはロス・アンゼルス近海に到達して、そこを航行する米國船どもに、氣味悪い魚雷の御馳走を振れまふことも出来るのであります。況んや、米本國と布哇の眞珠港とを聯絡する二千一百海里の補給航路は、日本の奇襲艦艇に與へられた絶好無二の獵場でありまして、この間の

安全策を講ずるためには、米國は當然多大の犠牲を拂はなければなりません。さらに今一つの注意すべきことは、假令蘇士を通過するにしても、米國のカルカッタ航路が、依然として非常な危険を負はねばならぬと申すことであります。御存知のごとく馬尼刺から新嘉坡に至る距離は一千三百四十海里でありまして、新嘉坡からマドラスに至る距離は一千三百海里であります。もし馬尼刺に駐泊する日本艦艇が二千六百海里を西行しますと、その最後の幾十海里かによつて、日本艦艇は西方からカルカッタに向つて航行する米國船の航路を容易に遮断することが出来ます。この點から申しますと、日本は東經百六十度の線で、米國の太平洋航路を遮断するばかりでなく、東經七十五度または八十度の線で、米國の印度洋航路を遮断することが出来るのであります。

日米兩國が、果してどれだけの敵國船舶を撃沈し、果してどれだけの損害を敵に與へるかといふことは未知中の未知に屬することでありますが、何れに致しましても、日本が米國に與へる損害は、米國が日本に與へる損害よりも遙に大であります。双方が共に同一の機會

に於て獲物を争うたと致しましても、より多く船舶を有つたものは、より少く船舶を有つたものよりも損であります。況んや、日米兩國が獲物を争ふ機會は、決して同一だとは申されません。その範圍の廣大なことに於ても、その立場の有利なことに於ても、日本は遙に米國に優つて居ります。この一事は厚く運命の神に感謝すべきことであります。萬一にも日米兩國の關係が逆になつて居りますと、日本は大切な貿易を破壊された上に、自國の食糧にまで困るやうなことになるとも言へません。富の程度に於て、日本はやつと米國の七分の一乃至八分の一にしか當らないでせう。勿論攻城野戰の雄たることは必要であります。經濟的にも蹉跌しないやうに心懸けねばなりません。連戰連勝の獨逸が崩壊したのは革命亂の勃發したためであります。革命亂の勃發したのは國民經濟の破滅したためであります。概して獨逸の遺口には思慮の乏しい點が多かつたやうに思はれます。自己の力を過信致しますと、えて思はぬ不覺をとることがあります。一九一六年ベルリンに於て出版された『次期の世界大戰』と題する書物の中で、某匿名氏は、日米間の戰爭を豫想して、『カリフォルニア、サン

ドウィッチ、サモア、フィリッピンを獲るために、一厘一毛をも消費しないといふのが、日本の根本方針である。』と申して居ります。眞逆さう巧い調子にも行きますまいが、そこに大體の方針を置いて戰爭にとりかゝることは必要中の必要であります。

何れに致しましても、貿易破壊戰を繰返してゐただけでは、到底戰爭は終結を告げません。日本の方はまだいゝと致しましても、米國の方がつまりません。比律賓とグアムとを奪られたまゝ萎縮してゐるといふことになりますと、日米兩國間の戰爭は、一應の形勢に於て米國の負といふことになります。それではヤンキーの負けぢ魂が承服しないでありませう。彼は是非何か企てねばなりません。何か企て、小面憎いジャップに一泡吹かせねばなりません。焦慮と、煩悶と、憤懣との板挟みになつた米國が、この時果して何を企てるかといふことは、多分日米戰爭に於ける最も興味ある問題でありませう。

第九章 比律賓の奪還は可能なるか

一九一三年四月、カリフォルニア州に日本人の市民権問題なるものが勃發して、日米兩國の外交關係が頗る險惡になつたことがあります。その時海軍卿ダニエルズが、ウキルソン大統領に對して海軍軍令部の作成した悉しい報告書を提出し、「日本は開戦と同時に比律賓、布哇、アラスカを占領するだらう。」と申しますと、ウキルソン大統領は、「日本は或はさうすることが出来るかも知れんが、それらの土地を長く占領してゐることは出来まい。結局、米國が攻勢に出ると、米國は思ふ存分に活動することが出来るからだ。」と答へたと申すことであります。

この興味ある挿話は當時の農務卿ハウストンが書いた「回顧録」とも云ふべきものの中に出てゐるのでありますが、かうした考へを有つてゐるのは、獨りウキルソンだけではありません。軍事上の智識に疎い一般の米國人等は、自國の強大な力を盲信する結果、皆比律賓の奪還ぐらゐは易々たる問題だと考へてゐるでありませう。戦争の場合、最も怖るべきものは輿論でありまして、誤つた輿論は、屢々冷靜な軍事當局者をも動かして、不知不識の間に無謀な作戦を敢てせしめるやうなことになる易いのであります。殊に、平素から輿論過重の傾向が著しい米國に於ては、さうした危險が一層濃厚ではないかと思はれます。有名な米國通であるゼームス・ブライスは米國の最高政策に方向を與へるものは、カツプエーの私語や俱樂部の漫談であると申して居りますが、何の智識も有たない、無知無定見な民衆どもが、一杯機嫌で、「比律賓を取り返せ！ グラムを取り返せ！ 日本人の頭上に鐵拳を喰はせろ！」と喚き立てますと、米國の軍事當局者等は心竊かに危險な策戦だとは承知して居つても、つひ浮々とさういふ危險な策戦を強行するやうなことにならないとも言へません。戦争は徹頭徹尾天才主義の王國です。一人のフォツシュがあることは、十萬の雜兵があることよりも大切であります。一人のフォツシュが支持する意見は、十萬の雜兵が支持する意見よりも大切

であります。戦場に於ける軍隊の一舉一動が、軍事に無知な民衆の意嚮によつて支配されるやうになりますと、戦争は最早敗北だと観念すべきであります。

日本がグアム及び比律賓を占領した後に、米國が若し比律賓の奪還に向つて邁進するといふことになりましたれば、それは軍事に無知な素人側の意見が、米國の軍事當局者を動かしたものだと思へばよろしい。苟も軍理を解すものであれば、何人たりとも好んで死地に入るものはないはずであります。——私は、以下少しく比律賓奪還の不可能な所以を説明致しますせう。

第一に考へなければならんことは、米國海軍が若し比律賓の奪還を強行しようとするれば、その大艦隊の殆んど全部を擧げて西征しなければならんといふことでもあります。さもないと、それらの艦隊は、日本の主力艦隊によつて滅茶々に叩き潰される虞れがあります。日本の主力艦隊に對抗し得るものは、たゞ米國の主力艦隊があるだけだといふことを記憶して置いて下さい。第二に考へなければならんことは既に比律賓に據つて地歩を固めてゐる日

本の陸兵を撃破するためには、是非とも多數の陸兵を連行しなければならんといふことでもあります。この二つの事實を綜合することによつてどんな結論が生れて來るかと申しますと、比律賓の奪還を目的として所謂渡洋作戦を敢行する米國艦隊は、それ自身の主體である歴大な艦隊と、多數の陸兵を搭載する歴大な運送船隊とから成立するといふことでもあります。十數隻の主力戦艦、二三十隻の巡洋艦、五六十隻の驅逐艦、若干の潜水艦、若干の航空母艦、數十隻の特務艦、——それらのものが舳艫相啣んで太平洋の真唯中を航進する壯觀は想像するに餘りありますが、まだその上に前古未曾有の大運送船隊が参加するのであります。比律賓攻略のために、日本が假に八萬の兵を送つて居ると致しますれば、それを撃破するために、すくなくとも日本と同數以上の陸兵を要するわけであります。ピトキンの説に従つて一人の兵員を輸送するに必要な船腹を最小限度十八噸と致しましても、十萬の兵員を輸送するには、最小限度百八十萬噸の船腹を必要とし、一隻の平均噸數を一萬五千噸と見積りますと、比島奪還軍の要する運送船の總數は、實に百二十隻の多數に上るのであります。さう致します

と、前後を通ずる艦船の数は約三百隻ぐらゐにもなりませうが、これだけの新クセルクセス艦隊が堂々と太平洋の真中に乗出すといふことになりませうれば、日本のテミストクレスが黙つて敵のなすところを傍観してゐるはずはありませうまい。斷へず布哇の附近を遊弋して敵艦隊の動静を探つてゐる偵察艦からの飛電が日本艦隊の根據地に達しますと、或はかくあらんと豫期してゐる日本艦隊は、瞬時にして萬般の準備を整へ、好んで死地に入る敵艦隊を弄殺せんと試みるでありませう。

ノックス大佐が申しますやうに、日本は天然に島嶼の連鎖から成る内外二重の堅牢無比な防壁を有つてゐます。内方の連鎖は、すでに堅固な防備を施してゐる澎湖列島、臺灣、薩南諸島、小笠原群島及び千島列島から成り、外方の連鎖は、珊瑚と深海とに圍まれた廣袤幾千海里に互るマーシャル、カロリン、マリアナ、ベリユーの諸島が、そのあるものは米國海軍の進路に對して直角に、そのあるものは米國海軍の進路に對して平行に、宛も秋夜の星のごとく撤き散らされ、その總數は一千餘個にも上るのであります。然るに、眞珠港から比律

賓島に至るまでの距離は、約四千八百海里あります。一時間十五節の速力を以て進みましても、約十四日の後でなくては目的地に達することが出来ません。すると、これだけの大艦隊が十日間以上も外洋の真中に曝露して、その進路を敵の堅固な防禦線の中にとらなければならぬことになるのであります。何が危険だと申しましてもこれほど危険なことはありませんまい。米國の大艦隊一度び西征すると聞くや、その珊瑚礁島の屈強な隠れ場は、わが奇襲艦艇や航空機の巢窟となるでありませう。彼等が機に乗じ、變に應じて、決死的活躍をするのは申すまでもありませんまい。米國艦隊如何に強大でありましても、その半ばは戰鬥力微弱な特務艦であるか、或は戰鬥力皆無な運送船でありまして、いはゞ大人と子供との道行きであります。子供の方を掩つて居りますと、大人の方は自由が利きません。わが輕捷軍のごとき奇襲艦隊にとつては、これほど嗜慾を挑る餌食はありませんまい。敵の巡洋艦、驅逐艦、潜水艦のすべてを擧げて防禦に努めて見ましても、自分の掌中に戰機の自由を握つてゐる奇襲艦隊は、或は現れ、或は隠れ、突嗟の間に敵の急所を衝いて、殆んど應接に追なからしめる

でありませう。拾四日の間、かゝる危険が断へず米國艦隊の上に降りかかつて参りますと、隊伍は亂れ、兵員は疲れ、氣力は衰へ、根氣は消え、さしもの大艦隊も進退兩難の窮地に陥つて、思はず知らず悲鳴を擧げることになるでありませう。米國の前海軍次官ルーズヴェルトは、『米國が若しこの計畫を實行すると、全艦隊の四分の一乃至三分の一の損害を蒙るだらう。』と申して居ります。假にその程度の損害で喰留めることが出来れば、それは米國海軍にとつて非常なお手柄だと申さなければなりません。

私が今までに申しましたのは、まだ通り一遍の危険であります。私の眼前に髣髴として浮び上る畫面は、日が水平線下に落ちて椰子樹茂る島群が全く夜の帳に包まれました時、それらの島々から躍り出した奇襲艦艇の群れが、歴大な敵艦隊目算けて驀進する物凄い光景であります。よし如何なる神算がありませうと、總數三百隻から成り立つた大艦隊が、夜陰に紛れて全く踪跡を晦ますことが出来やうなどとは信じられません。ジュットランド海戦の時、ゼリコー提督の率ひるグランド・フリートは午後七時過ぎに早くも追撃戦を切上げましたが、

それは全く獨逸潛航艇の襲撃を慮れたからであります。日高謹爾少將の研究に據りますと、ジュットランド海戦に於ける英獨兩國艦隊の魚雷發射數は合計百八十三隻の多數に上りましたが、實際に奏効したものは僅々三發に過ぎません。その原因は、元來敵艦隊に肉薄して行ふべき性質を有つてゐる水雷戰術を、兩艦隊とも一千米突乃至七千米突の遠距離から行うた點にあるのだと申すことあります。一九〇五年五月二十七日、對馬沖に於て行はれた凄慘言語に絶する夜襲戰は、多分世界の海戰史上に一つの新しい事例を與へたものでありませう。かゝる場合、赤道直下の海に於て演ぜらるべき夜襲戰に於ても、私は日本海軍の將士が、水雷戰術本來の機能發揮すべく餘りに怯懦であつて、過去の光榮ある戰績を塗抹するに、新らしき耻辱を以てするほど愚かであるとは考へません。否、私は、わが海軍軍人の卓越した技術と、比類なき勇氣とを信することに於て、今も昔も何等の相違ないことを告白して憚らない一人であります。彼等によつて指揮され、彼等によつて敢行される夜襲戰が、夜闇に包まれて恰も盲目にも等しくなつた敵の大艦隊を、如何に狼狽させ、如何に困惑させ、如何に

混亂させるかは、私の説くところを俟つて初めて知るべきことではありませんまい。

私は更にまた最悪な場合を想像いたしませう。連日連夜の防戦に疲れ、疲労困憊の極、ヨロ／＼になつた米國艦隊が、その大半の航程を終つて目的地近くまで進み着いた時、わが新鋭な主力艦隊が、その全勢力を舉げて敵前に現れたとしますれば、そこに展開される大海戦の結果は、果して米國海軍史の上に光榮ある數頁を加へることになるではありませんか。眞珠港を出發してから後、刻々變化してゆく敵艦隊の狀勢は、わが偵察艦によつて微細に報道せられ、日本の主力艦隊は確乎たる成算の出來上るまで、根據地の奥深く隠れて靜かに時期の至るを待つてゐるはずでありますから、彼等が進んで敵前に現れました時は、必ず敵艦隊を撃破し得る自信があるに相違ありません。あらゆる機會を敵に握られたことほど、災厄の大なるものはありませんまい。敵は勿論勇敢に戦ふであります。敵の戦術もまた輕蔑すべきものではないでせう。だが、戦果を齎すべき總ての條件から申しまして、敵のコンデイションが非常に不利であることは、殆んど争ふ餘地のない事實であります。殊に、彼等は一度傷い

たが最後、布哇以外に逃げ場所を有ちません。逃げ場所を有たないために、助かるべきものが助からないとなりますれば、彼等はトコトンまで死戦するより外はないであります。波洋作戦に失敗した結果が如何に慘憺たるものでありますかは、かのバルチック艦隊の最後を見ればよろしい。

名著『海上權力史論』の中で、マハン提督はナポレオンの英國侵入計畫を評し、「十中八九まで制海權を握つてゐる敵艦隊があるに拘らず、ブローニュからドーヴァーに至る幅員四十海里内外もある海面を、かかる大陸軍を以て横斷しようとするのは無謀極まる計畫で、どれほどの名將も、そんな飛び離れた業は出來まい。自分は、今でもそれが果してナポレオンの立てた計畫であるかどうかを疑つてゐる。」と申してゐます。ドーヴァー海峡の四十海里に聽いたマハン提督は、太平洋の四千八百海里を聽いて何と申すでありませう。指呼の近きにある英國に渡るのでさへ危険千萬であるのに、波濤三千里を隔てた比律賓へ渡るのが危険千萬でなくてどうしませう。現に、米西戦争の當時さへ、何等の障礙もない海上を経て二萬の陸

軍を比律賓へ送るのに、米國は非常な困難を感じたのでありました。

假に一から十まで米國のために都合よく運んで、米國艦隊が大瑕なく比律賓に到着しましたところで、それですぐ比律賓が奪還出来るといふわけのものではありません。比律賓には日本の忠實勇武な陸軍が頑張つて居ります。これを撃破するためには、超弩級戦艦では何の役にも立ちますまい。是非とも幾回かの陸戦を累ねる必要があります。その時日本軍は防禦陣地に着いて、最も有利な條件の下に、欣んで遠來の米國軍を迎へるでありませう。その戦ひに於て、日米兩軍の何れに戦捷者の光榮が與へられるかといふことは、特に諸君の御判断に委せます。條理によつて理解を難んずる事柄も、屢々直覺によつて容易に理解されることがあります。『極東の覇權』(Arthur J. Brown: The Mystery of The Far East.)に於て、日本及び日本人の知己アーサー・ゼー・ブラウンは「私は色々の國民の軍隊を見たが、未だ日本の軍隊に於けるほど烈しい教練を見たことはない。……日本の軍人は、英米の軍人ほど豊富な兵站を要しない。それでゐて彼等の忍耐強いことは、彼等の忠勇心に劣らない。……」

訓練の卓越、運動の敏活、秩序正しい行動、兵站や給與の完全、そして戦闘に於ける一般の能率に於て、矮少な日本人は、世界で最も秀れた戦士だ。」と申しました。世界で最も秀れた戦士であるかどうかは別問題としましても、より有利な地歩を占めてゐる日本軍が、その數に於て大差のない米國軍と戦つて、一敗地に塗れるほど弱兵だとは思はれません。

要するに、米軍が比律賓奪還の計畫を立てたとしますれば、それは彼等を迷はず一時的な夢の仕業だと申してよろしい。彼等も直ちに冷靜に返つて、そんな莫迦々々しい冒險は思ひ留まるに相違ありません。すると、彼等は戦局を自國にとつて有利なやうに導くため、比律賓奪還に代るものとして如何なることを企てるでありますか。パイウオーターの假想戦では、この時米國は小笠原群島の占領を企てて大失敗を演じ、止むなく鐐銜を轉じて、日本の南洋委任統治領を奪略するために全力を注ぐといふことになつて居ります。

日本と戦ふものが小笠原島に垂涎することは當然であります。比律賓の奪還が困難な程度に於ては、小笠原島の攻略も困難なはずであります。布哇と小笠原島との間の距離は三千

三百五十海里ほどありますが、その間の航路は矢張マリヤナ群島の諸叢島が側面から監視して居りますし、小笠原島と横須賀軍港との間は僅に五百三十海里でありまして、警電一下致しますと、横須賀軍港に居る日本艦隊は、一晝夜半ばかりの間に小笠原島へ到着することが出来ず。一九二五年の海軍大演習の時、米國艦隊は布哇攻防戦なるものを試みましたが、當時桑港の新聞紙サンデー・タイムスは、それを評して「某日本領に對する攻撃の豫習だ。」と申しました。多分小笠原島を意味するものでありませう。けれども、米國海軍によつて小笠原島を占領されることは、日本にとつては恰も匕首を咽喉笛に擬せられることになりまして、日本がさう容易く小笠原島を放棄するわけはありません。小笠原島の武備の現状については説明の限りではありませんが、假に、それがグアムと似たり寄つたりの程度だと致しましても、日本は開戦後に於て十分武装を完全にするだけの時日の餘裕を有つて居るはずであります。開戦後數日を出でずして攻略される立場にゐるグアムに較べますと、小笠原島は、この點に於て非常に有利な立場に居ります。米國艦隊が愈々眞珠港を出發しましてからでも、

日本は尙ほ多數の陸兵や彈藥銃砲を小笠原島へ送る餘地のあることは、布哇——小笠原、横須賀——小笠原兩地間の距離を比較して見ますと、一見して直ちに諒解され得ることです。日本艦隊が小笠原島に到着し得る時間を假に三十五時間と致しますと、米國艦隊が小笠原島に到着し得る時間は二百三十時間ほどになります。二百時間即ち八日強の餘裕がありますと、日本は自らなすべき最善の任務を十二分に遂行することが出来ませう。米國海軍に若し比律賓奪還を以て無益な冒險であると自省するだけの冷靜さがありますれば、彼等は必ずや小笠原島奪略の冒險をも思ひ留まるに相違ありません。

グアムや比律賓の奪還も不可能、小笠原島の占領もまた不可能だとなりますれば、次ぎに米國海軍のなすところは何でありませう。一部の杞憂論者の中には、この時米國が多數の陸兵を送つて北海道の占領を企てるかも知れないと主張するものもありますが、私は信じません。二千海里を隔てた本國から多數の陸兵をアラスカに送り、アラスカからまた二千海里を隔てた日本に差向けるといふことは、單に紙上の計畫であれば兎に角、事實としては迎も行

はれることではありません。さういふ無謀なことを企てますと、米國艦隊の運命は屹度第二のクアライ艦隊となるであります。だが私は、日本の北邊が全然安泰だとも思ひません。日本艦隊の行動を牽制する手段として、米國はキスカやウラナスカに駐泊する艦隊の一部に命じて、千島諸島や北海道の東海岸附近を遊弋させ、極北の氷海に出漁してゐる日本のトロール船を撃沈したり、北海道の東北岸に位置する落石無電局や根室港などを砲撃して、戦事の大局に通じない同胞を驚愕させることもあるであります。假令日本に對してはさほどの苦痛を與へないでも、自己の鬱憤を遣ふことに於て多少の意味さへあれば、この時期に於ける米國は、進んで總ての手段を盡すに相違ありません。併し、總ての手段を盡しましても、結局日本を屈服させるだけの力がないといふことになりますれば、米國も止むなく持久戦の腹を据ゑて、自然に日本が戦ひに疲れて来る時機を待つ外はありますまい。

日米間の戦争が持久模様になつた場合の米國の立場はどうであるかと申しますと、日本のそれに較べて、非常に不安焦慮を極めたものであるに相違ありません。戦争目的は、依然と

して日本の手に握られてゐる。グアムは取られる。比律賓は取られる。比律賓に於ける日本の地歩は、日を追うて段々堅實なものになつてゆく。日本は悠々として歐洲との貿易に従ひ、極東に於ける日本の活動は、戦前にも増して自由なものになる。日本艦隊は安全な自國の港灣に隠れて、米國艦隊の手持無沙汰を嗤つてゐる。グアムと比律賓とを日本に取られて痛く自尊心を傷けられた米本國の輿論は、彼等の海軍の無能を怒つて、さかんに怒號惡罵する。

——さうなつて参りますと、眞珠港にある米國艦隊の司令長官は、果して精神の平衡を喪はないだけの沈着さを持ち続けることが出来るでありますか。彼等にとつて最も苦痛とするところは、戦争が如何に長引きませうと、日本艦隊は自國の港灣にあつて十分な補給と休養とを得ることが出来ますが、米國艦隊は本國を距ること二千海里の絶海の小島にあることでもありますから、何かにつけて非常な不利と不便とを忍ばねばならず、従つて、艦隊の能率の上にも、日に日に憂ふべき結果が顯れて来るに相違ありません。殊に、彼等の一舉一動は斷へず日本艦隊の厳格な監視を受ける虞れがありますが、日本艦隊の所在に至つては不明で、

彼等の作戦の上には非常に困難な事情が錯綜するでありませう。米國艦隊の據るべきところは布哇以外にないといふ明白な事實と、日本艦隊の據るべきところはどこにあるか判らないといふ明白な事實とを對照して考へますと、兩者の利不利は、多く論ぜずして明かな事實であります。日本艦隊は、あるひは東京灣に居る場合もありませう。あるひは伊勢灣に居る場合もありませう。必要とあれば奄美大島に居る場合もありませう。馬尼拉灣に居る場合もありませう。東京灣に居る場合に、馬尼拉灣に居るものとして行動し、大島灣に居る場合に、伊勢灣に居るものとして行動致しますと、それは何等の收獲をも齎らさない徒勞として終るか、または非常な災厄を齎らす不幸として終るかでありませう。戦機を握つてゐる日本艦隊は必要に応じて二分または三分して行動することが出来ますが、常に日本艦隊の嚴重な監視の下に置かれてゐるべき米國艦隊は、若し二分または三分して行動致しますと、直ちに日本艦隊の各個撃破を受ける虞れがあります。彼等の不自由を極めた立場は、眞に同情するに餘りがあります。事ここに至りますと、米國艦隊は最早自重ばかりしてゐるわけには参りませ

ん。自國艦隊が傷かなくて、まだ數字上の優勢を維持してゐる間に、何等かの非常手段を用ひて、強ひて日本艦隊を誘き出し、堂々と一戦を交へるべく決意するでありませう。否應なく日本艦隊を誘き出すためには、彼等は何か日本の死命を制する重大事を案出したければなりません。東京灣の砲撃か、それは絶対に出来ません。小笠原島の占領か、それも先づ不可能であります。ヤルト島の攻略か、それは出来るかも知れませんが、必ずしも日本の死命を制するほどの重大事ではありません。さうなつて参りますと、彼等の手に残るものは、たゞ詭計による手段のみであります。日米間の戦争を描いて米國の勝利を結論しようと思ひましたバイウオーターは、米國艦隊の司令長官に代つてこの難問題の解決に苦心しました揚句、英國有数の海軍通であるといふ彼の聲名を犠牲に供してまで、稚想殆んど噴飯に値する假裝艦隊なるものを案出し、世の識者に物笑ひの種を供給致しました。彼の描いたところによりますと、假裝艦隊なるものは、米國の主力艦隊に似せて作つた商船隊でありまして、一見兩者の鑑別が付かないほど酷似してゐると申すのであります。英國有数の海軍通バイウ

オーターは、日本海軍の將士に就て十分な知識を有ち、その主著『太平洋の海權』に於て、日本海軍の將士に對する精緻な理解を披瀝してゐる人物であります。その人にして日本海軍の將士が徹頭徹尾假裝艦隊なるものに欺瞞され通したといふに至つては、唯啞然として評すべき言葉を知らないのであります。彼自身に致しますと、あるひは天來の妙想として得意の鼻を齧めかしてゐるかも知れませんが、一見兩者の鑑別がつかないほど酷似したものが出来るかどうか疑問でありますし、開戦後、それを西太平洋の戰場に廻航して、日本海軍の注意を喚起しないといふのも疑問であります。況んや日本海軍の將士が、幾度となく假想艦隊に欺かれて、遂に實體を看破しえなかつたといふに至りましては、あまりにも兒戯に類した想像でありまして、到底考慮の餘地がないのであります。何れに致しましても、否應なく日本艦隊を誘き出すためには、米國艦隊たるものよほどの、神算鬼籌をめぐらす必要がありません。

こゝに一つの策があります。彼は主力艦隊の一部を割いて外海に出動させ、それを囿とし

て日本艦隊を誘き出すのであります。その一部艦隊は勿論、日本の主力艦隊によつてのみ撃破され得るものでなければなりません。併し、日本艦隊は浮々と彼の手に乗るものではありませんまい。彼は十分に偵察し、十分に敵の動靜を探つた上、いよく安全だとの見定めがつかない限りは對手にならないに相違ありませんから、米國艦隊の本隊は、勢ひ一部艦隊の附近をうろづいてゐるわけには参りません。すると、この策を斷行するためには、一か八かの大冒險をやる覺悟が必要であります。天運米國艦隊にあれば、彼は首尾よく日本艦隊と一戦を交へる機會を得ることになりますが、天運若し米國艦隊になかつたならば、彼は自ら好んで艦隊の一部を死地に投ずることになりますのであります。

第十章 日本の攻勢的防禦

グアム及び比律賓を豫定のごとく占領した日本軍は、その後の時期に於て如何なる戰略を

執るでありませう。米國の難しとするところは、同時に日本の難しとするところでありまして、眞珠港に米國の強大な艦隊の儼存する限り、米本國を攻撃することは勿論、布哇を奪取することも出来ません。それかと申しまして、戦局の結果が及ぼすべき重大な事實に想ひを致しますと、假令日本海軍の攻撃的精神が旺盛でありましても、數字上米國の海軍力が明かに日本の海軍力の上にある間は、日本海軍としても容易に輕佻な行動を執ることは許されません。日本海軍は止むなく自重を強ひられることとなります。どこかの根據地に隠れて、その間の仕事は奇襲艦艇や機雷に任せ、ちつと自分に都合のいい時機の至るのを待つのであります。専門家は、かゝる策戦を以て攻勢的防禦(Offensive Defensive Plan)と申して居ります。

エッチ・ダブリュー・ウキルソンの書いた『戦艦交戦史』(H. W. Wilson: Battleships in Action.)に據りますと、歐洲大戰の初めに於て、獨逸皇帝は獨逸海軍に命令を下し、獨逸海軍の任務は、ヘリゴランド灣を封鎖してゐる英國艦隊を攻撃して損害を與へ、若し出来得れば、機雷または潜航艇によつて英國海岸まで進攻することにある旨を告げ、かゝる方法によ

つて勢力の均衡をえた後、わが艦隊は、全艦隊の勢力が集中され、且つ、戦闘準備が遺憾なく整うた時期を見計ひ、自分に都合のいい機会を捉へて敵艦隊と交戦すべく努めなければならぬ。……』と申したといふことであります。そのために獨逸海軍は久しい間ウキルヘルムスハーフェンの奥深く潜み、海上の戦事は擧げて機雷と潜航艇とに一任した形でありました。獨逸の策略は不幸にして實現するに至らず、獨逸は結局その海軍を全力的に活動せしめる機会なくして敗北の浮目を見たのであります。爾後獨逸は『陸に勇で、海に怯』であるままで酷評されるに至りましたが、獨逸の執つた策戦そのものが悪いものではありません。一つの策戦に粘着しすぎて、適當な時期に臨機應變の處置を執らなかつたことが悪いのであります。グアム及び比律賓の占領後、日本海軍の執るべき策戦として私の想像しましたことは、頗る獨逸海軍の先例に似て居ります。従つて、讀者諸君に不吉な聯想を強ひる虞れはありますが、仔細に兩者の形勢を比較いたしますと、單に形が似てゐるといふだけのことで、實質に於ては多大の相違があることを否み難いのであります。

何故なれば、獨逸艦隊が離伏することは、英國海軍の手に完全な制海権を與へることになります。日本海軍が自重することは、米國海軍の手に毫も制海権を與へることになりません。日本は西太平洋に於て依然のごとく制海権を有し、自國に必要な海面は、何等敵の脅威を蒙らないのであります。従つて、開戦當時の戰略的地位を維持するばかりでなく、開戦當時の貿易路をも維持することが出来ます。言葉を換えて申しますと、獨逸艦隊の離伏は、自國の封鎖を黙許することになります。日本艦隊の自重は、自國の封鎖を黙許することにはなりません。日本の海岸を距ること三千四百海里の遠きにある布哇の米國艦隊と、獨逸の海岸を距ること百五十海里乃至四百五十海里の近きにある英國艦隊とを比較して御覽なさい。一方が太平洋の中央に孤立して無援の心細さを示して居りますのに、一方はスカバ・フロー、クロマーチー、ロサイス、ハーウィツチ、シアアネス、ドーヴァーと相結んで、蜿蜒五百海里に互る連城の堅さを誇つてゐます。日本の艦隊保全主義(Fleet in Being)は一種の消極的攻撃であります。獨逸の艦隊保全主義は一種の消極的屈服であります。兩者の間に多大の本

質的相違があることは、この一事によつても十分に理解されるでありませう。

日本艦隊は攻勢的防禦を保持して、數字上のバランスが取れるまでは所謂艦隊保全主義を一貫するとともに、小笠原群島や南洋諸島を根據とする奇襲艦隊は、斷へず敵艦隊の動靜を探知して、好機あるごとに敵勢の削減を試みるでありませう。日本の主力艦隊は安全な根據地内に蓋伏することを許され易い立場にあります。米國の主力艦隊はさうばかりしてゐるわけにゆきません。彼等は好むと好まざるとに拘らず、日本に對して是非とも攻勢を執らなければならぬ立場にあります。彼等にして若し姑息安全をのみ求めますと、彼等は永久に戰勢を挽回する望みなく、戰爭は結局日本の捷利となつて終結を告げます。それは倨傲な米國人等の到底堪うところでないとしませれば、彼等是否應なく何事かを企圖する必要に迫られます。すると、眞珠港を根據とする米國艦隊も、自然安全な港内のみ蓋伏するわけには参りませぬ。彼等が果して動くとしませれば、その機會を待つてゐるものは當然日本の奇襲艦隊であります。歐洲大戰の時、ウエディゲン大尉の指揮する獨逸潛航艇「D」が、臨時

にして英艦アボキール、ホーグ、クレシーの三隻を撃沈したことは有名な話であります。今日の潜水艦が有つてゐる能力は、迎もその當時の獨逸潛航艦が有つてゐた能力などは較べものになりません。ブラッセー海軍年鑑に據りますと、日本海軍は排水量二千噸、航続力壹萬海里の潜水艦を保有してゐることです。わが伊號潜水艦の一部に至つては、そんな生温い航続力を有つてゐるものではありません。かゝる強力な潜水艦が縦横無盡な活躍を恣ひまゝにすることになりますと、米國艦隊にとつては多大の脅威であるに相違ありません。殊に、米國艦隊にとつて一層不利なことは、布哇には大艦を收容し得る船渠が唯一個しかありませんので、一度に多數傷つきますと、一々桑港かビニューゼットサウンドまで連れ戻さねばならぬといふことであります。

敵勢削減の一方法として、日本はまた機雷の敷設に盡力するであります。パイオターも、日本は必ずミッドウエーヤ、ウエーキヤ、眞珠港に機雷を敷設するに相違ないと申して居ります。敷設水雷の効果が決して輕視するを許しませんことは、日露戰爭の實例によつて

も明白であります。當時の日本艦隊は、一隻たりとも砲彈または魚雷によつて沈没したものはありませんでしたが、初瀬や八島を始めとして、多數の艦艇が敷設水雷のために沈没致しました。ウエルソンの調査に據りますと、歐洲大戰の期間を通じて英國海軍の喪失した各種艦艇の数は四十餘隻の多數に上りますが、その四分の一弱は敷設水雷の厄に罹つたものであります。これに徴して見ましても、日本海軍の執るべき策は、自ら諒解される筈であります。

大膽な推測が宥されますならば、この時期に於ける日本の奇襲艦艇の活動は、恐らくヤンキーの膽を寒からしめるほどのものがあらうと思ひます。彼等は進んで敵地に入り、巴奈馬や、桑港などの灣口に機雷を敷設することあるは勿論、歐洲大戰當時におけるイタリー人の例に倣ひ、死を賭した潜水艦は眞珠港の奥深く潜入して、首尾よく敵の主力艦を雷撃するやうなこともありませう。獨逸潜水艦「G」がスカバ・フローを脅かしたために、臆病なジョン・ブルが如何に驚いたかは戰史の明記するところでありませう。やすくとも離れ業を演ずることに於て、彼等の輕蔑するジャップは、決して彼等の後塵を拜するものではありません。パイ

ウォーターの假想戦では、この時日本の航空母艦が米國の西部海岸に現れて、ロス・アンゼルスや桑港の市街を空中から攻撃するやうなことが書かれてゐますが、さうしたことも全然あり得ないとは申されませぬ。けれども、彼が想像して居りますやうに、この時期に於て日本艦隊がサモアのツツイラを占領するために、艦隊の一部を割いて遠く南太平洋まで出動させるといふやうなことは、到底あり得べからざることだと思ひます。軍略上から見て、よほど必要な事情が起つて來ない限り、日本はさうした不急の冒險を試みるために、わざわざ自己の勢力を分割するやうな愚かな真似は致しません。ツツイラの存在が日本に與へますところの脅威は、極めて微々たるものであります。しかも、その地たるや猫嶺の小島でありまして、その上に假令日章旗を樹てて見たところで、大して日本の誇りにもなりません。日清戦争の時、日本が進んで臺灣や澎湖島に手を伸ばしましたのは、よほど戦局が終りに近づいてからのことでありませぬ。日露戦争の時でも、日本軍の樺太占領は、殆んど戦争の末期でありました。臺灣や樺太に較べますと、眞に九牛の一毛にも値しないツツイラを占領するため

努力するぐらゐであれば、日本は寧ろ數層倍の危険を冒しても、米國の手からウエーキやミッドウエーを挽ぎとるために努力するでありませう。ウエーキやミッドウエーを占領して終へば、さなくとも本國から遠く離れて補給や修理も不完全になり勝ちな米國艦隊は、さらにまた完全に孤立した拳大の小島に據ることとなりまして、その行動は一層不自由なものとなるに相違ありません。

外人側の手になつた日米戦争論を見ますと、彼等は殆んど口を揃へて日本のアラスカ占領を可能らしく説いて居ります。あるひは可能であるかも知れませんが、日本にとつて大した脅威とならない點では、ツツイラとアラスカとの間に多く選ぶところはあります。白熊の公園に過ぎないアラスカ本土は勿論、火山列島アリューシアンに致しましても、そこにわざわざ日本の強兵を送つて氷雪の難と戦はせねばならないほど、日本は強い誘惑を感じないはずであります。若し、キスカやウラナスカに駐泊する米國艦隊の悪戯が過ぎますと、日本も疋癩を起して彼等の根據地を砲撃するぐらゐのことはありませうが、それ以上深入りをして

まで北邊の瑣事に取合ふやうなことはありません。日露戦争の時でも、浦鹽を根拠とするロシアの快速巡洋艦數隻は、時に本州の東北海岸地方にまで現れたことがありましたが、沈没した日本艦隊は終始無關心な態度を執りました。

要するに、この時期に於ける日本艦隊の策戦は、機に乗じて敵艦隊の勢力滅殺に努力するとともに、斷へず敵國側に不快な刺戟を與へて思慮の平靜を喪はしめ、あはよくば敵艦隊の勢力を數分して、その各々を別個に撃破することにあると思ひます。それと同時に、日本は新占領地であるグアムや比律賓の奪還を防ぎ、自國の前哨地點たる小笠原島や南洋諸島の攻略を避けるため、出來得るかぎり武裝の完備を期するでありませう。パイウオーターの想像戦では、サモアのツツイラを發した四千人の米國軍によつてトラック島が陥くも占領されたやうに書かれて居りますが、よしトラック島一個が米國軍の手に落ちたからと申しまして、ポナペも、ヤルトも、ポロ／＼に落ちて終ふといふ道理はありません。殊に、トラック島に到達した米國の遠征軍が何等の抵抗をも受けないうで上陸することが出來たと申しますのは

不可思議極まることで、これらの島々が有する戰略的價値に就て十二分の關心を有つてゐるべきはすである日本の軍事當局が、そこに一臺の飛行機、一隻の潜水艦をも備へてゐなかつたといふことは、到底普通の常識では考へ得られないことでもあります。いづれに致しまして、日本は既得の地歩を確保するために、兵の足らないところへは兵を送り、砲の足らないところへは砲を送つて、萬一の場合に備へるでありませう。比律賓や、グアムや、小笠原諸島を金城湯池たらしめた曉には、假令日本海軍の助力を俟たないでも、彼等は、彼等自身の手で容易に敵襲を退けることが出來るでありませう。現在武裝を禁じられて居ります委任統治領の南洋諸島に致しましても、一たび日米兩國の間に兵變が勃發するといふことになりませうと、警報一下、日本は直ちに武裝に着手するでありませう。従つてパイウオーターの想像することく、布哇の米國艦隊が晨に一島を奪ひ、夕に一島を陥れ、それらの島々を踏石として、最後にグアム及び比律賓の奪還に邁進するといふやうなことは、勞のみ徒らに多くして、効果の頗る疑はしいことだと思ひます。殊に、米國海軍がとかく悠長な策戦に没頭して居り

ますと、一方に於ては志氣の沮喪を來し、一方に於ては日本海軍の思ふ壺に嵌まつて、その艦隊勢力を漸次に滅殺される虞れがあります。巧通は拙速に如かずと申す言葉があります。が、それは戦争の場合に於て特に然るを覺えるのでありまして、米國艦隊の見るところも、また、その點にあるだらうと思ひます。

この時期に於ける日米兩國の立場を簡約して申しますと、日本にとつては單に現状を維持すれば充分であります。米國にとつてはさういふわけに参りません。米國は進んで日本の制海權を奪略し、日本をして屈服の餘儀なきに至らしめなければ、現在に於ける自國の敗勢を挽回することは勿論、戦争原因たる極東問題を自國の主張通りに解決することも出来ません。日本から申しますと、グアムと比律賓とを奪つて差當り西太平洋の制海權さへ確保して置けば、それから後の仕事は大して急を要しないはずであります。何故なれば、日本の手に西太平洋の制海權さへ握つて居りますと、その間は少くとも戦争目的たる極東問題を自己の欲するまゝに處理することが出来ます。新領土は獲得する、極東問題は自由になる、しかも

歐洲との交通も先づ大丈夫だといふことになり、日本は何を苦しんで不急な決戦を敢てする必要がありません。日本は確實に捷利の見極めが付くまでちツとしてゐて、その間は極力手段を盡して現状の維持に努め、米國の動くのを待つて適宜の對策を講ずればよいのであります。だから、この時期に於ける米國艦隊は、日本艦隊に對して戦ひを強ひんとし、日本艦隊は、自ら好むにあらざれば、戦はざらんとするに相違ありません。歐洲大戰の初めに於ける英獨兩國艦隊の立場が、恰度この關係に酷似してゐると思ひます。

相互にハチ切れるやうな緊張を續けて睨み合ふばかりで、實際の戦合ひは少しも起らない、強いて手を出せば、出した方がどやしつけられる虞れがあるといふのは、この時期に於ける日米兩國の交戦状態でありませう。將棋で申しますと、いはゆる千日手といふ奴であります。將棋の場合には規則を以て制限することが出来ませんが、國と國との戦争ではどうすることも出来ません。アリアン人種はよほど氣が長いと見えまして、西洋史には三十年戦争とか百年戦争とか思ひ切つて長い戦争があります。米國も獨立の目的を達するためには、七年の長日

月に互つて苦戦奮闘致しました。そこになりますと、性急な、火山質の日本人は頗る危険なのでありまして、事が免倒になつて参りますれば、動もすると『えゝまゝよ』といふ捨鉢氣分になり易いのでありますが、日米戦争の場合には、決してさういふ輕舉妄動は許されません。事は國家の盛衰興亡に拘る重大問題であります。作戰一度誤れば、必勝の地にあつて、必敗の結果を招くこととなり、唾ひを千年の後に招くばかりでなく、祖先の努力によつて漸く築きあげた今日の國際的地位を失墜し、日本の勃興によつて折角解放の途につかんとする有色人種全體の望みを斷つたこととなります。日本人たるものは、如何なる場合に遭遇致しましても、斷じて持久戦に疲れないだけの覺悟を決めて置かなければなりません。

私の豫想から申しますと、日米兩國間の戦争は、極めて短期間に片付くか、それともまた極めて長期間に互るかであらうと思ひます。短期間に片付けば、勿論日本の勝利であります。が、長期間に互りましても、實質的には必ず日本の勝利となるであります。米國艦隊にして日本艦隊を撃滅しえない限りは、日本が確實に戦争目的を把握してゐることは、既に申述

べた通りであります。戦争目的を把握してさへ居りますれば、日本は戦争に勝つたも同様であります。日本はまた比律賓をも占領して居るはずであります。これは戦争の餘得として、決して輕視すべきものではありません。日本は曾て赫々たる勝利を遂げた報酬として、血の出るやうな苦しい談判をした結果、漸くにして樺太島の南半をえましたが、それに似べますと、比律賓諸島七千餘個の島々は、何といふ素張らしい獲物であります。極北不毛の荒原一萬四千方哩と、楊を切つて地に挿せば楊を生じ、竹を切つて地に挿せば竹を生じる南方膏腴の地十萬八千方哩とは、逆も日を同じうして語ることは出来ませぬ。戦争が如何に長く續きませうと、それだけに心を囚はれることなく、日本は進んで比律賓の開発に従事し、そこに餘剩人口の新しい捌け口を求むべきであります。比律賓さへ手に遣入りますと、日本は最早人口問題を解決したと申してもよろしい。一平方哩三百八十人以上の日本々土と、一平方哩一百人にも足りない比律賓とを較べますと、年に七十萬や八十萬ぐらゐる増える日本の人口は、優に比律賓に於て消化される計算であります。かく考へて参りますと、戦争が長引くことに

よつて受ける日本の苦痛は、決して大したものではありません。日本は、落付き拂つて米國との戦争に従ふべきであります。

けれども、日本艦隊は、斷じて獨逸艦隊にあらざることをも知らねばなりません。獨逸のごとく自國の艦隊を保全して置いて、最後に一々腕斗を付けて敵國に献上するといふやうな眞似は、到底日本人に出来る適當ではありません。大局の利益のために策戰の一形式として攻勢的防禦を執り、自國に有利な時機の來るまで艦隊の保全を計ると致しましても、一朝形勢に變あるか、若しくは事情止むをえない立場に立つと致しますれば、假令必敗の數明かな時であつても、日本艦隊は毅然として難局に當り、強大な米國艦隊を向うに廻して、堂々と一戦を交へるに躊躇するものではありません。況んや日本艦隊の胸中自ら成算あつて、米國艦隊の強大必ずしも怖るるに足らずと信じてゐるとしますれば、日本艦隊は欣然として戰鬪旗を掲げ、快く米國艦隊の挑戰に應ずるであります。假令推理の上に誤りはなからうと、戦ひを論ずるものは、徒らに敵の不幸や失策を打算の中に入れてはなりません。米國艦隊が

先天的に不利な戰略的地位にあることは上述の通りであります。私は茲姑らくそれらの一切を忘れ、某年某月某日、太平洋の某地點に於て、日米兩國艦隊が現有勢力のまゝで對戦したと致しませう。天候、氣象、その他戰果に影響を及ぼすべきすべての條件に於ては、日米兩國艦隊ともに平等だとして考へますと、その結果は果してどうでありませうか。米國の全勝することサンチャゴの海戦のごとくあるか、日本の全勝すること對馬沖の海戦のごとくあるか、それとも日米ともに勝たざることジユットランドの海戦のごとくあるか。——それに就て私の忌憚なき卑見を述べて見ませう。

第十一章 日米海軍の實質

日米海戦の結果に就て判斷しようと致しますれば、最後の勝敗を決する最も直接的な要素ともいふべき日米兩國艦隊の實質に就て考へて見なければなりません。

表面上日米兩國の主力艦隊は三對五といふ事になつては居りますが、海戦の結果を左右するものは單に主力艦ばかりではなく、主力艦を補佐して全機能を發揮せしめる巡洋艦も必要であれば、主力艦の活動と相俟つて敵艦攻撃の一役を承る奇襲艦艇も必要であります。従つて、日米兩國艦隊の實質に就て考へて見ようと思ひますれば、艦隊と稱する一つの戦闘單位を形成する個々の要素に就て考へ、その各々の要素が具備する實際上の力を比較して見なければなりません。

私は先づ第一に日米兩國の主力艦を比較して見ませう。

米國の主力艦十八隻に對して日本の主力艦は十隻でありますから、數字の上では、米國の方が絶対に優勢であります。併し、米國の主力艦中には艦齡十五個年以上主砲十二吋の老齡艦ワイオミング、アルカンサス、ユータ、フロリダの四隻がありまして、それらは到底西太平洋の戦場に出ることは不可能であらうと想像されてゐますので、その四隻を控除致しますと、米國の主力艦は總數十四隻といふことになります。すると日米主力艦の比率は一應三對

五となつて居りますが、實際は三對四・二ぐらゐだと見られないこともありません。バイウオーターの假想戦ではアルカンサスとユータとが抜けて、米國の主力艦隊は總數十六隻となつて居ります。何れに致しましても、米國の主力艦十八隻全體が戦場に出て來ることは先づ以て難しいものと見なければなりません。殊に布哇のごとく大船渠の設備に乏しい根據地に居りますと、米國の主力艦全體が常に健全な状態に於て顔を揃へてゐるとは考へられないことでもあります。ジュットランド海戦の時でも、獨逸の巡洋戦艦サイドリッツは入渠中であり、戦艦ケーニヒ・アルベルトは復水器に故障が出來て、ともに戦場に出ることが出來ないため、司令長官シェーア提督の痛心は同情に値するものがあつたといふことであります。

日本の主力艦が戦艦と巡洋戦艦との二種に分れてゐますことは周知の事實であります。米國の主力艦は全然戦艦のみで成立して居り、巡洋戦艦は皆無であります。だから普通の偵察艦隊は皆巡洋戦艦から成立する習慣であります。米國の偵察艦隊は第三線に屬する戦艦「ニューヨーク」以下六隻を以て編成されてゐます。元來、巡洋戦艦の艦型は、一九〇七年英國

に於て創案されたものでありまして、最初のものにはインヴィンシブル級三隻でありますが一
 嚴格に申しますと、千九〇五年日露戦役中に日本海軍が立案した筑波、生駒の二艦は、イン
 ヴィンシブル級三隻の先驅をなすものと見られないこともありません。米國に於ても四萬三
 千五百噸のコンステレーション以下六隻が計畫されておりましたが、それらの總ては華府會議
 の結果として廢棄されました。この種の艦型を缺くといふことは、實戦の場合に種々の不
 都合が起るだらうと申すのが軍事専門家の定論となつてゐます。

巡洋戦艦は別と致しまして、日米の戦艦を比較して見ますと、米國主力艦の速力は二十
 節半から二十二節の範圍でありますのに、日本主力艦の速力は、最も脚の遅い扶桑でも二十
 二節半、その他のものは皆二十三節の速力を有つて居りまして、日本の方が遙かに優れてゐ
 るのであります。殊に、日本の巡洋戦艦四隻に至りましては、實に二十七節半といふ驚くべ
 き快速力を有つて居ります。前にも申しましたごとく、米國主力艦隊の平均速力二十一節、
 弱に對して、日本主力艦隊の平均速力は二十四節七分といふことになりますので、それが實

戦の場合にどういふ結果を將來致しますかと申しますと、即ち日本艦隊は都合のいい間は何
 處までも應戦するが、都合の悪くなつた時には何時たりとも應戦を辭退して引揚げる、日本
 艦隊にとつては寔に便利のいい結果が生じて來るのであります。米國艦隊から見ますと頗る
 割の悪い話でありまして、勝ち戦さの時には逃げられ、負け戦さの時にはトコトンまで遣つ
 つけられるといふことになるのであります。戦史の明記するところに據りますと、對馬海戦
 の時バルチック艦隊の平均速力は十一節位で、日本艦隊の平均速力は十六節位であつた
 といふことであります。バルチック艦隊の全滅するに至つた主なる理由の一つには、必ず
 や速力の遅かつたといふことも數へられるに相違ありません。

日米兩國の主力艦を比較するに當つて、今一つ逸してならないのは、日本主力艦の射程が
 儘かに米國主力艦の上にあるといふことであります。勿論、射程の如何は各國海軍の秘密事
 項に屬してゐますので、局外者に悉しいことが判らう筈はありませんが、パイウオーターな
 どは微細な數字まで擧げて説明して居ります。華府會議の後、このことを非常に氣に病みま

した米國は、所謂仰角引上問題なるものを惹き起して、一時政界に喧ましく取沙汰されました。結局上院議員マツケラーが、米國上院に海軍豫算案修正の形式で戦艦十三隻、備砲仰角引上を提案するまでになりましたが、「仰角引上は華府條約の違反にはならないが、軍縮の精神に反する。」といふヒューズ國務卿の意見が勝を占め、米國上院は大多數を以てマツケラーの修正案を否決しました。一見致しますと、射程の遠近などは大した問題でないやうにも思はれますが、最近の海戦に於けるごとく、一方は出来るだけ一方の射程外に於て戦はふとする傾向が甚しくなつて参りますと、決して輕々しく看過することの出来ない問題であります。假に日米兩國艦隊が會戦致しました時、日本艦隊が優秀な速力と射程とを併せ利用致しまして、終始敵艦隊の射程外にあつて戦うたと致しますれば、その結果は米國艦隊にとつて頗る惨めなものとなつて参ります。敵の砲弾ばかりを浴せかけられて、自分の砲弾は一發も敵の頭上に達しないと致しますれば、これくらゐつまらないことはありますまい。勿論、實戦の場合に於てはさういふ論理的な過程は現れ悪いでありませうが、何かにつけて非常な損

のあることは否定出来ません。一九二五年の海軍大演習の後、米國海軍聯盟が一篇の檄文を草し、「日英主力艦の射程が遙かに優勢なため、米國主力艦の戦闘力は不十分になつてゐる。それは一に大統領クローリツチが、米國戦艦の備砲仰角擴大に對する英國の抗議に屈服したからだ。」と毒付いてゐます。向うの立場になつて考へますと、寔に無理からぬことだと思ひます。

以上は日米兩國の主力艦を比較して、その長短に就ての概括的な觀察を試みたのであります。大體に於て米國側の方に何かの缺點が多いやうに思ひます。米國の海軍聯盟は、その外にも機關装置の劣弱なことが、米國海軍最大の缺陷だと申して居りますが、その點に就てはどうか判りません。何れに致しましても、米國では自國の主力艦に對する懸念が斷えないと見えまして、新式戦艦五隻に新らしく五時の高角砲を備へたり、ユータ、フロリダ以下七戦艦に重油専燒罐の取付けと甲板及び水中防禦を増加したり、ニューヨーク、テキサスの二艦に新式砲火指揮装置を試みたり致しまして、出来るだけ自國主力艦の缺點を補はふと致し

て居ります。ジユットランド海戦の時、ヒツベル提督の率ひる獨逸の巡洋戦艦隊と、ピーチイ提督の率ひる英國の巡洋戦艦隊との間に數時間に亘る交戦がありました。その時同じ巡洋戦艦でありながら、英國の巡洋戦艦は極めて脆く撃沈されましたが、その主なる理由の一つとしては、英國の巡洋戦艦の上甲板防禦装置が極めて劣弱であつたと言ふことが數へられてゐます。従つて、軍艦そのものの強弱は、決して表面的な噸數や砲數の上にはかりあるものではありません。この意味に於て考へますと、速力と射程とに於て大いに優秀を示し、巡洋戦艦と稱する特殊な艦型をも具備してゐる日本の主力艦隊は、その實勢力に於て、必ずしも米國主力艦隊の低位にあるものだとはいふ出来ないと思ひます。

第二に私は日米兩國の巡洋艦を比較して見ませう。

對馬海戦の結果が大艦巨砲主義を確定化し、一九〇六年英國が眞先きにドレツドノート型の巨艦を作つて世界の海軍國をアツト言はせましてから此方、列強の製艦方針は擧つて大艦巨砲の一點張りで突進したのであります。そこへ歐洲大戰が勃發して明白に大艦巨砲の威力

を實驗して見せて呉れましたから、今日では唯主力艦と稱する大艦隊だけで海軍力を算定するやうにさへなつたのであります。ジユットランドの海戦は、有史以來の大海戦でありまして、英獨兩國の軍艦が總數四百隻近くも參加したと言はれてゐますが、その時にも大艦巨砲の威力は完全に發揮され、英國の巡洋戦艦クキン・メリーは獨逸巡洋戦艦デルフィンゲルの打つた十二吋砲弾二發を受けて沈没し、同じく巡洋戦艦インデファチガブルは獨逸巡洋戦艦フォン・デア・タンの打つた十一吋砲弾二發を受けて沈没し、ピーチイ提督の旗艦ライオンでさへ、ヒツベル提督の旗艦リュツツオの打つた一發の砲弾のために、後部砲塔蓋を破壊され殆んど沈没に瀕したぐらゐでありました。けれども、いくら大艦巨砲が結構でありませうと、それだけでは到底戦争は出来ません。矢張主力艦の手となり、足となり、眼となつて、主力艦の機能を充分に發揮させる巡洋艦や驅逐艦のことが必要であります。ジユットランド海戦の時でも、獨逸側に巡洋艦の少なかつたのは惜むべきこととされて居りますが、それと同様な事實が對馬海戦の時にも現れて居ります。御存じのごとく、主力艦だ

けを較べますと、バルチック艦隊の實力は、たしかに日本艦隊の實力の上にあります。が、
 その他の補助艦隊の實力に於ては、前者は遠く後者に及びませんでした。然るに米國艦隊を
 見ますと、その主力艦の勢力は如何にも強大でありますのに、最も重要な補助艦とも言ふべ
 き巡洋艦の勢力は比較的弱勢でありまして、オハマ級七千五百噸のものが十隻と、一萬噸級
 未成艦八隻と、合計十八隻しかありませんが、日本には妙高以下一萬噸級八隻と、加古以下
 七千五百噸級四隻との精銳に加ふるに、五千五百噸の木曾級、三千五百噸の龍田級、五千五
 百七十噸の長良級まで加算致しますと、總計三十隻に近い新式巡洋艦がありまして、遙かに
 米國の上に出てゐるのであります。殊に、同じ七千五百噸級でありまして、米國のオハマ
 級は六吋砲十二門を搭載して居りますが、日本の加古級は八吋砲六門を搭載して居りますの
 で、その實質に於ても非常な相違があります。これを要するに、巡洋艦に於て非常な劣勢を
 示して居りますことは、米國海軍の上存する一大弱點であります。

いささか餘談に互りますが、實に製艦術の進歩ほど驚くべきものはありません。米國の海

軍委員フレデリック・シー・ヒックスは會て軍備縮少を論ずる文章の一節に於て、「目下建造中
 の巡洋戰艦コンスチテューションの代價に就て興味ある比較を試みる事が出来る。」と言
 ひ、さらに語を續けて、「我國は會て同名のフリゲート型軍艦を有し、それが當時の誇りであ
 ったことは小學生も熟知するところであるが、その建造費は僅かに三十萬弗であつた。新コ
 ンスチテューションの建造費三千八百萬弗に較べて如何の感があるか。これは過去百二十五年
 間に軍艦の建造が如何に大なる進歩をしたかを物語るものである。」と申して居ります。が、
 日露戰爭時代の最優艦三笠級の排水量一萬五千噸、速力十八節、十二吋主砲四門と、現代の
 最優艦陸奥級の排水量三萬三千八百噸、速力二十三節、十六吋主砲八門とを比較して見ます
 れば、その間に何といふ驚くべき進歩があることとありませう。今日の妙高級一萬噸巡洋艦
 と三笠級戰艦とを比較して見ましても、前者の速力三十三節、八吋主砲十門は、到底後者の
 遠く及びえないところでありまして、その實力の相違に至つては、殆んど二對一に近いもの
 があるであります。米國電報の傳へるところに據りますと、最近獨逸で完成された新巡洋

艦エルザツツ・プロイセン（最近に至つてフォン・シエーアと改名）のときは、その排水量僅かに九千噸であるに拘らず、速力二十六節、十一吋主砲六門、射程三萬ヤード、航續距離一萬海里と稱せられ、世界の造艦界を驚倒させて居りますが、この勢ひを以て進みますと、將來の軍艦は、遂に精巧無比な一種の魔術器化する時代が来るに相違ありません。話の本筋に立ち返ることと致しまして、次に、私は日米兩國の驅逐艦を比較して見ませう。

米國は世界第一の驅逐艦保有國であります。總數三百隻の上を超え、英國の約二倍、日本の約三倍を有することになります。米國が何故それほど澤山の驅逐艦を保有するに至つたかと申しますと、元來の考へでは、巡洋艦の足らないところを驅逐艦によつて補はふといふ肚であつたらしいのであります。けれども、御存知のごとく驅逐艦は艦體も小さく、航續力も貧弱で、従つて乗組員は非常に疲勞するものでありますから、逆も巡洋艦の代理を勤めると言つたやうな便利なことは出来ません。巡洋艦には巡洋艦特有の職能があり、驅逐艦には

驅逐艦特有の職能があるべきはすであります。驅逐艦の貧弱な武装を以て致しますと、日本の優勢な巡洋艦に出會はせば、いつでも逃げてばかり居らなければなりません。こゝに鑑みるところがありましたものか、米國海軍聯盟は、曾て聲明書を發し、「驅逐艦を以て巡洋艦を代理せしめることは不可能である。」と申しました。殊に、米國驅逐艦の總數は三百隻以上もありますが、その中で航洋性を有する新式驅逐艦の數は百三四十隻ぐらゐのものだといふことでもありますから、これに對抗する日本の驅逐艦既成未成約七十隻を以て致しますれば、兩者の勢力比は略二對一の程度となります。何れに致しましても、驅逐艦の點に於ては日本に較べますと、米國の方が極度の優勢を示してゐることは争へない事實であります。

最後に残りますのは航空母艦と潜水艦とであります。前者は華府會議の結果、日本八萬一千噸、米國十三萬五千噸といふことになつて居りますが、目下のところでは日本の加賀、赤城に對するものは、米國のサラトガ、レキシントンであります。いづれも最新式の航空母艦でありまして、加賀、赤城の二萬六千九百噸に對し、サラトガ、レキシントンは三萬三千噸

の優勢を示して居りますが、最近の研究に據りますと、航空母艦の艦型が徒らに大に過ぎるのは反つて都合がわるく、寧ろ日本の鳳翔級を以て適當とするやうに申されてゐます。従つて、今後は兩國ともに華府條約の範圍外にある小母艦を多く保有するやうになるでありません。現に、一九二五年度の年次報告に於て、米國海軍卿ウキルバーは、布哇大演習の際に於けるラングレー（排水量一萬二千七百噸）の有力な活動振を賞讃し、將來必要なのは此種の航空母艦であると申して居ります。

潜水艦も、數の上では、日本の約八十隻に對して、米國の約百三十隻は大いに優勢を示して居りますが、その中で排水量一千噸以上の航洋潜水艦と稱するものは、日本の既成未製約二十五隻に對して、米國は僅かに七八隻を有するに過ぎないのであります。殊に、伊號第一から第五に至る大型潜水艦のごときは、排水噸數一千九百七十噸を有し、航續距離一萬數千海里に及びまして、最近に英國海軍が建造致しました三千噸級の潜水艦以外、この威力に匹敵するものはないと申されてゐるのであります。今南洋委任統治諸島のある一島を中心とし

て日本潜水艦の活動範圍を想像しますと、兩米大陸の沿岸は概ね日本潜水艦の活動範圍となります。歐洲大戰の時一隻の巡洋艦エムデンを追ひ駆けるのに七十三隻の聯合國側の軍艦を使用したと申しますが、さういふ風に日本潜水艦が縱横無盡にあればまわりますと、自由自在に米國の西海岸を脅かすことが出来ます。殊に、最近の潜水艦は、母艦を離れて少くとも廿日間ぐらゐは活動出来ると申されて居りますので、潜水艦の能率は愈々高まつて參るわけがあります。いはゆるUボートの活動が、如何に大戰時の聯合國を苦しめたかは、こゝに説明するまでもありません。『弱國の武器』(The Weapon of the Weaker Party)と稱せられる潜水艦に於て、日本がはるかに米國の上にあるといふことは、極めて慶賀すべきことだと思ひます。何事に就ても一言なかるべからざる米國海軍聯盟は、『日本の潜水艦は近く廿三隻三萬六千噸を有するに對し、米國の潜水艦は漸く七隻一萬二千噸を有するに過ぎず。』と大聲叱呼致して居ります。

日本海軍は、日清戰役以後各單位は少くともその時代に於ける最良艦に匹敵し得るものを

作り、多数の劣勢艦を作るよりも、寧ろ少数の優良艦を作る方針を以て殆んど傳統的な政策としたのであります。この結果は日露戦役に於て現れ、日本の主力艦は數に於て劣つてゐましたが、各單位が優勢であるために、實戦の場合に非常な便利をえたのであります。日本艦隊が所謂釣合ひよき艦隊である所以も、またこの點に原因するものだらうと思ひます。

全體の上から見ますれば、米國の艦隊は如何にも雄大であります。その實質に幾多の缺陷があることは否定出来ない事實であります。驅逐艦が莫迦に多いかと思ひますと、巡洋艦が莫迦に少ない。戦艦が強勢であるかと思ひますと、巡洋戦艦が一隻もないといふ風であります。これに較べますと、日本の艦隊は比較的劣勢ではあります。全體の均衡がとれてゐる。一つの纏まつた組織としての完璧さを備へて居ります。一昨年横濱沖で行はれました觀艦式の時、某外國通信記者は、『日本の海軍當局者がかくのごとく釣合ひよき艦隊 (Well balanced Fleet) を若き皇帝の御覽に入れ得るといふことは、大いに誇つてもいいことだ。』と申しましたが、要するに日本海軍の長所は、そのよく釣合ひのとれたところにあらうと思ひます。

一個の人間に例へて申しますと、日本艦隊は四肢軀幹の各部分が平均の發達を遂げてゐる體格強壯な男子であります。米國艦隊は身長と體重とが拔群であるばかりで、四肢軀幹の各部分が極度に不平均な發達を遂げてゐる脂肪性肥滿質の大男のやうなものであります。見たところは如何にも丈夫さうであります。いつ心臓麻痺や腦溢血が来るか判らない非常に危険な體格であります。かういふ點を頭に容れて考へますと、日米兩國艦隊の勢力比は、表面上は三對五といふことになつて居りますが、實質上は四對五、または三對四ぐらゐのものであらうと思はれます。然るに前に申しましたノックス大佐のときは、また別の論據から推定して、『西太平洋に於ける日本の海軍力は、米國の五に對して六である。』と申して居ります。米國の海軍専門家の中で、ノックス大佐のごとき見解を把持するものは極めて多いのであります。一九二四年の末、米國海軍卿ウキルパーも米國議會に於て演説し、『英國海軍が米國沿岸に來た場合は、米國海軍は英國海軍よりも優勢である。米國海軍が歐洲に赴いた時

は、英國海軍は米國海軍よりも優勢である。日本海軍が米國近海に來航した時は、米國海軍は日本海軍よりも極度に優勢である。米國海軍が日本近海に赴いた時は、米國海軍は日本海軍よりも稍劣勢である。」と申しましたが、この言明を以て必ずしも一時の方便的辭令だとのみは考へられません。何れに致しましたが、西太平洋に於て戦ふ限り、日米兩國艦隊の勢力の上に、さう大した底のないことは明かな事實であります。

第十二章 砲後の人

日米兩國艦隊の勢力の上にさう大した相違がないといふことになりすれば、勝敗の鍵を握るものは結局軍艦を操縦して、これに生命を與へる人間だといふことになります。軍艦ばかりが如何に結構でありましても、萬人形の乗つた軍艦では、何事も出来ようはずはありません。素人に限つて、現代の戦争は唯だ機械の戦争だ、機械さへよろしければ人間などはどう

でもいいと言はないばかりに申しますが、戦争の實質を精査すればするほど、如何に機械が発達致しませうと、最後の勝敗を決するものは、矢張り人間であるといふことを信じないではおられないやうになるのであります。言葉を換へて申しますと、近代の戦争と雖も、完全に科學的な數理の上のみ立つてゐるものではない。封建時代の戦争と同様に、そこにはまだまだ多量の人間の要素が含まれてゐるのであります。東郷元帥は屢々「その國の兵を見るに、彼等が果して實戦に堪へ得るかどうか、一目して諒解することが出来る。」と言ふ意味のことを申されてゐますが、この實戦に堪へるといふ言葉の中には、恐らく二様の意義が含まれてゐるだらうと思ひます。第一には、彼等の技能が果して實戦に堪へ得るかどうかといふことで、第二には、彼等の精神が果して實戦に堪へ得るかどうかといふことであります。技能と精神との兩方面に於て缺くところのないものは典型的な強兵でありまして、歴史の記載するところに従ひますれば、その適例として擧ぐべきものは、古代羅馬の軍團や、那翁麾下の砲兵聯隊のごときものでありませう。對馬海戦の當時でありましたが、一時「砲後の人」

(Man behind Gun)といふ言葉が世界的に流行したことがあります。對馬海戦の歴史的結果を見て、その原因は軍艦や砲の数の如何にあるのではない、その砲を操縦する砲手の素質如何にあるのだといふ見解から、世界の識者が擧つて日本海軍の戦士を賞讃したことからは起つた言葉であります。實戦の結果を測定するに當つて、先づ「砲後の人」如何を考察することは、今後に於て益々必要でこそあれ、決して不必要ではないのであります。

私は先づ戦士の技能といふことに就て考へて見ませう。

戦士の技能の中でも最も大切なものは砲術であります。歐洲大戦の時、英獨兩國海軍は一九一四年八月廿八日のヘリゴランド海戦以來數度の戦ひを戦ひましたが、その結果を総合して見ますと、英國海軍の砲術が著しく獨逸海軍の砲術の下位にあつたことは疑ふ餘地のない事實のやうであります。エツチ・ダブリュー・ウキルソンも、この點に就ては屢々遺憾の意を表し、「コロネルに於ても、フリークランドに於ても、ドツガー・ペンクに於ても、ジュツトランドの巡洋戦艦隊の交戦に於ても、英國艦隊の砲火は、獨逸艦隊のそれに較べて遅く、且

つ照準不正確であつた。』(At Coronel, at the Falkland, at the Dogger Bank, and in the battle cruiser fight at Jutland, the British fire was slow in getting on the target and the British hits were few in comparison with the German.)と明言して居ります。コロネル海戦のときは兩國艦隊の勢力にさしたる徑底がないにも拘らず、纔に五十分間の交戦の後、英國艦隊は殆んど全滅の厄を蒙つたのでありますが、その結果は全く砲術の拙劣にあつたと申しましても過言ではありますまい。ウキルソンの記載するところに據りますと、スペーの率ゐる獨逸艦隊は十五秒間毎に一回の齊射をしたのに反し、クラドツクの率ゐる英國艦隊は五十秒間に一回の齊射をした勘定で、獨逸艦隊の射撃力は、全く英國艦隊のそれに三倍して居たと申すことあります。ジュツトランドの巡洋戦艦隊の交戦では、英國艦隊の勢力が遙かに獨逸艦隊の上にあつたことは疑ふべからざる事實であります。然るに交戦の結果を見ますと、開戦後約四十分の間に英國艦隊は少くとも三十四五の命中弾を受け、インデファアチガブル、クキン・メリーの二艦は相續いて沈没し、且つ旗艦ライオンは後部の砲塔蓋を破壊されて、戦

闘力の殆んど半ばを喪うて居りましたが、獨逸艦隊は中に多少の命中弾を受けたものがあるだけで、特に指摘すべきほどの損害を蒙つたものは一隻もなかつたのであります。この原因に就てゼリコー提督は四五の事實を擧げて居りますが、その主要の原因は矢張砲術の拙劣といふことにあつたのであります。信憑すべき記述に據りますと、獨逸艦隊は二十秒乃至二十五秒に一回の割合ひで齊射を試みましたが、それに對する英國艦隊の齊射は極めて遅く、且つ照準不正確で、獨逸艦隊が四回の齊射を試みる間に、英艦隊ライオンは漸く二回の齊射を試みたに過ぎないといふことであります。すると英獨兩國艦隊の射撃力は一對二となりますので、獨逸の一艦はよく英國の二艦に對抗することが出来ることになりました。こんな惨めな状態では、英人ウエルソンが、『ネルソン時代の英國海員は、敵の一發に對してよく三發を酬ひることが出来た。然るに、この戦ひでは、敵の三發に對して僅かに一發しか酬ひることが出来なかつた。』と言ひ、光榮ある過去の海戦史を想ひ出して慨歎するのも寔に無理からんことであります。

砲術に就て日本海軍の戦士が如何なる地位にあるかは、日清日露の兩戦役に於ける海戦の結果が明かにこれを示して居ります。日清戦争時代には、日本の砲撃力が正しく敵に三倍して居りましたとは、對馬海戦の直前、東郷提督が聯合艦隊の戦士に對して下した訓示に依ても明かな事實であります。それが日露戦役に於ては殊に花々しい効果を顯はしまして、對馬海戦の際に於ける日本艦隊の射撃の正確且つ迅速であつたとは普ねく世界の海戦史が特筆大書する所であります。戦後、露艦スワロフの一士官メモノフは、『自分は今までに彼のやうな砲火を見たこともなければ、想像したこともない。彈丸は後から後からと、斷え間なく吾人の頭上に注ぎかけられた。……』(Never before had I witnessed such a fire, I had never even imagined anything like it. Shells seemed to be pouring upon us in cessantly, one after another……)と申しましたが、その神速優秀な砲術が、『三十八隻の艦艇から成る露國艦隊を戰術的意味に於て全滅せしめ、三人の司令官中二人まで捕虜とした』(Thus the Russian Fleet of thirty-eight vessels was in the naval sense annihilated, and two of its three admirals